

川柳塔

昭和五十八年十一月二十五日 印刷
昭和五十八年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六七八号



日川協加盟

No. 678

同人特集・あなたにとって川柳は

十一月号

気どったカッ コウはきらいだ、
 思いのままに
 装うのはいいものだ、
 熱い心を満たす
 オースケージエフ



OSK JEFF
 ORIGINAL DESIGN

株式会社 **オースケ**

日刊

電波新聞

投稿欄案内

川柳

選者・橘高薫風
 (掲載日) 毎週水・土曜日

俳句

選者・小寺正三
 (掲載日) 毎週火・金曜日

短歌

選者・佐々木信夫
 (掲載日) 毎週月・木曜日

〈投稿規定〉

はがき一枚に三句(一首)以内(川柳・俳句・短歌と
 明示すること)。投稿随時。

自由課題・秀句には掲載紙贈呈。

〈投稿先〉

〒530-0000 大阪市北区中之島三丁目・朝日新聞
 ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」にて。

喜寿傘寿

西尾 栞

昭和五十八年九月二十五日は、
北陸の小松市の伊藤茶仏氏と

山陰の出雲市の尼緑之助氏とが、共に
句集を刊行された洵に意義深い日であつ
た。

お二人は川柳塔の参事であり、故麻生
路郎門の逸足である。

しかも茶仏氏は傘寿を、緑之助氏は喜
寿を祝しての発刊であった。

茶仏氏の句集の題は「道祖神」という
ユニークな題で、茶仏氏の人柄と風貌が
ピッタリで、曾て、小松老人ホーム松寿

園の前庭に、

平凡にこの世を生きるむずかしさ
という句碑を建立された。

緑之助氏の句集の題は「生かされて」
という謙虚な題で、氏の詠句のように、
天と地とはさまにふわり生かされて、と
いう飄々たる風貌とピッタリで、十年前
日御崎の国立公園に

灯台の夕陽神話を抱きよせる
という句碑を建立された。

それに一方茶仏氏は、雑誌「川柳わか
まつ」を、又、緑之助氏は同じく「川柳
いずも」を主宰されて、後人を育成され
我が国柳界の第一人者として指導してお
られることも、亦奇しき縁である。

人生句に目覚め、句に生き、句を生涯
として暮されたお二人は、句碑を建立し
句集を発刊されることは、生涯の最高最
良の事蹟であり最上最善の慶事である。

恩師路郎の指導は個性を生かし、独自
に生きることであつた。

茶仏氏の母孝行の句は読む者をして肺
腑をつくものがある。例えば

ことりともせぬ母がいて有難し
母やがて七十七の顔のつや

桐箱の紐を上手に結ぶ母

また、緑之助氏の詩情豊かな句は読む
者をして、詩の世界に没るものである。

例えば

石露のあかるさ鶏がきて坐り

白壁のうれい春雷しきりなり

傾いてバスが曲つた青葉風

どちらも楽しい句集であり、勉強の糧

となり血となり肉となる名句佳吟である。

是非座右に置かれんことを祈る次第であ
る。

母の句に感激をして目がうるむ

喜寿やよし生かされました句集なる

栞

座右の句

うるむ目と乾く目で見る世相たり

(美代)

私の句

振り向けばとき開く遠花火

藤田泰子

川柳塔 十一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原主青

喜寿傘寿

西尾 栞 (1)

思慕・梅田界限

黒川 紫香 (2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 栞選 (4)

自選集

東野 大八 (29)

■川柳太平記 (66) 《川柳の群像》 松村柳珍堂

黒川 紫香選 (32)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (十三丁・十四丁)

黒川 紫香選 (34)

水煙抄

直原 七面山 (36)

秀句鑑賞

同人吟

大矢 十郎 (53)

愛染帖

水煙抄

橘高 薫風選 (59)

■同人特集アンケート 路郎賞受賞者に聞く

橋高 薫風選 (54)

思慕・梅田界限

黒川 紫香

「大阪も変わったもののう」

隣りに居たお婆さんが頓狂な声で言った。
最近出来たアクティ大阪(大阪駅ビル)の二
十七階展望所で何となしに風景を見下してい
た時の事である。成程大阪も変わったもので
高層ビルが林立し、高所から見ると大阪も見慣
れて来た私ではあったが、其の言葉にふと感
傷を覚えた。

そう言えば私が阪急電鉄に勤め出した大正
の末期、此処から見える淀川大橋も車が通れ
ば揺れるちゃちなものだったし、河原では弁
当を拵けて飲めや唄えやの宴も聞いていた。
この真下の大阪駅も梅田ステーションとして
親しまれ、総石造りで両翼のついた明治の匂
いがプンプンする瀟洒な建物だった。其の前
に人力車がずらり並んで客待ちをしていた。
中には相乗りの車もあって粹な男女の客が道
行としやれたと言ふ。

また前方を市電が走り片道五銭の運賃が朝
七時迄に乗ると七銭で往復切符を呉れた。今
の西阪神ビルが阪神電車の梅田駅で二階にあ
った小さな食堂の朝食は旨く、東の阪急食堂
の二十銭カレーと味と安さで競っていた。市

香川酔々氏を悼む

弔辞／西田柳宏子・酔々さん／川村好郎・思い出／谷垣史好

(56)

■書評

本田恵二朗句文集「川柳談話室」

橋高薫風

(60)

尼緑之助句文集「生かされて」を称える

黒川紫香

(60)

伊藤茶仏句集「道祖神」

阿萬萬的

(61)

「理想」

里小路選

(62)

一路集「プロ」

西村早苗選

(62)

「久しぶり」

高橋千万子選

(63)

初步教室

本田恵二朗

(64)

柳界展望

本田恵二朗

(66)

58年度同人総会と二賞発表本社10月句会

本田恵二朗

(68)

各地柳壇(佳句地10選／塩満 敏選)

本田恵二朗

(73)

編集後記

薫風・鬼遊・史好

(83)

座右の句

けなげにも家主の犬を噛んで来た

(豆 秋)

私の句

銀行のカメラに向かってハイ・チーズ

田形美緒

電を越した南側は土産物屋と旅館が軒を並べ

て土産物の主役は矢張り栗おこしだった。

御堂筋がまだ狭かった時で、北と南とを結

ぶ幹線道路で曾根崎、堂島とつづき、北新地

は夜になると賑わっていた。当時も大阪一の交

通量を誇り、自動車こそ少なかったが荷車、

馬力、それに人の往来が激しく信号がつく迄

は、田中という口髭の立派な巡査が手信号で

「オイッ、コラッ」と怒鳴りながら捌いてい

た。いかつい割合に優しいところもあったとみ

え、人気があつて名物になっていた。

富国ビルあたりに市電の車庫があつて、お

昼になるとタンクの形をした水撒き電車が出

て行った。間もなく車庫が廃止になり空地と

なっていたが、東京の相撲協会が分裂して出

来た革新力士団が天幕を張りトーナメント式

の大相撲を興行したりした。名力士大の里、

怪物男女ノ川も其の中に居た。車庫裏にいち

ますしという店があり、からまぶし(鰯のに

ぎったものに三杯酢で味をつけたおからをま

ぶしたものが美味であつた。

大本教が主宰した大正日日新聞社跡が今の

ナビオ阪急になっている。その前を阪急電車

が走り、国鉄も路面で其の上を道路と併用し

た跨線橋がかかって阪急電車を通った。

其の跨線橋上で小学校卒業以来久しく会わ

なかった若柳潮花君とバツタリ出会い現在迄

友情がつづいている。



西尾 葉選

楷行 草おんな器用に使いわけ
一休止秋へ翼を整える
和歌山市 浦野和子

檜山が近くに見える雨模様
ゴージャスなロビーで一きわ光る地味
置土産あなたの胸に楔打つ
ヤジロベエ傾いたまま秋に入る

大阪市 本間満津子

法事いそいそ残った人に逢いたくて
慾のあるうちは残っている若さ
悪にはワルの味方があって片づかぬ
ああしんど楷書のような話して
同じこと言うても聞いてもすぐ忘れ
なにかしら秘密ありそう楽しそう

大阪市 中川滋雀

日々好日菊の白さが極まれり
約束を忘れはさせぬ月の影
天高くオーソレミオになる小径
傘貸してあげよか一声かけそびれ
ライターが点かぬ話が間のびする
ティッシュペーパー小さな嘘を知っている

米子市 八木千代

恩という川が流れる秋の中
一人だけ隠して痛む秋の指
汗捨てた男の骨はすぐ痛む
そのうちに重なる父と子の地図よ
片方の耳は童話に酔いたがる
幕を引くときも正面だけ見よう

廿一世紀より六十が来る不安
松原市 谷垣史好

ややこしいことをゴチャゴチャ言う女

俗中の俗太刀魚の銀の色

川魚屋おやザリガニは食えるのか

浅漬が好き人生を割切ろう

秋になりパンは六枚切を言う

保険屋の言う万が一が気にさわり

薬局へ秋のすずめが胃をこわし

信号の赤に真面目な首ばかり

パチンコにまたしてもあう返り討ち

ゆきずりの名もなき人の名は風か

一泊旅行まだまだ妻に借りがある

岸和田市

ほろほろと萩がこぼれる句碑のひだ

せめてもの休耕田の草紅葉

銀世界丹頂鶴の恋の舞

恋の舞親との別れ知る子鶴

夕日燃えて人それぞれの折り抱く

宵まつりあの子此の子も皆帰る

桜井市

道祖神帰らぬ女が村にいる

受話機からこぼれる母の数え唄

泣き虫の母が大事にする写真

想い出をつなぐ女の手毬唄

洗面器男に悔いが少しある

ふり向くと信じる妻子の目と出逢う

倉敷市 野田 素身郎

手術して食う楽しみもなくなりぬ

那智熊野絵になるところここかしこ

夫と一緒にだから小ジョッキにしとく

適当な言葉がなくて話題変え

到来物の酒と息子の帰郷待つ

月あかりあと一言がほしいのに

島根県

旅に出る嫁があれこれ留守のこと

おしゃべりの間も動く毛糸編み

買って出た策へ冷たい眼が囲む

初便り女にされたペンネーム

行く先に悪友が待つ一人旅

友に逢う少なき数の一人にて

奈良県

真昼間お酒の飲める客が来る

カラオケを乗せて鈴鹿は雨模様

ハイヒールその接点が耐えている

長電話向うも煙草つけたらし

野良犬が昼寝している農繁期

熱燗で胸算用の米の出来

大阪市

朝市に日本の母の顔並ぶ

上向いたイワンの鼻が親しまれ

お隣の改築頭までびびく

適齡期ぎりぎりの娘と部屋話し

西村 早苗

村上 春巳

川口 弘生

野田 素身郎

西村 早苗

村上 春巳

川口 弘生

野田 素身郎

西村 早苗

村上 春巳

川口 弘生

野田 素身郎

西村 早苗

村上 春巳

川口 弘生

野田 素身郎

西村 早苗

村上 春巳

川口 弘生

野田 素身郎

西村 早苗

村上 春巳

川口 弘生

野田 素身郎

西村 早苗

村上 春巳

一歳が手を合わしてゐる祖父の葬
はつぺたを抓つて表彰式に居る

美祢市

安平次 弘道

泥船にいつか乗つてた軍備論
雑兵にも序列小さな渦となる
花言葉に託して打ち明ける
非行児も童話の好きな児だったに
停電に弱い都会とロボットと
漫画本積んで知性が錆びてゆく

岡山県

嘉数 兆代賀

正直に生きて出世に遠くいる
脱ぎ捨てた帯に自由を許される
泣けるだけ泣いて明日の米をとぐ
ふる里の大樹と語る刻ひとり
控え目に歩きつづけた足の裏
人の去る音からきょうが昏れていく

吹田市

藤村 女

暮れ残る箱根湯の香の匂う風
お湯に浸る時口惜しさがやと消え
団地静かに秋の夕陽が落ちてゆき
いつからか夢にも出ない遠いひと
秋はむらさきの情に流される
やがて秋も月も私も細りゆく

八尾市

宮西 弥生

若者と話題が切れぬビタミン剤
筋書きを変えろ女がひとり居る

平均寿命また延び貯める準備です
単身赴任それから遊び上手なり
コニヤック一本深い深い秋にする
涙袋に父の笛母の笛

大阪市

津守 柳伸

ブライドが自作自演の笛を吹く
たてまゑと本音があつた流れ星
本音から少しはずれるラブコール
二の足も迷いも込めて千羽鶴
七人の敵にフアイトを育てられ
男物干した噂と風の街

京都市

都倉 求芽

麦茶ゴクゴク話がはずむ子と
あぜ道に夏のおいがうすくなる
出勤の汗をいたわる堀の蓮
合せ鏡迷いが解けぬまま映る
もう少し奥まで言わす月あかり
満ち潮にあいにく乗せるものがない

鳥取県

鈴木 村諷子

古い二人今日も一日すみしました
何もなかったようにお早うございます
ロビンソンクルーソーなになりたいな
手に団扇触れるところに寝ころんで
揉んでやる足が二本もあるじゃない
久し振りに今夜は飲もう秋だもの

島根県

堀江 正朗

呆けたかな即答できぬもどかしさ
手のひらに一言書いて忘れまい
手さぐりでひとりよがりの線も引き
手さぐりの無限へこたれてはならぬ
下駄カラコロせわしい妻で今日も無事
幸せな谷間でこぼす独り言

島根県 堀江芳子

身に余る思案は夫が受けてくれ
髪の型気に入らなくて眠られぬ
一日の不思議さ長い日短い日
眠られぬだけでも負けている人生
空想の気ままに乗せる青写真
こんなときまだ借りられる母の知恵

兵庫県 遠山可住

こないいい月へひとりの不しあわせ
街の灯よ知るまい秋の虫に寝る
父の背の汗を男の眼でみつめ
明日へまたただひたすらに歩く蟻
昼寝から起き干し草の香をたたむ
上向いた景気へ座る向きを変え

大阪府 西森花村

秋風の河原に犬も人も老け
猛暑猛暑二百十日は済んでいた
虫の声刑務所でも聞けますよ
白黒のどちらでもよい鼻毛抜く
三十三間堂スパイが隠れて居やせぬか

風見鶏秋には羽が抜け変り

和歌山市 西山幸

こぼれ萩軽いのちはお互いに
蓑虫よ身上話など止そう
失ったものを見ている姫鏡
ふらり出て朱い帯揚げ一つ買う
ユーモアの解らぬ秋の風鈴よ
ひと嫌い世間嫌いの冬仕度

松原市 玉置重人

趣味の道山の高さにうろたえる
花好きな人の善意は信じよう
笛吹いた方が踊った負けいくさ
計報しきり同じ一病持つ我が身
熟年の夫婦で好きなくいだおれ
法善寺やはり気になるふたり連れ

大阪市 西出楓楽

お茶の間の隅にわたしの解放区
仏飯がこんもり盛れて安らぎぬ
誠実で真面目で救いようがない
うぬぼれ鏡破ってしまつて冬に入る
原点に戻るフアイトはありますか
家計簿が合わない妻でよく笑う

伊丹市 檜谷寿馬

煩惱を背負い目出度く産れ出る
神様のオモチャが増えて新生児
授かるのことは哀しく貧しくて

日ノ御子を賜りたると開闢史
今一人男児が欲しくと百の罪
子授観音胎動の律に酔い給う

島根県

小 砂 白 汀

菊の花が茶の花になる霜ばしら
死角から盲点じつくり見つめられ
味方へも時限爆弾秒きざむ
触れたいが火傷しそうな曼珠沙華
逆吊りに眠るこうもり罪いくつ
もの音がみんな消えたら怖からう

松江市

柳 楽 鶴 丸

五十妻母の心になつてゐる
妻強しされど体重四十キロ
ビール一本で酔うてゐる夫婦
僕に読ませる場所へ日記置いてある
昔なら妻はソバカス美人です
十円二十円三十円とペダル踏む

松江市

小 林 孤 呂 二

でで虫に似てゐる妻と居る小暑
横つ面を張りたい改札今日も立ち
窓ぎわでタブーばかりが突きあたり
アンドロポフもレーガンもサタンの道化役
無欲になれず人生蛇行まだ続け
夕やけへ万物浄土に居る如く

米子市

小 西 雄 々

点滴へ再起を誓う瞳を信じ
年上の女羽繕い忘れない
姑よりペットへ優しい声をかけ

シャボン玉割れてびっくりしたトンボ
ハンカチの汚れに触れず自伝書く
川下の小石に聞いた放浪記

鳥取市

小 林 由多香

少数の意見も胸に浩めて練る
犯人がすました顔で式にいた
湯加減を熱いめいなかの父を待つ
目ざわりになる脇役も同じ汗
虫籠に馴れた順から鳴きはじめ
インタビュー古い傷にも触れられる

米子市

林 瑞 枝

花の私語広角レンズがキャッチする
子が帰りいま順風の舟を漕ぐ
語り継ぐ好きな民話をひとつ持つ
人形のもはや他人でない微笑
男なら千姫救う力こぶ
すり切れた地図まだ頼り生きて来た

竹原市

小 島 蘭 幸

机上にて秋摺まえてゐる男
人類滅亡まで仇討ちは続くだろう
恋蝶の行方秋澄むばかりなり
蟋蟀が昨夜と同じ位置で鳴く
丁寧に断る妻を見ていたり

退職後十年若くなっていた

大阪市 江城修史

執念の命数欲で済まされず

義理ひとつ欠いて批判の渦にいる

夢ひとつ夫婦のドラマを終らせず

生きるとは渴いた世相へ妥協する

楯となる妻はお世辞の言えぬ女

崩された積木へ父の私語つつく

竹原市 森井菁居

真夜中の紫煙策士にしてしまふ

セールの寝言に本音が詰めてある

再婚の奥様裁量権がなし

反省を促す小さな異を掛け

銀杏の実拾うと聞こえる祖母の私語

旅ひとりこだまが戻って来た安堵

豊中市 安藤寿美子

燃えかすになれば気楽な日記帳

公園へ来れば優しい顔になる

古傷を一寸外した矢を放つ

古新聞お買上げ下さる車来る

お日和に雀は樋の砂を浴び

還暦のりハーサルです赤い服

倉吉市 渡辺独歩

列島が喘いで地図がずれていた

猿轡外れて汚職の砂を噛む

鴉啼く日枯野に晒す悩みごと

地球儀の北緯に痛む腹がある
土瘦せて土龍は餌がさみしいと
鈴虫が酒盗人にする音いろ

三重県 川上大輪

姿見へ女何度も自惚れる

足音で今日の機嫌を占われ

ネジ巻いて何の予定もない明日

今だから言う真相を一寸曲げ

手作りの味スーパードで買ってくる

鳶が鷹産むはずは無い通知表

新宮市 川上溪水

白い杖風がささやく曲り角

ひと言を堪える平和を望むから

こんな事悩んでいたのか古日記

知らぬ間に訛りに戻った里帰り

いつからか腰の曲った影法師

忘れ物せぬ為書いたメモが無い

高石市 牛尾緑良

輪の中は親子四人の目と眉と

方言にやつと気づいた転居の日

御近所へ顔がきくのは妻の方

スクラムを親子四人の腕こぶし

親友の手が温かい荷づくろい

抽斗の秘密も今日は陽に晒す

鳥取市 両川洋々

民営論どうあれ始発の貨車を引く

年輪の技をロボットあざ笑う

凶作と地震地球も疲れ果て

金脈につづく人脈だけ太り

ライバルの視野でメッキがはげかかり

逃げ腰の僕を大きな義理が追いつ

守口市 野呂右近

村祭り聞こえて来そう秋が澄む

ふる里の土の香届く宅急便

生真面目さそれが傷とはいだけず

つまずかれた石も痛かるハイヒール

口惜しさは善意の嘘を詫びる破目

名も知らぬ人ともはずむ花の事

大阪市 天正千梢

ふところの深さ感じる山頂で

集団催眠術赤い旗にとりまかれ

忍耐の哲学マイナスにせぬ怒り

浮かれるな愚かな期待抱いている

さびしさは遊覧船の曳く水泡

哲学書持つて泥舟に乗っている

島根県 錦織文子

ひよつとしたらなどと迷いを深くする

毛糸編む指から独りの秋になる

亡母の年にはまだまだ遠い橋がある

亡母からの便り来ぬまま七回忌

いい月夜母祈りたいことばかり

燃えつくすことしか知らぬ彼岸花

台風が来そうで来ない気もめる
貝塚市 行天千代

クーラーの効いた市場で長話

バーゲンで季節外れの服を買い

不景気も息子は朝の靴を履く

失業の肩のところが秋の暮

同じ血が通う親子で祭り好き

和歌山市 坂口公子

いい頃と思うと蜂が刺しに来る

地味目でも妖しい衿のぬき加減

おみやげは笑顔で良しとする息子

山の駅地味だがまさに名画です

野の花をみやげに呉れる温かさ

おみやげを上げる仲には未だ成れぬ

西宮市 杉浦婦美子

老夫婦キャッチボールのない会話

秋の海陽気な悪女が出す答

結論がでぬままグリア散りはじめ

老人のお伽噺を考える

円満な人と言われてもの足らず

電話にも人にも倦む日貧しい日

米子市 雑賀美世

父の地図旅のなかばでたしかめる

出し切った力審査の瞳にまかせ

人形の本音を言わす腹話術

見習いの力まかせに釘が拗ね

肩書をはずして明かす裏話
鉢の穴抜けて大地へ根をおろす

米子市 菅井 とも子

子の意見聞いて歯車廻り出し
裏通り意外な人とめぐり逢い
内裏離座り続けて老母の齢
裏の無い人と見抜いて打ちあける
腕力も消えてやさしい老父の瞳よ
舞い終えた老夫よひとりにさせはせぬ

西宮市 林 はつ 絵

アルコールの中で本心苦闘する
安らぎのかたちに乳房軽くなる
さみだれの果てえんびつが走り出す
まっすぐに歩く夫でよく転ぶ
斜めからのぞくあいだは無責任
財布軽く新作衣裳展を見る

富田林市 藤 田 泰 子

ポスターがナイスミディーと呼び留める
ゴミ箱に入れぬと溜るものばかり
空しさは反対されなくなつてから
現実に戻ると渴く涙壺

半分の程が分らぬゴム風船
風向きでホームランにもなる凡打

西宮市 奥 田 みつ子

頭の皿私も水が欲しくなる
マネキンを見てから少女無口なり

計のしらせ中天の月変わりなし
美女ひとり白磁の壺のたたずまい
本心は言わず聞いているモーツアルト
髪洗う旅の心はそのままだ

吹田市 西 川 景 子

百五回撫でてきました百度石
底抜けに明るい地声の見舞客
一番星に手を合わす無神論者
教育勅語ちらちら聞こえる右の耳
アイバンクで静かに出番待つ右目
ただ一人焼きついている左の目

尻崎市 奥 山 美智子

大仏のまろき視線に吸いこまれ
鳳仙花おどけて愛の語をはじく
朝風呂の癖がとれない旅帰り
サラサラと砂丘の憶いが手に残る
風紋に愛の淀みのする砂丘
ただじつと風に吹かれてる砂丘

尻崎市 春 城 年 代

弁当に情いろよくつめてみる
合歓濡れて愛にかたむきそうな怪
僻むのは勝手カラスの勝手でしょう
寝返ればそこにいつもの顔がある
末席で花嫁今や人の者
虹に逢う道は帰すに惜しい道

尼崎市 西 村 かすみ

水割の酔いが手伝うプロポーズ

下町のざつくばらんにある温み

母方の血をひいている雨男

石女の心につらいわらべ歌

老いらくの恋ごころありにぎりずし

家計簿の真ん中へんにある盲点

藤井寺市

父が居ることは忘れた娘達

写経する心に小さなわだかまり

生き甲斐は二度の勤めのボランティア

働けば税金ばかりを取られそう

日本に生れもうこりこりの負けいくさ

富田林市

けもの道少年一揆の旗を振る

紅葉狩り母の乳房は狐雨

女とは悲しい笛を捨てられず

出しやばりの女を憎むほうれん草

美しく遺書は峠の風に舞う

出雲市

残暑酷し流しソーメンまだ人気

うちの夫JISマークです平和です

五十年添うててこんなところに黒子

ロボットに血の気ないのがまだ救い

秋の空チロリ愛した師の笑顔

平田市

塗り絵なら彩に気ままは許されよ

児島 与呂志

板尾 岳人

原 独仙

久家 代仕男

添加物規制ゆるめて無害とか

もう秋ネ黍の葉摺れに囁かれ

珍客へ妻が茗荷の花を切る

鍬洗う秋の夕陽に満つ平和

倉吉市

貰い子の親に成り切る六ヶ敷さ

女房は京都ファンでよく出掛け

はるかなる砂丘二人で歩く幸

腹の立つ言うだけ言って切る電話

発言がたたり役職背負い込み

倉敷市

善人の悪い癖だよ直ぐ信じ

老いらくの済まぬが息子の脛嚙じる

辛抱の花咲く頃に思うて

客に来てまあ上品なわが妻よ

新人の未知数だけが買われおり

宝塚市

夏やせどころかおやじよく食いよく眠り

娘の家で蔽入りしてきた盆休み

理髪代安いがまどろむひまがない

外食の席でも合掌忘れない

貧乏のおかげよい子に恵まれる

下関市

姿見のうしろは母の手をかりる

中年で転職をして嫁が去に

炎天を拝むビール会社と電機屋と

奥谷 弘朗

稲田 豊作

傍島 静馬

国弘 半休門

アルバムは夫婦げんかの顔でなし
家にあき女房に厭いた曲り角

富田林市

岩田美代

一生を丙種で通した軍歌好き
変化ない答えが戻りまだ残暑
悔いひとつ持たぬ男ののど仏
仲よしになって怠惰だけの日々
三度目の口止めしとく九官鳥

堺市

高橋千房子

友は逝く過去をたどればかぎりなく
動揺のしるし何時もの色が出る
利回りがぐつとお得へ金がない
ようやくと残暑彼岸につき当り
思案する机はなれぬ秋のハエ

大阪市

河井庸佑

体調をくずすクーラーだが切れず
因果応報忘れた頃にけつまずく
生真面目だけが取り得と陰の声
秋はもうそこまで来ると赤とんぼ
ナツメロにわが人生をだぶらせる

守口市

羽原静歩

箸箱に生きる希望が入れてある
浮き草の浮くも沈むも風の中
女がおんなに還る美容院
一步前進二歩後退の日が続き
見解の相違と秋の虫を聞き

父の癖子の作文に教えられ

柳井市

弘津柳慶

酒豪だった話題がつきず一周忌
何もかも住みにくくして発展し
サラ金の悲劇別居に追いこまれ
定年になって希望の虹も消え

奈良市

宮口笛生

元気で証拠に酒がうまいなり
ぐい呑みの味とまり木にとまってる
俺も歳明日へ残る酒があり
コーヒーに寛ぐ時計三つ打つ
突然の訃報へ予定狂わされ

藤井寺市

吉岡美房

耐えている方を軍国主義と責め
欲しくなる地球を洗う洗濯機
復讐を明日に預けて妥協する
デイトから別れて気付く虫の声
バリカンのように稲刈機が進む

京都市

松川杜的

鞭となる言葉を探す西雲
よい意味のライバルが欲しい余生とも
真夏日へおじぬ赤よし百日紅
シャボン玉にも青空がない街に住む
老人の雑誌もSEXが幅をとり
税理士の勤財産をズバリ当て

奈良市

森田カズエ

無病息災が財産ですと妻笑う

单身赴任妻に指きりせがまれる

薄化粧して看護婦の深夜勤

思いきり叩いた蠅が身をかわす

岡山市

時 末 一 灯

白いものふえて許せることばかり

束ね髪いつかB面好きになり

アカサタナ広辞苑様たよる齡

人寄つてくれば独りになりたくて

捨てられてみんなゴミとは限らない

諫早市

原 田 明 春

嫁った娘へ女房暇みて運び役

先生になったとたんに標準語

お隣も貯めてはいない千鳥足

絶対安静などと余裕があればこそ

正論をはくくせ出世をまた逃し

大阪市

欄 蘭

診察に行くのに口紅こゆくぬり

サラ党へ期待をかける宮仕え

もの言えば政治不信に結びつけ

雨もりへ大雨警報待ったなし

陽は西にひまわり横を向いたまま

玉野市

小 谷 仙 山

六道の辻で拾った松葉杖

親と子の会話仔猫がじゃれに来る

子の驍夫婦に少し溝が出来

ピント少しはずれて仲の良い夫婦
花作り土から少し教えられ

兵庫県 大江 秋月

考えておくと課長が三年目

そんな駅あつたかいなと異動月

ドラエモン迄とお風呂を急かす孫

誕生のお祝い利子で父が飲む

同じ物食べて妻だけ肥えている

岡山市

川 端 柳 子

日々新たな花のおしやべりにも酔うて

福耳にあなたの愛は伝わらぬ

雑草によい子わるい子普通の子

行届くお言葉何かが足りませぬ

御仏が在すだけでは足りぬ胸

松江市

恒 松 町 紅

ホテルまで電話してくる親心

子育ての苦勞時代が違います

財形で子なき夫婦にあるプラン

増築の向いは嫁が来る話

嫁よりも長姉を頼る老父の手

松江市

舟 木 与 根 一

汗一つかかず脱税億を越し

ひとの子であつては困る公務員

雑念が湧いて籤運また逃げる

大韓機事故(二句)

真相を冷たく見ていた北斗星

サハリンの氷も拾う搜索船

大田市 藤田 軒太楼

さりげない話に熱意汲みとられ

忍従もこれ迄楯を鉢に替へ

この辺が限界見切り発車のベルを押す

名演技蔭の擬音に助けられ

丁重に相談役へ祭り上げ

宇部市 平田 実男

社の人事昨日の友が今日の敵

ホステスにせがまれ年甲斐ない小指

こじれば兄弟他人より恐し

小廻りは良く利き課長補佐どまり

恩人につく嘘舌がちともつれ

仙台市 川村 映輝

日教組教育捨て鉢巻し

宝でもあり重荷でもある子が五人

解決した後から難問追ってくる

火が無くて煙を立てる週刊誌

女はダメネ煽てに乗って居るらしい

鳥取県 川崎 秋女

千の客去んで砂丘の鳴咽きく

痛み止め一つポケットにある安堵

まっすぐな道は極楽へつづくかも知れぬ

まっすぐに走るとうさぎにも勝てる

笠岡市 松本 忠三

男でしよう女の評価得手勝手

まあまあ返事恵まれている証拠

お坐りにお手雑犬がよく覚え

酒の上です黒が白となり

生返事女房来るのか来ないのか

倉敷市 藤井 春日

子に残す愛の言葉が宝です

ふる里の島は吾が島父母の島

何よりの土産は子連れの里帰り

OLに終止符を打ついい縁談

新築のそれから奥さんアルバイト

岡山県 白岩 文衛

若者と話して口が軽くなる

退めたいやめたいとまだ退めぬ

まだ弾む心を老いの宝とす

じいちゃんの引出しにある肥後守

柱時計遅れておって我が家です

大阪市 神夏 磯道子

殺したと思った虫が生きていた

主婦の座にあぐらをかいたサロンパス

木綿しか知らぬ昔の血が流れ

若者が打てば太鼓の音が違う

萩の花老いの思考をよみがえす

今治市 越智 一水

そのひとつおくれで咲いて人目ひき

退職へ民生委員が待っていた

灯が心にともる墓参り

勝つために土俵をいじる自民党
母ひとり子ひとり積木はくずすまい

呉市 横田英詩

秋の虫無念無想の邪魔をする

秋深し妻も近くで何か読み

禁酒禁煙ひとり籠ってどうする気

純粹の大和撫子鼻が嫌や

貧に慣れ般若心経手離さず

東大阪市 斉藤三十四

減反へ麦笛遠い過去となる

先頭を泳ぐ目高のボスらしい

人生の余白は池へ定期便

波しずか人魚の恋を見てしま

いたずら児が今一番の親お

香川県 岡田拳法

殉教者ぶる被爆ではまた被爆

非武装論侵略者には都合よし

党主交代ぐらいで社党よくなり

行革より役人可愛や人事院

日教組路線の果てにヨット塾

兵庫県 梅谿庵朝翁

うまく書き断り切れぬ無心状

先生を評点したらコンマ以下

追越しをかけたら追いつくバトカ

気に入らぬ息子が好きで貰た嫁

ブクブクとよう肥えにけり不倫の子

綾瀬市 大山と金

やわらかき陛下のお手や指角力

居眠って凭れくるからジツという

大人より上手な知恵を働かし

麻雀は意気で配牌呼びよせる

女よくしゃべる話題があるものよ

八尾市 飯田悦郎

コップ酒かわして妥協せぬ構え

遅咲きの女が踏絵をふむあせり

戦えば勝てる自信のふところ手

夢のない暮しで胃袋だけ満たす

母の背を流すとたまらなく淋し

堺市 大道美乙女

数え唄うたえば亡母の声がする

道化師を笑う道化の影法師

ライバルへ吹矢ひそかに機を狙う

うぬばれのひとり芝居に風が冷え

幸せになる嘘ならば聞いてやる

大阪市 黒田真砂

言いわけを素直に聞く妻が居る安堵

土佐旅行

見残しの海よ珊瑚の眠る郷

足摺の浪の花道一人行く

くだけ散る波足摺の夜更けて

横太郎 龍馬にも逢い土佐の旅

東大阪市 竹中綾珠

同室の五人気の合う人合わせぬ人
しんからの悪人無いと知る日毎
救急車に初めて乗って覚えてず
点滴の威力は死から呼び戻し
ひとり居のあの状態なれば死んでいた

鳥取県 林露杖

村雨に濡れて戻って来た仔犬
なだらかな肩に女の業纏う
父の座は飾り釦の如きかな
やま勘で一つは済ます眼の検査
この脚の重さ知るかい道おしえ

倉敷市 小幡里風

夏バテと言うて失恋とは言わず
夏バテの血を瘦せた蚊吸うて逃げ
愚痴袋妻へも一つしサイズ
ライバルと同じコースに居て楽し
姑さんに打つ合槌が見当らず

和歌山市 若宮武雄

アッそうだ亡母の日なんだ折れておこ
合掌のままでは何もできませぬ
雑魚百尾よりも鯛だという奢り
善人のつもり神さま仏さま
先代をはめちぎられて寺の寄附

和歌山市 堀端三男

天下取る気概を見せて酌み交す

禁酒禁煙男の影が薄くなる
水甕を満たした女よく眠る
作られたブームに踊った日の誤算
頂きを追う夢があるかたつむり

和歌山市 内芝登志代

女丈夫がうっかり乗った口車
誕生日同じで親しくなった友
豪邸のくらし知ってる勝手口
倅せとは何であろうと考える
独酌へ遠い女が語りかけ

和歌山市 福本英子

はん女の舞見て背を伸ばす女たち
梯子車のてっぺんで鳴るポケットベル
予言者のとおりには回らない星座
晴天の葬儀を抜けてきたゴルフ
時効になって出てきた遺言状

和歌山市 松原寿子

たとう紙へ女の秋をおりたため
まぎれなく丸い乳房よ女かな
耐えている背ながら想い渦となる
首尾のよさ鈴の音色に刻がある
分限へそのひと言を吞んでおく

和歌山市 富上光代

片方の耳だけ貸して義理を聞く
負けて置く何時かと言う日胸に秘め
負けられぬ意地に縋って歩く道

愛一つ塗り込めたまま風化する
お見舞へ明るい話とすり替える

西宮市

妹尾春江

付き合ひも三度に一度が頃合いで
寿を書くに奉書に役が付き

留学と言う名目の落ちこぼれ

たまに來る婿に洋酒を取りよせて
墓まいり外しなさいよサングラス

大阪市

北勝美

かいわれが流れ作業で自然食

現金と背中合せにいる悪魔

玉ねぎの生もお膳に湧く意欲

金木屋二坪庭で耐えている

冷蔵庫眠ったままでいる酸橘

兵庫県

辻文平

花束に答える声の国訛

顔色を読み忘れている鼓動

塗ったくるクレヨンにある涅槃仏

泣きざまが姑に似て來た雨の歌

浮気せし噂を秋が來て染める

東大阪市

崎山美子

傷心をやさしくつつむ故郷なまり

三十七度へ猫も並んで昼寝する

記録的な暑さへ昼寝の自衛策

一人前になればなったで又案じ

おしぼりとママの笑顔が客を呼ぶ

鳥取県 森田布堂

山は動き雲は動かず絵になるか

鉄のカーテン閉めて軍縮主張する

桐箱の家宝の軸の字が読めず

夜の冷えに腰の痛みの皿をもみ

「わたしのことがまわんといて」ペット飼ひ

和泉市

西岡洛醉

一人寝を知ってか夜風戸を叩く

情熱を秘める背筋がしゃんと伸び

熟年の腹の脂肪が嘲笑う

白昼夢主婦裏切りの肌を見る

宵待草真昼の夢をひそと閉じ

鳥根県

梶みどり

里帰り心やすらぐ風にあう

秋の陽がブルーのシャツの背におちる

風船にバズルをつめてとばそうか

すがり切る倅せ孫とたわむれる

想い出がみな倅せでした仏様

島根県

榊原秀子

夕顔と一緒にみてた流れ星

波しぶきにころげる貝が捨てぬ夢

一夜あけるだけを淋しい眼で送り

血縁を葬う道の花芙蓉

簡単に涙を流すことばかり

岸和田市

植山武助

自惚れでないが自信という強み

個性ある人と人とのにらめっこ

老夫婦のペース乱して孫帰る

金で買う幸せもありふところ手

老人の日を意識しだした五十八

岸和田市

原 さよ子

家庭菜園のひょうたんにある風情

腰痛の灸の熱さえ祈り込め

降りそうで降らない空へ鷺が舞う

あの人とやっぱり逢えた秋祭り

風呂の窓へのへのもへじ孫の知恵

岸和田市

清 野 こう

義弟入院(二句)

ベッドから見舞いの老母の身を案じ

伸びた髪気になり出した回復期

しのび寄る風に見つけた小さい秋

お隣と交換し合う自家野菜

パラソルの売場明るい彩を選ぶ

岸和田市

古 野 ひで

踏み出した一步へ遮断機又も降り

義理と言う絆の重さしかと抱き

新調の法被も粋な祭笛

忘れ得ぬ一期一会の遠い人

なんとなく紬を選ぶ齢になり

岸和田市

吉 水 照 江

散らかした部屋に親子の味がある

親子でも一線引いて渡る橋

見掛けとは別な悲しい私生活
身勝手は義理人情もみな忘れ
煩惱は南無の六字で消滅を

米子市

石 垣 花 子

ブランコの力を抜いてからの揺れ

言い勝った胸にふくらむ鉛色

毒抜いたコブラ踊らす村祭り

とことんへ来てから本音のぞかせる

マスコミが土足にかけるブライバシー

米子市

青 戸 田 鶴

おしんから日々の怠惰を叱られる

裏で糸ひかれ踊りもぎこちない

父の脛の傷の深さに気づかない

合掌へ傾き旅路軽くなる

しきたりが根を張る町に住みなれる

米子市

田 中 亜 弥

やがて土になろうと心経となえます

線香の祈り静かに灰となり

紋付をたたんで肩の荷をおろす

車間距離あけてわたしを確かめる

少女期のしつけ意見が食い違う

米子市

野 坂 な み

許そうと決めて心が軽くなる

掌を合わす心も持った鬼である

はじかれた種子よ来世を信じよう

秋の仲間よいたわり合って暮そうね

秋の陽が傾きそうで旅に出る

米子市 政岡 日枝子

秋の月父にも叱つてはしい鬼

泥舟のふところ近く根なし草

月高く樹々も素直な洗髪

他の彩に染めたくはない一人娘よ

木枯しに鳴る風鈴で尚あわれ

米子市 寺沢 みど里

子育ての無理は明かさぬ老母の背

銀婚式待たずに折れた夫婦箸

あと一息の絵筆日暮れが惜しまれる

カラフルな屋根ふる里を塗り変える

網棚の荷物かぞえて旅終わる

神戸市 山口 美穂

野仏と秋を語って彼岸花

女の愚痴きいていたらし籠の鳥

逢えばもう心の中が空になる

方丈記わが身の欲が恥じられる

飛行雲北の空から帰らない

出雲市 吉岡 きみえ

飽きのきた夫婦茶碗を買い替える

冷やめしも半分ずつ食う夫婦です

以心伝心夫婦でにぎる手のぬくみ

老夫婦雀の交尾見て笑い

羽咋市 三宅 ろ亭

野鳥来い熟柿十ほど残し置く

吟詠の一声狂うてみな狂い

一反歩隣もやっぱりコンバイン

見馴れてる山も紅葉を着れば別

セットした会談相手は乗つて来ず

風下に耐える男の詩がある

暑さには負けておれない夏の花

ふり出しに戻る賽の目振り続け

片意地な男で打たぬ変化球

欲しいもののガラスの向うに積んである

店じまいするたび店は派手になり

世話をやく右手に左手は不服

来る迄が待てずチャンスとすれ違ひ

追突をした車にも守り札

仁義なきミサイル縄ばりを主張する

印鑑を変えてそれから下り坂

久し振り昔変らぬ目に縋る

歳月がこんなに喋る人にする

父よりも母と住む事ばかり言い

老いてゆく姉の手足に亡母を見る

世界中ゴマメの歯ざしりクマに鈴

防衛費それご覧じと北の海

兵庫県 河原 みのる

大阪府 藤田 頂留子

河合 茂雄

神の国昭和の清麻呂出でよかし

扇風機美人の方へ向きたかる

盆の朝蝮殺したきずごころ

神戸市

仲

どんたく

弔辞聞く棺のほとけのにが笑い

旅立ちへ孫の涙がじやまになり

出棺を待つ間の今宵飲む話

お月さんちろのカラオケ聞いてはる

宿題が明治の知恵を借りに来る

寝屋川市

江口

度

舌打ちをしてきりぎりす鳴きはじめ

ひょうたんのしたでおしゃべりとまらない

誰一人踊ってくれぬ笛をくれ

八起きめのダルマたおれることはない

かけ落ちの男女と知っている柁榴

七尾市

松高秀峰

白衣着てナース働く顔になり

腹這いの親子の絆太くあれ

犯罪の陰にサラ金女あり

突っ張りが過ぎてチャンスが通り抜け

空港へ刑事の方が先に着き

寝屋川市

稲葉冬葉

腹の虫一匹を飼い慣らす鬼

地藏の子帰り小さな秋がきた

遮断機が降り呼吸を整える

老いある日アルバムの亡夫恋うている
金持を斜めから見る気はないか

鳥取市

森田熊生

風紋を返せと砂防林切られ

電話して聞けばよかつた汗をふく

ファインダーの中ですねてる空がある

腕組みのゆとり切り札抱いている

勘ちがいしてもごまかす知恵ができ

町田市

竹内紫靖

富士下山孫のいる街見えてくる

歯ならびも隠し明治の写真かな

白黒の顔業界の雄であり

悠々自適ゲラ刷りが来るはげみ

ワープロも潮時随筆集が成り

鳥根県

木村はじめ

青春も戦苦も耐えた白髪染め

明月やしみじみ想う世の流れ

敬老日一枝挿してお茶する

熟年に生きる日の鞭痛すぎる

いまになつて何をか言わん勝たせずき

浜田市

中川幸一

べんちやらの種がないので犬を褒め

阿呆らしい窮みは犬の美容室

血の通う木偶がいつばいいる危険

たかがバラ守るに過ぎた棘の数

秘めた名を熱が言わせた身の不覚

出雲市 石倉 芙佐子

飛び石を軽く跨いで迷わない
急がねば雲足早い秋が来る
本当の愛にはとおい夏の海
湖の何処でも解る父の船
落し穴こっそり仕掛ける友ひとり

出雲市 園山 多賀子

傷ついて人指し指が他人妬む
ライバルの肩越しに見る雲の峰
嫁姑女同士の肩を持つ
ロボットは汗を知らずによく稼ぐ
倅せがうすく喪服がよく似合い

唐津市 仁部 四郎

上役の病氣ライバル貝になる
生活の知恵で神話に予備がある
生活の知恵お悔みへ群で行く
仲人の方言にまず親が落ち
割増しで聞いた隣の痴話喧嘩

唐津市 浜本 義美

空耳か右へならえの声がする
長生きに背をむけている核家族
曳き出しの砂に湧きたつからつつ子（曳山）
八朔の汐が太って月を招び
医師だけが肥る健康保険税

政治家のウソはグラフへ出てこない
唐津市 浜本 久仁於

わが家にも春が来るらし子の便り
妻の手がとどく高さの釘を打ち
パパの部屋だけがわが家の喫煙所
点滴を見ているだけの親であり

唐津市 久保 正敏

御蟲肩の力士が負けぬ天覧日
鯨雲逢わねば遠い人となる
手話弾む二人に嘘のない笑顔
空耳か家出娘の電話ベル
半分は親に聞かせる子の違反

唐津市 田口 虹汀

何もかも忘れて来いと旅に出す
喜寿と古稀なれど心のはずむ旅
仏心になろう彼岸の日なりとも
城ばかり築きゆとりのない家庭
大小の城がふえます核ブーム

和歌山県 天満 三千代

顔たてるただそれだけの会に出る
ちぐはぐな話で姑の知恵も老い
何気ない言葉尻からでた不仲
あつさりと折れる婦随の座にも馴れ
追い越さぬバトカーやけに気をもます

西宮市 野呂 鶴汀

来客に蹴られたらしく犬が鳴き
七草を庭に揃えて古寺の秋
御仏をカメラで覗く罰当り

無作法へ無作法で会う許す友
雑沓の中に懐し故郷訛り

倉吉市

渡辺 菩 句

心このひと文字をのみ書いている

どん底のあえぎを影に笑われる

山河あり秘史と言うものがたり

清貧の道まっすぐは曲げられぬ

ふくれても軍隊でない自衛隊

高知県

松岡 三 吉

クーラーが売り切れましたとはしたり

コンタクトレンズお嬢さんなら安い

婚前旅行世の中変りましたとか

人災と言えば天災という役所

お疲れの居眠りそつとしておこつ

高知県

赤川 菊 野

迫力はないが重味のある言葉

執念でつかんだ賞の坐が重い

夜のない国に住みたい独りの夜

隣席のあくびもろうて一人旅

Tシャツの下で女が鼓動する

岡山市

花田 たけ志

苦心した節に師匠の鞭無情

小包へ悪に染まらぬ願い詰め

妥協して流れに沿えば歩が乱れ

教えても直らにや世間の目は白い

発展の途上へ先進の厚化粧

飾り気を外して小さな鶴を折り

主義の無い男が無駄な汗をかき

堂々と噂打ち消す二本線

遠回りどの辺でする賞め言葉

溜息を別室で吐く自尊心

二次会に私の仮面忘れとり

しがみのうねりに揺れる父の道

秀才でなくてがめつく生き延びる

負け犬になるのも処世術だった

病室にヒョットコ面をつけて入る

火の元と戸締りくどくど妻の旅

老夫婦無理のきかない弥次郎兵衛

ジョギングで老化防ぐ気朝の露

スーパードで出番うれしい一円貨

酒断ちを父に代って絵馬に乞い

孟蘭盆に死後の住家の墓洗う

従兄弟の息子の嫁と墓で会い

二人だけの暮しに洗面待たされる

貸農園褒めたら胡瓜と茄子をくれ

熱帯夜近所のクーラーの音熱し

花言葉知らず花屋で買う見舞い

富田林市

中村 優

岡山県 岩道 博 友

岡山県 行吉 照 路

大阪府 長谷川 春 蘭

羽曳野市 佐野 白 水

点滴に頼る生命の軽さかな
人様の情の深さが染むベッド
肩書が通じず病人小さく居る
四季の花替り病歴語り継ぐ

姫路市

大原 葉 香

コーヒーの色をミルクが情落させ
ホステスの素顔にうそは見当らず
病院の九時は我が家の宵の口
何事もなかったのだよと夜が明け
午後四時の日影はもはや秋のもの

鳥取県

金 川 満 春

高齢化日本政府は苦悩する
贅沢な悩み減量お流行
浴衣がけ女の起伏老妻にみる
老妻と話が切れぬ熱帯夜
引算の名手がずらり大蔵省

和泉市

岡 井 やすを

鳴く者は殺して仕舞う国もある
日教組大会いつも温泉地
十三で青物堺魚夜市
中流が家も車も皆ローン
ガニヲハの乱れ気になるアナウンサー

枚方市

栗 林 光 夫

枯山水空の世界が見えてくる
植捨ての朝顔意地を見せて咲く
本当になるまで嘘を育て上げ

死ぬまでは暗中模索五里霧中
外ヅラを内ヅラにして靴を脱ぎ

大阪市

杉 本 智慧子

ダイエツトに丁度都合のよい猛暑
秋の風ワイングラスを傾けん
独り居の気儘な熟女酒が好き
ちぎり絵の菊根気よく貼るしじま
紅葉燃え民話の里は冬仕度

松江市

竹 内 すみ子

暗闇の情を語る埴輪の眼
歯ざわりが嬉しいそばに逢うた里
ほろ苦いビール今日の負け戦
道化師のグラス透明な酒を酌ぐ
いつからか鬼の調書に名を連ね

出雲市

板 垣 夢 酔

妻逝って万年床となりにけり
勝たせとこ老い先短かい祖父だから
送別会胃ぐすり飲んで朝を出る
退職後妻の厳しい請求書
休暇とる電話は妻にかけさせる

倉吉市

野 中 御 前

小さい口あけて蜻蛉の高さ追う
野仏の肩でトンボのラブコール
反骨の主胡瓜まで曲り
真直に走る助走路海で果て
柘榴の実熟れて娘が狂い出し

岡山市 井上 柳五郎

向い部屋同じ初老の夫婦旅
大陸の土と決めてた父の青春
引き際もやっぱり愚痴を忘れない
胃の痛む話さりげなく言われ
妥協する使い口ポットになつて行き

大阪市 大野 武太

更新の手続き府庁の暗い部屋
近道に弁護士長屋通りぬけ
ガレージの清掃妻についていく
老人に見られ窓口いたわられ
そのさきは専門家にと家庭医書

兵庫県 藤 後 実男

救急箱バンドエイドと胃の薬
発展の裏で政治が動きだし
妥協点心の隙を開けて待ち
行き帰り仲人二つの嘘をもち
追いついてみれば本当に男です

島根県 松 本 はるみ

生ぐささ命を捨てた桜貝
ころがった人形の首にある嗤い
シンセサイザー天の岩戸の交響譜
皿の中秋の香りの一かけら
秋空を翔ばねばならぬ赤とんぼ

島根県 石田 清泉

風の子の帰りを塾が待ちかまへ

保険屋が口実つくる事故つづき

運のいい中元までも返り咲き

残暑さえ国際的という地球

曲りなど気にせぬ胡瓜の列におり

島根県 岸 本 輝水

嘘一つ言えぬ男の墓の苔
気まぐれに覚えた筆を頼まれる

脱税の城はガラス張りのビル

そば殻の枕が闇を引きよせる

バーのママ右に左に弥次郎兵衛

高槻市 田 崎 あき子

登り来て高野山には霧も無し

泣き止めばぬれた枕の冷めたくて

色事の話虚しく聞く齡

くつろぎの居間に別居の子を思う

孫が来て暮しのリズム狂い出す

枚方市 稲 葉 星斗

伊豆めぐり

戦友と銃を持たない伊豆の旅
(戦友会参加)

伊豆の宿干物が甘い朝の膳
(ホテルくろしお)

潮騒に唐人お吉の私語を聞く
(下田港)

安政の三味線飾る了仙寺
(ハリス館)

噴きあげる煙は高く月淡し
(湯の町)

大阪市 中 西 兼治郎

一銭の貸借りもなく喜寿に生き

火遊びは子供ばかりでない遊び

スカートのミニへ老いの目もひかれ
オイと呼びハイと答えたのは明治
病む話死んだ話と老い二人

島根県

松本文子

亡父の写真にみんな頼んでそれで済み
たて前と本音左右の手で裁き

茜雲優しきものを満たさねば
夢捨てにそして拾いに川の旅

愛娘着せかえ人形にしてしまひ

河内長野市

井上喜醉

ロボットは腕組みなんか大嫌ひ
孫が来て嫌々渡る歩道橋

裏むけの浴衣が澄ます旅の朝

天然の水でカラスが顔洗う

大漁へすっかり忘れた日が沈み

八尾市

山下みつる

昼寝ぼけ柱の角が近すぎた

建て売り屋空地を見れば建てたがり

立秋がとくに過ぎた熱帯夜

いつみても俺は政治で斬られ役

ビール飲む女浴衣が良く似合い

兵庫県

中田白李

鼻声で話せるやさしい母がいる

栄養があると子供に言いきかせ

満ち足りた夫婦ひと言だけで済む

傷口に触れぬ歩幅で二人行く

僕の寝言を私が聞いている

大阪市

山根いつを

細うでが思案投げたり拾うたり

さまざままでダイヤの粒に汗の粒

ハッピーエンドそんな台本はかどらず

連れだつて差引すると夫が損

末っ子を惜しいおしいでとう立てる

大阪市

鍛原千里

小さな旅で小さな風に逢う

ハンカチの隅でぬぐった愛でした

相談のつもりが果ては愚痴になる

目立つ場所時を知ってる風見鶏

道変えてから風のささやきが聞えない

大阪市

鈴木節子

秋風にいちようの染まるを誇りたし

掌のひらの温もりを抱く帰り道

憶病で真ん中ばかり歩いてる

幸せの家庭洗濯物にうもれてる

弱虫で持ちつづけてる白ラベル

岸和田市

芳地狸村

国宝の文字に見る目も違つてる

女傘誰を待つてる雨上り

土肌が古陶の味を溜めている

路地裏に土が生きてる植木鉢

占いを信じ乗り換えさせた事故

交野市

山本テルミ

栓を抜くまで箱入娘だったナポレオン
葉がくれに見つけた茄子の濃紫

いいところは嫁似とほめてつつがなし
さわやかに老いる努力を語り合う
息ぎれがしそうローンにふみ切れず

豊中市

田中正坊

真田山陸軍墓地（三句）

兵の墓ありし日のごと整列す

けいとうの紅目にしむ兵の墓

英霊も階級がある墓地哀し

亡き妻が紅葉賞でた秋が来る

直言をお酒のせいにしなさんな

松原市

本多洋子

退職の机をきれいに拭いてやる

投げ切れぬ小石を一つ持って辞め

退職すると地球がゆっくり廻り出す

老母には昔の子供でいてあげる

休日の夫の髭にあるゆとり

松原市

佐藤藤子

スタンドのスイッチ気遣う夜の無言

雪どけに女は薄く紅をひく

相槌の目の奥にある嫉妬

母の部屋に鏡台がある安堵感

長老の歌に雛子の温かき

西宮市

西口いわゑ

能面はすべてを語りかけている

孫台風箏もゆっくり持たせない

シャネル五番居所しかと伝えて来

生前の癖を笑える三回忌

反骨の父も気弱になつて逝き

鳥取県

清水一保

一光年掛つて届く愛も良し

詩情ふと今日のドラマにからみつき

清貧を一本背負いで投げ飛ばそ

止り木に戻つて夫婦という会話

岡山県

直原七面山

師の影は踏まぬ質

淋しさを酒に逃げ

弾詰めて男が登る男坂

酒飲み of 末期の水はお酒にし

松江市

梅本登美也

ちっぽけな秋が残暑の中に見え

まあいいじゃないかと父が取り合わず

浮草の気ままトンボに親しまれ

白蛇が荒神さまで齢をとり

檀原市

岩井本蔭棒

修身科拒んで教師殴られる

臨終へ時計が止る義理はない

谷川のせせらぎに聞く過疎の明日

両輪が片方になる日の虚脱

唐津市

木塚素石

女ゆえ丁寧に採るへちま水

神様は不公平だと親ひがみ
亡母の身に利休好みの壺を添え
サーフィンに若ければなあゝの眼を集め

浜田市 佐々木 裕

麦茶バックゲートボールが忙しい
嫁ぐ嫁秋茄子食うなとも言えず
ゲームセット共稼ぎから夫婦が帰る
ふるさとにベレー帽はいれられず

奈良県 宮川 古都路

笈摺の観音像は背なで見せ
新京極裏から参る京の僧
引導鐘彼岸の経木義理がすみ
二個二個と仲六つましい祝柿

島根県 藤原 鈴江

食べきれぬ甘い言葉をもらいすぎ
満月へ亡母の面影慕わしや
一筋の愛を絆にかけて生き
衣ずれへ思わず正す衿あたり

島根県 山根 峰雪

東京の雑踏に疲れ旅に居る
空の旅こわくひかりで帰る母
申訳にてっぺんで朝顔三つ咲き
ボーナスを子守り貸ですと嫁がくれ

米子市 沢田 千春

悲しむと人形も悲しい顔をする
秋大根こと亡母の味を煮る

好きな歌うたえば力わいてくる
広島の両手の祈り胸にすむ

尼崎市 角野 かず子

目で話すふたりに音楽などいらぬ
祭りの夜帰らぬ娘の噂聞く
軽口を柘榴の種も悔やんでる
結婚をせかされ秋の種を蒔く

西宮市 津山 冬子

子の漫画小言の母もそつと見る
ふと会った友の語調も初老めき
妥協した悔いが胃袋痛くする
ローカル線虫かご持つて乗る母娘

大阪市 岡田 ふみ

どの人の口も残暑を憎んでる
そろそろと読みたい本を漁ろうか
先生も生徒もこぼす新学期
義母の死に確執忘れて一人泣く

西宮市 藤村 宏子

祭酒和解の手だて考える
初秋の母の匂いの祭ずし
全身で跳ねて祭の波にのる
平常心すててしまった稲光り

自選集

藤井明朗

古希は古希喜寿は喜寿なる詩を詠み
東京弁に染み地震にも馴れて孫

新岡回天子

四季の風山の便りを告げにくる
人生の浮沈ドラマに似て終る
明日へ生きる献立を練り直し
不協和音多い世相に生き延びる
敬老日孫のお世辞を味方にす

水粉千翁

大きく笑い小さく笑い展覧会
ねえねえと袖を引張り展覧会
寄り道をして良かったねえと展覧会
おかしいな一人で笑う展覧会
ふふうー笑ったうちに解った展覧会

月原宵明

あのときを顔見合わせ夫婦老い
窓の灯の過疎の吐息が美しい
教えたきねがいを下駄が揃えられ
夕顔の笑顔見つけた揚げ花火
絵は動く語る偽れない筆に

市場没食子

足踏みをしてこの靴はわしの靴
目ざましの律気がある日慣る
眼をつむるなにも解ってない癖に
大正琴余生やすらぐ音がする
嫁の肩へ少し傾くヤジロペー

本田恵二朗

廃品に回す上衣のネーム削る
徳用マツチも僕も定退後の姿
助平な話せんよになってポケ

おみごとに師の七癖を盗み取り

さすがベテラン虫の居所洩らさない
むしゃくしゃを孫の笑くぼに吸い取られ

口角泡ステコ同士の政治論

黙秘するから黒だなと疑われ

黒川紫香

虫との対話はひとりぼっちが良い
七十のこれが最後かも知れぬ恋
手を貸した方も揺れてる渡し舟
天窓の月がだんだん冴えて来る
かめへんかめへんと男気にしてず

正本水客

意地通す男に月が従いてくる
挨拶はあとでと嬉しい言葉選る
寝返りの背なに生きざま見詰められ
みの虫のいたずららしい首を出す
ためらいのない緑は緑 赤は赤

若柳潮花

放言をふりまいて行く旅の人
一つずつ灯りが消えて人眠る
火の色に燃えてカンナの紅い恋
絆断つ夜が呼んでもとも知らず
残り物だけでも女箸を持ち

天と地のはざまにふわり生かされて

従兄七十年夫婦（二句）

高砂の夫婦晴朗持つ簪

高原の空にも嗅がすバーベキュ―

今此処にいます絵ハガキ現代版

酔ったふり肌で覚えた人生観

河村日満

付き添いに甘えきつてる団扇風

切った胃の痛さが笑顔つりあげる

これがわが貌か米寿か卒寿の瞳

わが腸のながさを辿るレントゲン

一喜一憂妻に無言の日がつづく

工藤甲吉

黒い金束のまんまで数えられ

七十に人生相談おそ過ぎる

惑うことあり清閑の師を訪ね

石ころも二つ並ぶと嬉しがり

宝石の店の前なら日々通る

大矢十郎

つじつまを合わす土産は駅にある

毒舌の毒はじわじわ喉犯す

尼緑之助

擊墜へ陛下も胸を痛められ
銀行も貸します医者とはチンコ屋
生水は飲まぬが里の水は別

野村太茂津

正夢やズシリ二賞両の掌に
伴走に応えてくれたテープ切る
形振りがまわす種を播き肥を遣る
熟っぽく手塩にかけてきた誇り
夕風に多情仏心読み耽ける

山内静水

NHK川柳天国・小島蘭幸受賞(一句)

ふれあい賞うれしゆうていとしゆうて
天高し貧乏詩人に深む秋
呵呵大笑つんぽ同士の立話
よき方のみ掌に戻って来た財布
そのかわり愚妻は飲めまず踊れます

橘高薫風

亡母三周忌

亡母の闇黒い壺から酒を酌ぐ

郡上八幡

宗祇の水柳一葉と掬うなり

初孫誕生

栗の毬孫は子よりも小さきよ

昭和58年度大阪文化祭 第35回 川柳大会

日時 昭和58年11月12日(土) 11時開場

会場 中央公会堂(中集会室)

地下鉄「淀屋橋」中ノ島公園内

宿題

「宝」

永田 帆船選

「時事雑詠」

広瀬 反省選

「砂」

高橋 白兔選

「脈」

森中恵美子選

「友」

西田柳宏子選

「走る」

定金 冬二選

席題

二題 各題2句 締切1時

(出句は出席者に限る)

賞

大阪府知事、大阪市長、大阪府
市教育委員長から「川柳賞」贈呈

会費

五百円(作品集代を含む)

主催

大阪府

大阪市教育委員会

川柳太平記 (66)

川柳の群像

松村柳珍堂

東野 大八

— 風呂場から胡瓜を揉んでおけといふ

— 鮎は焼かれ氷は鮎に似て残り

— 馬おののきて橋おののきて渡り

— 二、三日白によもぎの香が残り

— 十四の春剃刀が欲しかった

新川柳復興期の明治末年から大正期の初め
にかけ、右のような清新の句をモノとした松村
柳珍堂は、注目すべき一異材であろう。

柳珍堂は小島六厘坊、川上日車、麻生路郎、
木村半文銭、西田当百の大阪川柳社の一派に
句作上多大の影響力を示し、彼等若手の連中
から一名「重鎮堂」と敬称されてもいた。齡
も彼等より約十歳見當年長で、第一短詩型畑
では子規門から河東碧梧桐に傾倒し、俳人松
村鬼史として関西地区では有力俳人として名

があった。六厘坊らとは少々格がちがう。

柳珍堂は明治十三年生れ、二十歳頃から俳
句に志し、川柳に転じたのは二十五歳の折

「葉柳」創刊号から「番傘」「雪」「土団子」

を経て「揚柳」で終った。すなわち大正八年
九月十四日胃癌のため死去したからで、享年
四〇。麻生路郎は「揚柳」六号（大正八年十
月号）につきのような追悼文を寄せた。

「柳珍堂の死は日本の新しい柳壇の為に致
命傷であらうと思う。思想に非常に進んだし
かも表現法の最も巧みな同氏を失った事は遺
憾千万である。百人のやくぎな川柳家を失っ
てもいい、千人失ってもいい、ある意味から
言へば、ほとんど全部を失ってもいいから柳
珍堂一人を生かしておきたかった。この人を

ある時は友とし、ある時は師とも仰いでいた
日車氏の落胆は想像に余りあるものがある。

— きれし日の昼の暗さを忘れかね

この柳珍堂の句が出たとき私達をどんなに
唸らせ嬉しがらせ刺戟したことであらうか

日車はまた「酒少し飲めば淋しくなるもの

ぞ」の題名で柳珍堂の死を書いている。

「忘れませぬ今年（大正八年）六月、雨の

ドシャ降りの日、観魚と二人で彼を見舞った

時、柳珍堂は痩せ衰えた身体をムリに腹這い

今日は観魚君がいる事だから日車君の事につ

いて話しておきたい。僕ももう水くはないか

ら他日などといっておれない。二人ともよく

きいておいて貰いたい。日車君は僕の知って

いる人間の中で、いっちょよい素質を持った男

だが、第一に己惚れ心強い。第二に野心か

ら免れることができない。第三は軽はずみで

いけない。どうぞ僕が亡きあととはこの点に気

をつけて貰いたい。それだけいって疲れたか

ら暫く失敬すると横向きになった。柳珍堂と

観魚の別る日はこの日となった」

「揚柳」は八号で終止符を打った。柳珍堂

の死が原因とされている。当百、六厘坊、日

車、半文銭、水府、路郎らが持ち続けた大阪

川柳社につねに顧問としてまた社友として、

川柳に手を初めてからその死に至るまで、柳珍堂は若い六厘坊ら社中を指導し鞭撻し、物心両面にわたりあたたかい手をさし伸ばし続けた。彼等から重鎮堂と敬慕畏敬されていたのも当然であろう。

柳珍堂が最も眼をかけたのは日車と路郎であつた。日車との間柄はすでに前記したその臨終の遺言にも明らかだが、路郎とは、日車それに斎藤松窓とともに発刊したユニークな柳誌「雪」(大正四年八月)の事実上の企画協力者であつた。すなわち柳珍堂が俳人鬼史の頃からの親友であつた伊藤観魚を介し碧門の塩谷鶴平・宮林董哉・藤原游魚らのそうそうたる連中を参加させている。この柳珍堂と観魚の協力がなければ、麻生路郎後年の柳界への跳躍台ともなつた柳誌「雪」は陽の目を見なかつたであらう。

観魚は明治十年名古屋市の生れ、料亭近直の次男で、兄は子規門の実力者俳人天頼、子規没後、碧梧桐に傾倒し、碧の「続春夏秋冬」時代最も活躍し、昭和44年91歳で死去した。

ともあれ日車の追悼記を再録しておく。
「柳珍堂はつぎのように遺言した。▽句集を出さぬこと▽追悼会を営まぬこと▽追悼号を出さぬこと――また家族に対しては▽香奠を

受けぬ事▽葬式は血族のみにて行う事▽短冊類は一切焼き棄てる事」。法号は死ぬ三、四日前自分で「黙操鬼史居士」とつけ、ひたすら死期の至るを待っていた。葬式の際、坊主がこの法号は法にないと言つたが、この坊主こそ坊主ではない。黙操とは四、五年前碧梧桐氏が柳珍堂に贈つた黙操洞から出ている。葬儀には碧師の追悼文が寄せられた。

柳珍堂は俳句から川柳に手を染めたのは明治三十八年であるが、句風は古川柳の基盤から入り、「雪」時代にやや変調をきたし、「土団子」時代に最もその個性を発揮し「揚柳」においてその全人格を表現し、わが畏友は寂滅した。今日の大阪柳壇の人々は大なり小なり柳珍堂に刺戟され、啓発せられた事は言うまでもない。特に私(日車)をはじめ、当百、半文銭・路郎が故人に負うところが多かつたと思う。

柳珍堂の臨終の句はつぎの通り。

――北の空より我に迫りては消え去り 柳珍堂
柳珍堂はその実名および家業等については審らかではない。その遺言に従ひ遺族がその約を果たした為とも思われるが、帰するとこゝろこの人物は性寡黙で、かなり重症の自閉性であつたらしい。碧梧桐が「黙操洞」の洞名

を付した点も無縁ではない。岐阜から出ている塩谷鶴平門下による俳誌「俳藪」には、わずかに観魚の稿で、俳人鬼史から柳人柳珍堂の転移は、碧梧桐の新傾向俳句の前夜、すなわち碧師三千里の行脚を前に、鬼史は「定型墨守」と人間探求の俳諧の真を川柳に見出しこの過渡期に立つユニークな川柳に、わが俳諧のこゝろを托そうと依頼した」と記されているが、それ以上はわからない。

柳珍堂の死については、本誌記載の「麻生路郎物語」No.9(昭和50年9月号)で詳記したが、柳珍堂の遺言について麻生霞乃は、その読後感を筆者あてつぎのように寄せている。

「柳珍堂さんの遺言をよんで何と思ひ切りのよい遺言だと感心しました。(中略)短冊まで焼きすてよとの御命令は凡人のなし得べきことではございません。日車さんへ御忠告はさこそと思ひあたる節もございます。私の家にも柳珍堂さんのものは一つも残っていません。そのお人柄は終生私の心から離れないのでございます。六厘坊さんの死と別に、路郎も長い間故柳珍堂さんの死を悼みつけておりました(以下略)」

★次回は「川上日車」

俳風柳多留廿六篇研究

(十三丁・十四丁)

小野真孝・本多正範・石田成佳

大屋六郎・八木敬一・鈴木 黄

石田晋一・南 得二・多田 光

故岡田 甫

207 船頭に紫衣でおぶさる運の能サ

小野 盲人が検校となつて紫の法衣を着し、
両槿木の杖をつくには、千金を上納せねばな
らなかつた。又盲人は殊の外弁財天を尊崇し
ており、わけても江の島弁天には多く参詣祈
願したものであり、特に検校に昇進した際な
どは参籠礼拝したもののようである。

句はこれを詠んだもので、運よく検校昇進

がかない、船頭におぶさつて江の島に渡り、
お礼参りという訳。

多田 賛。

岡田 同。

208 品のよいたすきをかける御くし上

小野 一般にたすきがけの身仕度ならば、力
仕事の準備とみられるのに、佳人の御くし上
げの爲のたすきがけとあらば、品のよさが現
われることであらう。浮世絵にありそうな図。
本多 賛。

おくさまの不二を見おろすおぐしあげ

九七・六

のような場合であらう。

多田 賛。

岡田 同。

209 白石に先をとられる朝帰り

小野 一般に男の顔は黒く、女は白い。それ
を基石の黒白にきかせたもので、朝帰り家に
入ったとたん、女房に先をとられ、まくし

たてられたという句。

本多 本句の「白石」は伊達家の国家老白石
城主片倉小十郎。綱宗が高尾のもとへ連夜の
所通い、その御放埒を止めさせようと、小
十郎は門番に化けて太宗の帰りを待ち受けて
諫言した、その有名な逸話をよんだ句。

本句は、白石・先手など囲碁用語で結んだ

句であり、囲碁の先手は黒石であるが、白石
に先手と洒落れた句作。

多田 賛。

岡田 同。

210 とこのだへとハ失礼な金屏風

小野 山王祭・神田祭には町家の店先に毛せ
んをしき、後ろに金屏風を引廻して、親戚知

友を馳走したものだ、その金屏風を見て、「どこのだい」とは、自前なら尚更のこと、仮令借物にもせよ、正に失礼千万な話ではある。

多田 賛。はじめからそう決めているところが、私としてはおもしろく感じた。「お前の家にあるはずがない」といわねばかり。

岡田 同。

211 大勢を涼敷かへす見せ開キ

小野 今でもそうであるが、新規開店には粗品を呈上したものだと思われる。そこで涼しく帰すというからには、うちわもしくは扇を景物としたのではあるまいか。

本多 見せ開キを新規開店としているがこれでは大勢がピンとこない。こゝは、京都四条河原夕涼の明けをさすのであろう。大屋 本多氏の四条河原の床と考えても、「かへす」の意味が通じません。

南 毎年五月二十八日の両国川開きの事と思つていましたが……。

多田 景品の団扇と思つていた。

岡田 礎稿の団扇・扇子説に賛。

212 声今さらにわつかなる娘の琴

小野 謡曲「羽衣」の「迦陵頻伽のなれ／＼

しく、声今更にわづかなる」の文句取。いろいろに強要され、やつと琴を弾いてはみたものの、とても事に琴唄の声までは出ず、かすかに聞えるのみ。

本多 賛。

娘の琴声今さらにわつか也

四三・18

の本句の焼直し句もある。

多田 賛。

岡田 同。

213 月やとるらんて花娘出にくかり

小野 「夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを雲のいづこに月やとるらん(百人一首)の文句取。お客に挨拶しようとかの間に来たら、「立派な嫁御で、あれならすぐにも後取りが出来ましょう」などと噂されているのが聞えて、恥かしさもひとしお、どうにも出るに出来れずといった状景。

本多 「月やとる」で嫁の妊娠を暗示。未来ではなく、すでに妊娠していると解すべきで次の柳句もある。

月やとるらんそろ／＼ぼろをため

二二・二六・38

多田 本多氏説賛。なににつけても遠慮がちなので、このことではなおさら。

岡田 少々腹がふくれ出して来たのだ。

214 雁かねのそはを白魚かけまハリ

本多 「雁かね」は九月蚊帳につける雁金、茶の雁金、雁金額があるが、本句は雁金額をさす。

句意は、雁金額の生際をかすめるように、しなやかな白魚のような指先が、額へきれいに白粉が付くように額を動き廻るといふのだらう。

大屋 「雁かね」は琴柱のことではないかと思ひます。十三箇の琴柱のそはを白魚のような指が、かけまわらうに動き、美しい曲が弾じられるという句だらうと思つていました。鈴木 礎稿に賛。雁かね 琴柱という確証があれば、大屋氏の説もつなずける。

石田 晋 雁と白魚の季節のことばでまとめある点が指摘されよう。例句の良いのが見つからないが、大屋氏説に賛。

秋風や調べなるらんかりかねの

こちを立てて鳴わたるかな

源師光

南 大屋・石田説賛。雁かねは琴柱です。

多田 同右。岡田 同。

水煙抄

黒川紫香選

熊本市

宇野昭代

西宮市

紀市郁栄

心にもないから齒の浮く世辭が言え
席ゆずる声がやさしい女高生
マネキンの着ていた時は似合つたに
釣竿が置いてきぼりの俄雨
らく書をほめたら襖ぬりつぶし

和歌山市

福井桂子

団体の一隅で持つ自尊心
ボヘミアン昨日の旅がまだ続く
セレモニ―主役の好きな旗を振る
茶柱が立つて冷たい風が吹く
重ね合う手の温もりが欲しい夜

藤井寺市

赤木和子

いくじなし孵化するおんなへ手を貸さず
三面鏡に一途な顔がひとつずつ
拒んでみても鞆に収まる他はなし
漕ぎ出でし小舟やさしいひとに遇う
それっきりになるかも知れぬ受話器置く

胃を切つてこんなうまいめしを食う
逢えぬ日は心のリズム狂いだす
かも知れぬ尋常でない頭痛する
若すぎる妻と歩いたことがない
兄の忌に義姉と息いが食い違ふ

八尾市

高杉千歩

あまりの早さに去年の日記拾い読み
メロン買うもてなしなければ鷹揚に
善人で馬鹿で孤独に耐えられず
土壇場で見せた涙に救われる
カキ氷二杯記録破りの夏果てる

尼崎市

丹下玉子

本能が疼く男の事業欲
コンパスの中で夫を遊ばせる
蛤のつぶやきサツと砂を吐く
捨てられた女に似てる紙コップ
十字架を立てて少女の鳥の墓

名古屋市

藤井高子

美しい人の嘘なら貰うておこ
前言をコロリと変えて生きのびる

造反の構図寝返り打ちながら

九官鳥へうらみ言葉は教えまい

盛装に齡を耐えてるエレキバン

和歌山市

後藤正子

夢の馬車いくつも闇を越えてくる

矢意の日白い心を取り戻す

ひょうたんの出来は上々平和だな

肩の線やさしくなれば妻の顔

時々はおかめの面を付けて待つ

今治市

矢野佳雲

何べんも夕陽の沈む汽車の窓

道傍の石が鳥居の上に乗る

古里の駅が一番駅らしい

塩加減さぐるアサリは足を出し

帰る家あるから旅も面白い

尼崎市

田中晴子

いつの日か渡れる虹がそのあたり

小石でもせいっぱいの波紋画く

仲直りしたい窓から月あかり

ささやかな楽しみ小さな菊が咲く

じゃんけんに負けて友情慈なし

高槻市

竹内花代子

虫だけが秋を知ってる熱帯夜

寝ころんで月の動きを見る夜長

雑草も歩く道だけあけてくれ

嫁った娘がきつちりおかず買うて来る

六甲山お色直しの樹を植える

豊中市

満仲きく子

前身を蝶は信じるのですか

カラオケにうつつぬかしている平和

子らはみな恙なしとか赤とんぼ

芋の葉の露にうつった空の青

イベントがぎつしり楽しい秋になる

和歌山市

中尾まゆみ

おなさけで好きとは少しずるいかな

十五歳の道に明日の夢がある

鬼になった母の心が読めてくる

ラッシュアワーの中でゆずった日の座席

間違っていないから意見はね返す

米子市

林荒介

十匹の蟻が引いてる砂糖壺

祖父の話に疼き始めた指の先

真夜中の窓で拾った月の櫛

結界の土堀の屋根に雲が降る

そして十二月菓子折りひとつ提げて行く

名古屋市

越村桔梢

再会の道は二丁目かも知れぬ

モナリザが歩いて来たよな女に会い

天井の節穴不倫を見てしまう

弔客のなかに借金取りがいる

西条市 片上明水

輪を描いて輪から出ようとしない妻

いつの日か戦争展がなくなる日

丁寧な鰯をむしる狭い膳

一つずつ母の手で採る秋の茄子

東予市 小山悠泉

膝少し崩し女に隙がない

パートして稼ぐ女の口が過ぎ

魚屋も弱気になって来た日暮れ

あと僅かやつと我が家になるローン

西宮市 材木光子

愛犬が死んで夫婦を無口にし

盆休み一人暮しの母が待ち

魚釣の楽しみがあり帰省する

定年のプランの中に遍路旅

新潟県 高野不二

百円の賽銭に目をさまされる

呑みすぎぬ様に女房についてやり

いじめられるから人気のおしん

強盗の見分けはつかぬ自動ドア

尼崎市 関口幸子

宅配でみやげが先に届けられ

あの時の夫確かに敵に居た

焼芋は新聞紙がよく似合う

誘ってもないお方が座ってる

熊本市 高野宵草

母死す(四句)

死の刻が迫るよ昏くなってゆく

孤独では逝かさぬ母の掌握り締む

初めての道を通って火葬にゆく

母よ母よ熱くて小さき骨拾う

吹田市 茂見よ志子

境遇が同じ枯葉の吹き溜り

虫干しは追憶つきつき抄らず

臨月になって帰ると娘はじらす

歯の弱い者が揃っておじや好き

大阪市 古川美津枝

わからんか何か言いたい女の背

クラーの風で風鈴鳴ってます

自画像も風に乗ります秋ですわ

叱られた顔を描いて叱られる

尼崎市 春城武庫坊

香水に誘われて来た夜のロマン

船が出て涙が残る街となる

老いの坂登ると骨のきしむ音

宝石が魅力男に振向かず

鳥取県 森山盛桜

神に打つ両手あたりに嘘が有る

子に見えぬところで旗印を変える

まるい水掬う両手が決まらない
二つ目の顔を對抗馬に売ろう

鳥取県 中原 諷 人

男と女さざんかの実が欲しくなる

目障りになるから僕の妻にする

水割りの濃さで子宝など忘れ

体重へ靴耐えている弾んでる

伊丹市 慳 谷 郁 子

退院で家庭の息吹き取り戻し

怪獣一つ昨日帰った孫の部屋

熱帯夜お前も記録が欲しいのか

書展から出ると真白い姫路城

高石市 浅 野 房 子

六十路来てまだ迷いあり木瓜の花

鰯雲いつか見た様な色で暮れ

曼珠沙華炎の色が飛火する

港町別れを告げる秋そこに

寝屋川市 岸 野 あやめ

啄木でないが自分へ花を買い

ある日ふと蟻も反逆したくなる

そんなに気取ってちや本音が吐けませぬ

酒を飲む場所で身許が割れて来る

寝屋川市 平 松 かすみ

北向きの洗濯物を差し変える

小耳にはさんでお金を借りられる

世渡りが下手で明日の糸を繰る
本当の話し相手は鏡です

尼崎市 吉 永 伊三郎

裏町を愛撫に飢えた影がゆく

俄雨縄のれんから電話する

窓際の椅子でばそぼそ鼻毛抜く

橋一つ越えると甘い風になる

吹田市 井 上 照 子

カーテンに肢からませて黒い蝶

赤を着て鏡に少し照れる年

へそくりのみんなに知れた大掃除

青春の夢成らぬまま白髪に

出雲市 河 原 恵美子

となりとの差がつくグラスの奏でる譜

とまり木の後姿にパパはなく

ドレミファソおいでおいでと秋のうた

お味いかが天から秋のメッセーじ

熊本県 大 川 幸 子

言い放題腰かけ程度の職だから

密やかに娘と張り合っている女心

旅の空ちよっぴり悪女ぶっている

隠し金山成る程ドラマへうなずける

大阪市 堀 い く の

あじさいの立ち枯れかなし典子逝く（従妹の娘死す）

姑になる少し背のびしてみよう

ささやかな駆け引きたのし朝の市
潮焼けの笑顔に負けて買っている

大阪市 萩谷まさ

TV座敷高校野球独占す

病床の母の背にふるシツカロール

糊利いた浴衣揉む手に宵の風

心まで干涸びそうな暑い夏

熊本市 有働芳仙

4Bでがんじがらめにするモデル

留守番が二階から見ると遠花火

そんな時嘘がつかない父が好き

腹の子が強い味方になりそうよ

近江八幡市 前川千賀子

悪友をワンクッションにして和み

曼珠沙華写真を焼いた過去がある

秋の海夏のパズルを解いてゆく

一人居の女夜長を持て余し

富山市 舟渡杏花

おだやかな余生がほしい耳へ栓

すこし名が出てきて葉巻口にする

毛皮展撫でるだけで満ち足りる

仁王様ひとりでガンバル山の寺

宝塚市 丸山よし津

話上手にいつもの道が近くなる

宝石も金庫の中では光らない

一族の親睦会となる法事
旅立ちに貰った花束の置きどころ

島根県 大浦ふみ

体ごと絞ってセミは声にする

この地にもおしんまだまだ生きており

お菊の井戸おきくの声がしたような

涼しさが淋しさと呼ぶ秋の昏れ

羽曳野市 麻野幽玄

マネキンが着ていた程に映えぬ服

女医さんへパンツ半分下げて診せ

保険金妻へ残して先に逝き

火災保険やつぱり掛けとく共稼ぎ

尼崎市 山田保蔵

産声をあげた田舎はダムになり

あの星のどれかに戦友が眠ってる

よい帽子見つけたけれど小さすぎ

縁側で猫の口ヒゲよんでみた

大阪市 松尾柳右子

親のひくレールははずして見なくなる

計画表書いただけの暑い夏

秋風の簞笥へしまふ夏の恋

交差点婦人警官美人すぎ

高知県 曾我部裕

応接間とても農家と思われず

年寄りにされたさびしい日をだまり

後添いがとてもあかるい顔にする
ジャイアンツ次第で変る酒の量

尼崎市 大江 かね子

長持の古代鏡にある先祖

絵葉書でハワイの二人のろけてる

何事も暦で決める古い祖父

お隣は高いサンマを焼いている

尼崎市 矢萩 貞子

まん幕が呉服を囲む展示会

丹波路にのぼりがまありにわか雨

いやいやをするよう粘土ままならず

城跡は傘に雨音きくばかり

大阪市 日阪 秋子

正直な女で童話の中にいる

天高しちびた靴なぞ捨てちまおう

それだけの人だったのか冬の月

益田市 里本 たかし

東京との距離は雨が降って居る

レストランで女が独り手を拭う

父親へ固い週刊誌を渡す

八尾市 宮崎 シマ子

指切りなどあてにはしない流れ星

サンマ焼けて大根買うの忘れたり

掃除機は隔日勤務老いの家

尼崎市 児玉 歌子

土砂降りの真ん中において待ちぼうけ
病む姑へ台風進路言わず置く

お世辞など言えぬが握手して上げる

岐阜市 市川 鱈魚

止り木のコップ明日のある笑顔

心まずしき男で花の名を知らず

全集を揃え豊かな秋の書架

愛媛県 八塚 三五島

自分だけは裏切らなかつた安堵感

常識を破っているから本が売れ

甘酒がうまいうまいと母の老い

諫早市 江副 二牛

初盆の子へ好きだった菓子供え

盆送り済めば静かな茶の間の灯

太陽の匂いが好きな山男

兵庫県 森脇 和子

カロリーは知らない姑のかくし味

寝そびれて枕に聞かす数え歌

ローカルの空席トンボがいてのどか

藤井寺市 前山 美恵子

おしゃべりが好きなポプラの独り言

病室の孤独な夜は長いこと

不器用な男に貸した膝枕

大切にしすぎて派手になった赤
寝屋川市 堀江 光子

何色か知らぬ朝顔育ててる

釣りだけはすんなり意見の合う親子

唐津市

浜本 ちよ

斬首なき世されどゴキブリ見逃がせず

ブロックの穴を残らず探る蟹

向うでも受話器置くのを待っている

大洲市

米沢 暁明

転宅の自慢が海の見える丘

久々に母のうどんへ舌つづみ

舌ぺろり幼な子だから可愛いよ

高槻市

笠嶋 恵美子

人は去り秋の女の子となる

悪妻のハートあなたにあげたまま

スクラムを組めばパートも労働歌

米子市

足立 由美子

底辺に生きて心の底も知る

短所だけ父親ゆずり母ゆずり

理想とは全く違う娘に育ち

守口市

岸野 キミ

再放送おしんに涙待っている

タイガース負けると無口になる家庭

盂蘭盆に亡夫と共に見る野球

岡山県

小林 妻子

洗濯機我が家の起床ラッパなり

凡妻と凡夫の知恵で建てた家

郵便屋洗濯物の間から

岡山県 土居 耕花

愛語など探してもない広辞林

としよりのカルテは何も書いてない

妻よ出て見ないか犬が二疋居る

西宮市 朝山 千世子

秋場所に老いに活気が湧く茶の間

鈴鳴らす遍路峠も苦にならず

息子の汗に母は心で掌を合わせ

西宮市 松本 一郎

子に縋るつもりはないが子を思う

妻そばにただ居るだけで安堵する

美しく老いることのみに生き

尼崎市 佐藤 美代子

情念を不協和音がかき乱す

縫いぐるみメガネをかけた熊がいる

五階から投げ文を出す夜鳴きそば

大阪市 権安 達一郎

さくら貝ビタミン錠の横におく

久しぶり話しながらと碁盤出す

豆腐屋が毎日表で待つてくれ

守口市 森川 まさお

つけものを色で食べさせるのも京都

青葱が動く前歯にひっかかり

誕生日にもプレゼントはチョココレット

芦屋市 上田 佳秋

ガンの友見舞い存分笑わせる
灯を消せば寡婦も女となつてゆく

世渡りの下手な夫が憎めない

枚方市 二宮 山久

真青な空へペダルも軽くなり

寝化粧を落して女の日が終る

退社する友へ青空すんでいる

守口市 結城 君子

お世辞も愛想もいらぬ腕の冴え

雷に追つかけられて家につく

淀屋橋息子勤務のビル見上げ

吹田市 栗谷 春子

糞虫がもみじ食べるを見てしまふ

贗ブランドへしらせる程のお世辞言ふ

弘達的眼鏡かわつて秋に入る

大阪市 稲本 凡子

孫（小学五年）退院

簡条書の条件でひとまず許される

退院と決まれば夜の長さを持てあます

男の子だけに体操の休みが気にいらず

今治市 新居田 胡頹子

ホステスは酔わせる世辞を心得る

嬉々として迎える孫を掬いあげ

着飾ったことばを使う友の距離

竹原市 石原 淑子

水割りに本音浮かべてグイと飲む

リング酢にふるえながらもダイエツト

プロボーション女ですもの捨て切れず

竹原市 佐藤 令子

目覚しが鳴る子供部屋が遠くなる

ふつつつと恋しさつのる彼岸花

手枕でスヤスヤ夫に支えられ

竹原市 岩本 笑子

サンショウの実のはじろうている赤さ

この人も一人夜行の静けさよ

口紅をつけると不思議がる二歳

大和高田市 岸本 豊平次

一言が隣を遠い人にした

片減りになって自分の靴になり

結婚も離婚も三文判を押し

羽曳野市 田中 隆二

コーヒーの香りの中に朝の顔

小刀の傷見当らぬ子の机

共白髪妻はいやよと髪を染め

兵庫県 脇田 米朝

燃えていた頃の写真の色もあせ

叱られた通り人形叱つてる

肩書を外してからの人間味

島根県 東原 福子

ありがたさ忘れて了っている平和
半分になった視力で毛糸編む
虫時雨今日一日を振返る

鳴門市 八木芳水

病み上り隠す自転車軽快に
老人会しゃべれば役を持ち込まれ
作句からばけ突き離し皺もとれ

喜屋川市 立床晴風

お多福の愛がこぼれる片笑窪
ネクタイも二枚目らしい柄を選ぶ
暑がりの癖に冷房いやだんね

大阪市 板東倫子

金魚鉢金魚も汗をかいている
プールの子熱帯魚のような顔をする
亡母八月十六日死去

涙なきお通夜長寿の大往生

八尾市 葛幸子

ろうそくをたよりに易者何か言い
白襟がずらりそろった祝酒
いそいそと年がいもなくおしやれする

岡山市 山本玉恵

舞扇持って女の影を引く
逢う丈を小雨がそつと邪魔をする
春蒔いた種からわらいを秋もらつ

姫路市 人見翠記

うれしさはシルバーシートに掛けぬ孫
盆休み母娘で衣裳の話なり
一匹がリズムをこわす虫の声

高槻市 芦田静江

膝小僧混って静か盆の寺
お休みの一言嬉し老いのへや
明日に賭けねむい蓄の数を見る

大阪市 塩田新一郎

夏木立口だけ笑う娘が一人
巡る旅伊豆には伊豆の唄がある
おだてられ酒仙が勘定払ってる

泉南市 坂根流水

民間機ミサイルで撃つ平和主義
狂う世もまともでゆくより術知らず
暑さにも負けずこおろぎ鳴きはじめ

青森県 波ただお

旅先のコーヒーの味想い出し
地も海も燃やし太陽西に入る
涼風へ木の葉かさこそ語り合い

大阪市 北山悟郎

老人呆知らぬ間に梓の中に居る
赤飯に家族の顔が円くなる
炎天に耳の奥からああ軍歌

鳥取市 若林一止

六十がまだ恥ずかしい夢を見る

四海波しばし静かな角隠し
辻切りの顔は提灯だけが知り

大阪市 松本 ただし

大韓航空事故に想う

号泣に答える声なき北の海
動哭の遺族に遠慮ないマイク
大国のエゴ真実と距離があり

島根県 岩田 三和

本番のときは疲れ切った足
理想論だけで力学知らぬ党
娘さん無口にさせる蟹の味

島根県 落合 正江

一枚の写真家族の丸い鼻
葉生姜を今年も漬けて秋祭り
孫二人留守番なかなか多忙なり

西宮市 草刈 堕駄

目次だけ読んで解った気の雑誌
峠路の野仏いつも花絶えず
包紙そのまま本の棚ざらし

弘前市 真喜内 實

孫が来て一日甘いおばあちゃん
微熱からきらわれた朝仏顔
ねぶたねぶた夜空も街人も燃え

紫の可愛い花におはようと
大和郡山市 岡田 すみれ

たんぼ道人情ありて去り難し
孫達の帰り待つ日の初秋の風

大阪市 上田 柳影

ボトルキーブ夢を残して置くつもり
白粥がこんなにうまい恢復期
あこがれた白バイが今追って来る

高槻市 上原 逸

蟹が死に金魚も死んで新学期

山歩きリュックの重さ汗がしみ
コスモスに少女の趣味がぬききれず

兵庫県 伊沢 午郎

廃品回収主役はいつも古新聞
先生が言うてたと言う口ごたえ
絵に書いたような富士見た旅日和

兵庫県 市橋 茂樹

ロボットが町の散歩も夢でない
参考にメモしたメモが見つからず
決断をにぶらす持病持っている

唐津市 前田 廣幸

山あいの医院バス待つ人で混み
盆栽に成らぬ女が路地で咲き
家庭内信号無視へ婦警ママ

大阪市 吐田 公一

着くたびに軽い寝醒めの冷房車
娘がくれた旅にはしやぐ妻の口

定退のページをめくる今朝の靴

水戸市 上鈴木 春 枝

旧姓を捨てて見事に変身し

涙出るドラマは嫌いだきらい
初めての嫁引合す夫の墓

東大阪市 小林 勇 人

妊婦服小さな命主張する

久しぶり郵便がきた納税書

湯豆腐と決め豆腐屋のラッパ待つ

院長は美女血圧に嘘がある

島根県 園 山 世 似

鳥取県 福 田 あや子

首振らぬ扇風機でよし老いの部屋

頭から飛び出す構図画布走る

震度三ぐらいの親爺となりにけり

敬老日運動靴を父に買う

揚げ花火ブラウン管がはじけそう

火の車廻し続けて金婚式

大阪市 野 村 八 重

尼崎市 繁 野 貞 吉

両親の理想をになう子供達

すやすやと眠る子供に神を見た

湯上りに浴衣着るのも久しぶり

大阪市 小 野 風 童

のんびりと畳で寝るのも久しぶり

王様がいるのでうちが平和です

兵庫県 奥 野 テ ル

大阪市 今 西 静 子

本当の顔は鏡の裏におき

狼に食われる嘘を教えとく

足袋脱いで果した義理へ安らぎぬ

ベビーコーナー歩いて子供欲しくなり

褒められた謎解けぬまま椅子を立つ

面会の孫スリッパをべたつかせ

西宮市 飯 森 泰 子

山口市 高 崎 雀 声

土を買う屋上庭園花一ぱい

定年へ一年一年風冷ゆる

久しぶりの地下街どうどうめぐりして

二次会よりだんだん出してくる

久しぶりこの雨の中歩きたい

岡山市 吉 末 謹太郎

羽曳野市

天 崎 只 士

ごまをする猫がふびんで捨てられず

夫のまわりを歩きつづけている安堵

肩書を消しきってない名刺出す

愛憎が静かに消えてゆく写経

岡山市 藤 瀬 比沙子

八尾市 松 下 蕉 露

勘定が合えば算盤振って見る

兵庫県

浜田雅子

東大阪市 三宅旭

カーテンを開けて楽しむ秋の月

孤独でも楽しむ権利許される

兵庫県

円増貞子

泥かぶりながら成長する子ども
千円が当たりやめでたし宝くじ

島根県 福岡芳枝

ご機嫌ののだだ湯舟に浮いている

草を抜く掌へ雨蛙ピョンとのり

島根県

堀江百代

返り咲く花は節度を見失い
旧友の手提ぎつしり後日談

高知市 北川竹萌

窓にお茶おいてみんなは夢の旅
押しかけて女五人の揃いぶみ

大阪府

田中節子

鮎かかる手応え綱の手が弾む
ゲートボール出掛けて愚痴は聞かず済み

千葉県 中村有人

補聴器買うまで心の準備二年かけ
宿題が残って床屋はあとまわし

大阪府

山脇正之

十年で時代用語も変るなり
野心家が推理小説読んで居る

守口市 長谷川司

ひさしぶりでもなくせにながばなし
久し振り釣った魚で友と酌み

島根県

北川民子

里からの土産はやはり自然食
落書が好きで絵筆が達者な子

広島県 望月晴彦

口八丁程の品位の欲しい女
秋の蚊の羽音は夜ごと弱くなり

吹田市

西岡豊

おはように路地の笑顔が日本晴
水割で恋のサーブを受けて笑む

大阪府

宮川木々

菖蒲湯の菖蒲枕に雨の音
デッキチェアーに偉人の伝記昼下り

泉佐野市 大工静子

若夫婦ペアーの赤がまぶし過ぎ
ホステスの何祈るやら法善寺

和歌山市 桜井千秀

一本氣ソロバン弾く間が持てず
悪知恵を貸して肝胆相照らし

島根県

高尾 よし子

ポリウムをあげても空しさ募るだけ
値上げ待つ荒地昼顔の花盛り

富田林市

植松 慶子

通院に猛々しきや入道雲

うろこ雲夏の疲れを問うてくれ

豊中市

辻川 慶子

夕立を待ちわびながら空見上げ

すみませんタクシーに乗る近い距離

鳥取県

石谷 忠良

芸達者だけでつかんだ課長です

赤字線朽ちた枕木打ち直す

島根県

岩佐 富子

香水が猛暑の路地を通り抜け

核家族西瓜一つをもてあまし

大阪市

服部 頼一

浜の子に終止符打った土用波

押し売りの足も不景氣察知する

大阪市

渡部 里美

御先祖もさぞ暑かろう花と水

ミサイルを持てばロボットめいて来て

熊本市

北川 一進

首振りの玩具孫との良い相手

うやむやは嫌い女もその気なり

滋賀県

安田 志津

鈍行の駅々で聞く土地訛り

いらだちにこたえて今日も湖さわぐ

大阪市

野田 君枝

こぼれ落ちそうな屋上ビヤホール

立秋は猛暑の中にある暦

大阪市

朝倉 利義

いざという時は息子がいる安堵

米ソさえその気になれば来る平和

高知県

小沢 幸泉

今年また中途半端な夏が過ぎ

風見鶏ちょっぴり向きを変えた秋

吹田市

横山 青果

消しゴムを探す日もあり人格者

栄養があると鰯を食わされる

島根県

藤原 秀穂

波を打つ喪服の胸の夏台風

出来ばえはバカチョンカメラの故にして

和歌山市

寺田 裕美

秋ナスの色に食欲励まされ

例えばの話に主人が殺される

大阪市

田淵 晴子

久し振りに物言う盆の日に

理想の娘嫁にしてからあらが見え

鳥取県 羽津川 公乃
大安の式場五組目のあせり
家系にも初代と当主中だるみ

島根県 田中 ヒデ子
みな女割れんばかりの旅の宿
里いもの露で墨する天の川

和歌山県 西村 重彦
久し振りの君の笑顔の嘘をみる
学業は模範生です理想主義

大阪市 堀口 欣一
湖西線進むここの菊日和
モー君も行く朝霧のハイウエー

大阪市 山本 炬齊
戦災後三十年振りだという白髪
早起きの老いの仕事もはかどらず

橿原市 西本 保夫
胸を張る住友マンへもう定年
住友と言う名の重し世間態

米子市 宮本 佳女男
道草も無駄ではなかった人生譜
よい女房持たねばうだつあがらない

和歌山県 山田 久子
信じたらあかんと知った請求書
なによりの薬と子を連れ母見舞う

指宿市 渡辺 伊津志

廃船の錨鎖が岩を彫刻す
佗しくて暖かった木賃宿

米子市 本吉 宗則
永平寺僧は何処に杉に問う
ハイヒール賽の河原も闊歩する
（北陸京へ三日の旅）

高知県 山下 登舟
熱帯夜覚めて驚く北枕
気兼ねなく脱いで我家の籐寝椅子

岡山県 池田 半仙
心配が一桁違う楽天家
自転車を楽し続けて古稀も過ぎ

大阪市 平井 露芳
坂越えてばてた仁川のピクニック
丑の日の鰻組上で拗ねて見せ

泉佐野市 真崎 浪速子
高座今笑いの渦となる粗忽
池高が敗れ神話の崩れる日

河内長野市 糸谷 春草
花火見る姿浴衣に団扇持ち
夏休みラストサンデー図書館へ

出雲市 藤井 晴月
島根県歌謡選手権大会に出場
歌が好きナツメロ演歌は我が糧に
歌謡選手権大会済む安堵

愛染帖

橘高薫風選

コビーされた地図よマンネリではないか

ヒーローが沈むと月見草が咲く

朱子市 林

荒介

顛末は語らず夫の朝帰り

あの雲に蝶のお墓が建つそんな

奈良県 宮川

古都路

乗りすぎ小さな旅の後もどり

昼寝にも後生を願う北枕

青森市 工藤

甲吉

秋雨のふる日カンナは血をたらし

きのうより今日また高し秋の天

今治市 月原

宵明

こおろぎへ男が皿を洗うてゐる

まん丸になつて消ゴム意地が無い

高槻市 田崎

あき子

顔に合う色合いいつか決まりたり

タクシーが客を大事にした昔

長野市 岸野

あやめ

そんなこと知らん言うてる秋の風

孫を抱く時邪魔なネックレス

岡山県 白岩

文衛

考えぬ一日だった手を洗う

忙の字を心亡ぶと読んでみる

吹田市 横山

青果

有刺鉄線きれいな花が咲いている

玉葱の涙よ主婦になりきれず

島根県 堀江

正朗

音みんなみ仏として聞く峰寺

総入函がたがたたと震度三

奈良県 村上

春巳

バター臭い子供ばかりで柿熟す

撃たればやっぱ俺も銃を執る

宇田市 結城

君子

お茶漬の味を覚えて孫帰る

茜雲見上げてる間にバス通過

吹田市 栗谷

春子

時刻むほかに時計の息づかい

お世辞なんか言つてわが子も遠くなり

和歌山市 福本

英子

シーソーの真中辺のお人好し

まだ傷の癒えぬ女の赤い爪

尼崎市 春城

武庫坊

噴水は不況支える力無い

京言葉おかされている新市街

吹田市 井上

照子

良い癖がとれてしまった夏休み

回復の見込みと聞いてまた祈る(酔々先生に)

指宿市 渡辺

伊津志

価値ある御辞儀を習う新入社

肥えてきてから思いやり置き忘れ

鳥取市 森田

熊生

正直に話して腹がへつてくる

嘘かくす顔を子供にのぞかれる

唐津市 仁部

四郎

質問の二の矢をほめてやり教師

三本の矢が重すぎる核家族

高知市 山下

登舟

二度の職今度の職は汗をかく

起重機に笛がもの言う作業場

西宮市 朝山

千世子

放浪癖家庭の平和を物語る

先祖の血芸に打ち込む性を持ち

和歌山市 西山 幸

近江八幡市 前川 千賀子

笠岡市 木山 遠二

伊丹市 榎谷 寿馬

岡山県 土居 耕花

町田市 竹内 紫 鏑

朱子市 八木 千代

八尾市 山下 みつる

もうすぐに昭和ばかりになる職場

トネルの長さ気付かぬ馬鹿話

唐津市 木塚 素石

怪談のあと口直し花火にし

花束がデツカイ尻によく似合い

奈良市 森田 カズエ

角砂糖一個にかえて老い独り

西宮市 奥田 みつ子

点字読む指から恋がかけのぼる

高知県 曾我部 裕

社長室嬶びる男を置いて出る

尼崎市 西村 かすみ

近所の巡査となんでもない話

島根県 小砂 白汀

てつせんに紫いろの恋のネガ

唐津市 久保 正敏

農を継ぎ果樹を育てる若い貌

和歌山市 若宮 武雄

一人ずつ唄いたまふ秋の酒

尼崎市 児玉 歌子

シヨベルカー私の過去へ届きそう

富田林市 岩田 美代

こんな時の横顔ばかり馴れている

島根県 堀江 芳子

さよならを言わねと会える日が来そう

唐津市 浜本 久仁彦

親も子も孫も昭和の誕生日

松原市 佐藤 藤子

人を待つ空気の揺れを敏感に

富田林市 藤田 泰子

面を彫る己の顔に似る怖さ

岡山県 井上 柳五郎

知らぬまわからぬままでこうきめた

和歌山市 浦野 和子

橋のない川の向うの夢野かな

和歌山市 中尾 まゆみ

風の音とらえて秋の日記帳

島根県 福岡 芳枝

山崩す轟音祖先をゆり起し

富田林市 植松 慶子

弱虫が追うのは白い胸の母

羽曳野市 吉川 寿美

十戒の一つに背く薬指

岡山県 山本 玉恵

一呼吸置いて知恵者は口を出す

寝屋川市 堀江 光子

咲き納めかと思えるバラ色紅し

岡山県 池田 半仙

悪夢でも追った頃ほみえた虹

尼崎市 田中 晴子

枯れるには時間がかかる秋ざくら

鳥取県 福田 あや子

夫入院短かめに髪切つてあげ

尼崎市 伊藤 春子

古写真もしも戦争なかったら

大阪市 江城 修史

率直に話して返り血を浴びる

今治市 矢野 佳雲

腰掛けた石は他人の顔でなし

宝塚市 吉田 笑女

引揚げておしんと同じ過去を持つ

泉南郡 坂口 公子

自動ドアばかりではない自律心

米子市 雑賀 美世

踏めば聞くドアに力を持て余す

鳥取県 松本文子

真白な夢で握手をしたい人

和歌山市 松原 寿子

折りたたむ給の中に風を見る

羽曳野市 麻野 幽玄

墨絵にはならぬ南国の陽が沈む

鳥取県 清水 一保

あかね雲今日のドラマをじっと見る

和歌山県 天満 三千代

つづれさせ虫に怯みを咎めらる

出雲市 竹治 ちかし

外は外内では内の酒を飲み

唐津市 松高 多々子

ふるさととはまず足裏の青畳

大阪市 上江洲 勝子

盃蘭盆会声なき声のありがたく

兵庫県 野々口 ゆう也

陽炎に似た情熱を老いてなお

和泉市 西岡 洛醉

甲羅でも干そうか追手からかぬ日

高知市 比川 竹萌

真夏日も広告の目は涼しそう

平田市 久家 代仕男

遠火花きつと寝首をかかに来る

西宮市 草刈 堕駄

坊さんは色即是空衣だけ

鳥取県 鈴木 村諷子

むつかしいことはわからねどなつとく

大阪市 朝倉 利義
ゴルフよりゲートボールが似合います

藤井寺市 前山 とみえ
おしんよりおゆうが好きな天邪鬼

岸和田市 芳地 狸村
桜湯に見合の席が春めける

鳥取県 林 露杖
孫を抱くこのやわらかさこの重み

高槻市 梁川 吉子
谷深くの字くの字で高野まで

米子市 野坂 なみ
少女の碑今も尾を引く飛行雲

米子市 青戸 田鶴
テレビから笑いもらつていて一人

大阪市 中西 兼治郎
四つ橋を見る星空に金が要り

益田市 里本 たかし
キリストが戒めている女見る

岡山県 小林 妻子
大家族めしは大きい声の順

山口県 高崎 雀声
美しい夢をはぐくむ子の寝息

洲本市 箱石 甲子郎
クシャクシャに揉まれて紙も反り返り

愛媛県 八塚 三五島
夜泣きそば何時もの家が出て来ない

藤井寺市 前山 美恵子
バスタオル大きな愛で包まれる

岡山県 直原 七面山
言うなれば彼女は恋の蜃気楼

大阪市 松尾 柳右子
カラオケで知らぬ同士の仲の良さ

和泉市 岡井 やすお
行革はやるが大臣減さず

羽咋市 三宅 ろ亭
地球43億そろそろ国境外したら

岡山市 川端 柳子
ひとり抱くなやみ人形は泣いてない

和歌山県 山田 久子
導火線たつた一言火をつける

米子市 寺沢 みど里
浮き沈み知つた枕で捨て切れぬ

米子市 澤田 千春
昼の月よせてほしいなごめの輪

豊中市 満仲 きく子
吾亦紅亡母はいずこで鈴鳴らす

島根県 岩田 三和
草の中コオロギ達の世界観

東大阪市 市場 没食子
頂きものばかりのお茶と海苔の缶

豊中市 田中正坊
妻徳ぶ亡き兄や友雲流る

大阪市 萩谷 まさ
夏枯れにネオンばかりが目にしみる

京都市 都倉 求芽
お祭りが済めばありがたきもの神

東大阪市 三宅 旭
晩秋へ聞き捨てならぬ鹿の声

兵庫県 森脇 和子
補聴器へ雨音ばかり孤に耐える

西宮市 松本 一郎

嫌なこと酒で逃げて明日がある

米子市 政岡 日枝子
風見鶏自分の力でお廻りよ

米子市 田中 亜弥
日曜の医者は神わざだと思つ

高知県 赤川 菊野
花好きの掌に幸せな花の種

高槻市 上原 逸
階段を昇るきれいな足の人

高知県 小沢 幸泉
雲開気を楽しむだけの酒に酔い

★ 豊中市中桜塚三丁目13-15
投句先 千560 橋高薫風 (ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「頑固」選者 橋高薫風

締切 12月10日 (11月はお休み)
(ハガキに3句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

発表 大阪放送局「お後をたのしく」係

12月25日 (日) ラジオ第一放送
午前10時から

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

直原 七面山

これが秀句ですと言えぬ句を選び出してみました。私とその一句一句について覚えた其感と感動と同質同量の其感と感動とを皆さんも覚えらるるに違いありません。

これらの句は、決して私の身勝手な、独断的な評言などとは必要とせず、素顔のままで親しく皆さんに話しかけ、皆さんの心をゆさぶり、皆さんの心の中にいのちある句として、末長く生き続けてゆくこととしてしよう。

西 森 花 村
サヨナラに病人よそごとはかり言ひ

こまわりは利くが大事を任せられず

塩壺をいつか充たしておくも母

体力も食欲も子に負けて夏

傍 島 静 馬
小 砂 白 汀
高 橋 千万子
藤 村 女

仕事着の似合う男で頼母しい

ぶつかった壁から勘を取りもどし

風も騒ぐな私は私の道をいく

年だなど思われる日の鏡拭く

夫の胸の広さにすこし腹をたて

協役でいたい私を攻めに来る

トラブルの種を上手に蒔く女

専務さんが留守番をして盆休み

義理と言う梓にはまって動けない

見ただけの判で許可したものでない

冗談を団扇で叩く盆踊り

ネオンの中に居るから絵にもなる女

失恋の余波を愛猫もろに受け

会長と呼ばれ返事をしおくれる

病室のニュース売店から仕入れ

人柄へ押しつけられたため役

堀 江 正 朗

嘉 数 兆代賀

錦 織 文 子

高 橋 夕 花

妹 尾 春 江

福 本 英 子

遠 山 可 住

西 村 早 苗

松 本 忠 三

吉 岡 美 房

飯 田 悦 郎

宮 尾 あいき

森 田 カズエ

石 垣 花 子

雑 賀 美 世

のぞき読みすれば新聞裏返し

やわらかい言葉で謎をかけてみる

夕涼み線香花火に膝をよせ

呆けてからホントの事を口にする

魂胆を知らず降りればラブホテル

髪染めて女に虚偽の愛つく

隠居した日から白髪が増えたよう

袖の下知らぬ課長で左遷され

恍惚の父にもあつた光る過去

逃げ道を先に女は探しく

在りし日の部屋に入つて独り言

背も鼻も寸詰りだが老妻達者

老骨の肩にめり込むほどの役

亡妻の小物今更捨てられず

死にかけていてもジョークを忘れない

原 田 明 春

森 田 熊 生

樹 みどり

中 川 幸 一

横 地 雅 風

吉 岡 きみえ

細 木 歳 栄

松 岡 秀 峰

西 村 かすみ

鍛 原 千 里

細 呂 木 魯 木

市 場 没 食 子

本 田 恵 一 朗

尼 緑 之 助

河 村 日 満

路郎賞受賞者に聞く

《アンケート》

- ① あなたにとって川柳は？
② あなたの自信作(持ち句)

編集部

第1回 内藤 きさ子(岸和田市)

受賞作 内職に藤色があるたのしさよ

① 一身上の都合で長年川柳から遠ざかっていましたが、川柳はいつも私の心の糧です。いい川柳に魅せられ、それに負けないように頑張るたのしさは今も忘れられません。

② 繁昌に馴れて笑顔を忘れかけ

第2回 森田 布堂(鳥取県)

受賞作 身よりなき老婆いくさのことにふれ

① 私にとって川柳は真実の追究であり、そこには句に虚偽があつてはならないということをもっと一にしております。また川柳は、人格の高揚にありと信じて、終りのない無限の川柳道に挑んでいます。

② 貸し借りのない元旦の屠蘇を酌む

第3回 木山 遠二(笠岡市)

受賞作 似て居ない父に足音だけが似る

① ほそぼそ年々句作は続いています。足腰の痛む年齢なので、句会へは無沙汰しています。同年輩の話し相手が残らず逝ってひとりぼつ

ちになった私を川柳が慰めてくれます。

② 美しく掃き美しくまた落葉

自信作などありませんが、わが小庭の隅っこの小さな石へ書いている句です。

第4回 本田 恵二朗(倉敷市)

受賞作 足跡を残そう砂のある限り

① 人生行進曲

② 玉露にも番茶にもなり苦勞人

第5回 浜田 久米雄(死亡)

受賞作 握手した手が離れないまま坐り

第6回 尼 緑之助(出雲市)

受賞作 灯台の夕陽神話を抱きよせる

① 離れ得ない伴侶

② 天と地のはざまにふわり生かされて

第7回 堀江 正朗(島根県)

受賞作 睨閉す耐える苦痛が洩れぬよう

① 喜びは倍に、悲しみや口惜しさは半分になり、生きる力の泉である。暮らしのすべてを

感情のままに綴る詩。川柳は私の代弁者。

② 妻の目が子の目がみんな僕の目だ

第8回 小浜 牧人(死亡)

受賞作 揚つても揚つても雲雀に空がある

第9回 藤井 春日(倉敷市)

受賞作 岡山へ背負うて呉れる子もおらず

① 川柳をはじめ三十年が経過した。川柳で面白いものだ。自分の感じたことを素直に十七音に表現し、頭の体操を心掛けています。上手下手は兎も角、七十四歳の自分にとっては老人惚けの特効薬として余生を送りたい。生ある限り続けて作句したいものです。

② ふる里の祭太鼓も夢の中

第10回 林 瑞枝(米子市)

受賞作 悔のない汗千金の夢追わず

① どうしても抜けられぬ「かこめの輪」

② ドレミファを唱う椅子なら引き寄せる

第11回 岩田 美代(富田林市)

受賞作 染め替えて羽織は過去を喋らない

① ある時は私の逃避行、又ある時はもう一人の私の表現、そして私なりの活力剤です。

② まばたいて星は墜死を考える

第12回 森井 菁居(竹原市)

受賞作 生き方の違いを敵のように言う

① 人生の良きパートナー。喜怒哀楽を共にして悔い無き分身とでも言えようか。とにかく二十五年間のつきあいにうんざりするどころか、中年の血を騒がせてくれる。かわゆい存在である。

② 生き方の違いを敵のように言う

第13回 香川 酔々(死亡)

受賞作 満開の花に誘われ修羅出土

第14回 松原 寿子(和歌山市)

受賞作 ベンシルの芯は脇道など知らぬ

① 短詩文芸の境界線をギリギリに添いながらも、決して根無し草であってはいけなと思う。泣き虫で淋しがりやの私にとって、川柳は自らの鞭であり、明日へ生き継ぐレールなのかも知れません。

② 日記帳を抱いたはこのあたり

第15回 小出 智子(大阪市)

受賞作 女と妻のあいだで好きな彩を着る

① 水のようなものだと思います。

② 美しい錯覚のまま秋になる

第16回 大矢 十郎(新宮市)

受賞作 順々に嫁くそれだけを羨まれ

① 人生修養

② 正直の宝を見たり大往生

第17回 市場 没食子(東大阪市)

受賞作 来る人が来て去に元日黄昏れる

① 現在は老人ボケ予防マイシン

② 顔までが夫婦似てくる面白さ

第18回 西山 幸(和歌山市)

受賞作 歳月やゆるし合うより他はなし

① 多面鏡に写る私

② 忠実な影もわたしに飽いている

香川酔々氏を悼む



昭和58年9月23日歿

告別式・9月26日11時—12時

弔辞

香川酔々君の霊前に今お別れの言葉を述べようとは夢にも思いがけなかったことでありますが、現実是非情にも私をこの場に立たせております。

酔々君とのお交際は川柳を通じて、川柳の場における範囲に限られたものでありましたが、「川柳は人なり」「川柳は心なり」と、その豊かな情操、知性溢れるお人柄に私共柳友はもとより後輩柳人の指導にも積極的なご尽力を頂いたことを衷心より感謝しております。

君は昭和18年9月旧制九州帝国大学理工学部造船科を卒業、卓拔せる数学理論をもち(株)

藤永田造船所に入社され、昭和19年当時戦局益々熾烈の中に教育召集を受け広島陸軍兵器学校に教官として服務されました。昭和20年8月6日あのいまわしい原爆の洗礼を受けられました。幸いにも建物の陰で直接被爆を免れ、終戦後再び藤永田造船所へ復職されましたが、昭和30年(株)新興出版社啓林館に勤められ、更に昭和46年同社を退社され自宅において学習塾を開かれて得意の数学を教え今日に至りました。

これより先、昭和42年羽曳野病院に入院中羽曳野どんぐり川柳会に誘われ川村好郎氏の指導を受け川柳へのきっかけをつかまれました。それまで雨雀と号して俳句に親まれた君は飯田悦郎、笠原吸江、榎本吐来の諸氏をライバルとして作句に励まれ「人が五年かかる

なら自分は二年半でやろう」との気概を以て精進されました。当時俳句の影響を受け叙景句が多かったようですが、次第に頭角を表わしユニークな感覚句を吐くようになり、昭和44年10月川柳塔社同人に推薦され、46年八尾菜の花句会の発足にはメンバーの一員として尽力され、53年10月には路郎賞の榮に輝き、55年10月川柳塔社常任理事に就任、更に11月より編集部に参加、また56年度より川柳塔賞選考委員となり、川柳塔社発展に寄与されること洵に大なるものでありました。

川柳塔社の句会は勿論、各地支部句会、傘川柳本社をはじめ他柳社の句会にも積極的に出席され柳人との交流を温め、更に句会のあとの一杯のおつき合いに柳論を戦わせ一層の親交を深められました。

想い出は尽きません。今、君を失うことは私達川柳塔はもとより広く川柳界にとっても惜しみても余りあるものがあります。

昨年6月、永年の念願を果し現住地に木の香も芳しき新居を建てられ奥様とお二人、お子達には恵まれなかったものの好きな蔵書に埋まり、趣味の郷土人形に囲まれ、愛犬愛猫と共に安住の場を作り上げられた矢先、僅か一年有半「性来好きな酒の故か、病魔のいたずら」から58年6月6日突然多量の鼻血で入院、

私共を驚かせましたが、幸いにも短期間に退院、幾分体力的衰えを見せたものの元気に句会にも姿を見せ私共を安堵させたのも束の間、58年9月3日再び脳硬塞で倒れ、意識不明、生死の境を彷徨する日が続き、遂に私達の希いもむなしく再び還らぬ旅に立たれました。飄々としてベレー帽をかぶり君を迎える諸先生や諸先輩の柳人に手を振りながら雲の峰に登る君の姿が臉に浮びます。

ともあれ今、君を失うことの悲しみを乗越え、君の遺した遺産をふまえて更に川柳塔の前進を誓います。

酔々君安らかに眠り下さい。

昭和58年9月26日

川柳塔社常任理事

代表 西田 柳宏子

酔々さん

川村 好郎

昭和三十四年四月頃、私は麻生路郎先生の御命により、羽曳野病院にあったとんぐり川柳会の指導に当たっていましたが、たしか昭和

四十二年頃、酔々さん、あなたは療養中に毎月句会に顔を出し、初めて川柳を知り、あなたと出会うようになったのです。それから次第に川柳に興味を持ち、退院全快されてからとんぐりOB川柳会に出席し、益々熱心になられ川柳塔社同人へ。そして川柳塔社に酔々在りと柳界の方々に認められ、独自の優秀作品を世に発表され、活躍されたのは誰もが知り尽している。酔々さん、あなたとは永い間のおつき合いです。どんなにあなたの川柳情熱に教えられたことでしょう。忘れられません。

酔々さん、あなたは大阪桃山高校の講師であり、学習書出版社の編集相談役でした。嘗ては文研出版の月刊ECOを世に出し、高校生の学習指導に力を尽されました。その間、ECOには私に筆を執ることを依頼し「現代川柳に親しもう」という文を文芸欄に掲載して下さった。あなたは学習指導に川柳を忘れて下さったのです。今も私はこの一冊を大切に持っています。又、某高校のPTA婦人研修講演会に川柳を講義してくれと頼まれたことがありました。酔々さんはこのように私をお役に立つようにして下さいました。

酔々さん、あなたはこれからの若い人たちのために教育指導と共に川柳の社会化に努力

された。酔々さん、こんな事とも思ひ出すことばかりです。これからどんなに社会のためにご自分の為に躍進をつづけてゆかれるだろう。

それに、それに酔々さん、なぜ急逝されたのですか。私より約二十も若い。心身共にガタガタ何の仕事も出来ない私はまだ生きています。諸行無常、痛恨の極みです。

休肝日などと洒落ても酒が欲し 酔々
六道の辻で振舞酒に酔う

酔々さん、お酒を思っ存分飲んでいられるだろう。多分極楽で十八番の「淡海節」を唄っているだろう。大悟しておられるであろう。酔々さん、さようなら。

思ひ出

谷垣 史好

9月1日、常任理事会に出向くと、今日は熱があって行かれない、と酔々さんから連絡があり、この日選考の川柳塔賞の最終推薦句と編集後記の原稿が事務所に預けてあった。

各地柳壇は整理が終わっていないのか、原稿の入った封筒に「未」と書いてある。

4日夜、飯田悦郎さんから「酔々倒る、意識不明」の電話が入り、翌日、酔々さんからことづかったという原稿を受取った。それを見てゆくと、ところどころ書き入れがある。彼の原稿は編集者泣かせ、印刷所泣かせというやつで、よほど慣れないと判読しにくい文字が多いのだが、この書き入れられた字は、何と形容したらいいか、両眼を閉じ、手さぐりで書いた、そんな感じの、ひどく乱れた文字である。恐らく高熱の中、氣力をふりしはってペンをとったのであろう。胸をつかれる思いがした。

酔々さんとは十五年に及ぶ付き合いになる。いくつになっても旧制高校的寡黙気の漂う彼に、「良き先輩」という懐きで接していた。しかし彼にしてみれば引っこみ思案で消極的な僕を終始歯痒い思いで見ているにちがいない。自信家であった。どんぐり川柳会で初めて会った時のことを想い出す。

昭和43年12月旬会、会場は以和貴荘、羽曳野病院退院後初めて出席した彼は、部屋に入ると躊躇うことなく上座に近い席に座った。大抵は遠慮して下座の方へ座るものだが。今は亡き白柳選の「お歳暮」で天をとり、活発に発言もした。「これはえらい奴が来たな」と思ったものである。

一三天氏亡き後、編集割付を僕が受持つて何カ月か経った某夜、宗右衛門町の大萬で呑んだことがある。少し酔いの回った彼は「史好、お前もつと自分をPRせなあかん、損やぞ」と言った。これは損得の問題なんかやない、とそこで議論になったが、親身に忠告してくれる彼の好意は嬉しかった。

川村好郎門下の酔々・鬼遊・史好と、いつも三人一対で呼ばれていた、その一人が本当にあつてなく逝ってしまった。まだ実感は湧かない。しかし今年は限りなく淋しい秋になりそう。

《弔 吟》

さもあらばあれ秋の彼岸のお中日
酔々を送るか曼珠沙華の朱
旅にいて雨降る海の見えるのみ
十七夜友一人消えひとり佇つ
がばと起きよ酔々語ろうよ
どんぐりの音なく落ちて秋の風
悲しみを津和野で聞いて雨に逢つ
洋酒よし日本酒なおよし今浄土
二次会へ行く相談も出来ぬまま
君の声聞くよしもなし旅の秋
惜しまれる命が星の数になる
酔々さんの呼名がそこに聞えそつ

栗 柳宏子 薫風 鬼遊 美幸 吸江 紫香 柳太 岳人 太茂津 雀踊子 小路

旅で聞く悲しき別れ秋の風
在りし日の君に淋しい枯れすすき
旅に立つ君の後追う流れ雲
旅先で聞く計へゆれる彼岸花
天国の旬会へ貴兄が急ぎすぎ
ちよつと一杯その酔々がもう居ない
酔々の歯が秋風にものを言う
これからは彼のスイスイがもう聞けぬ
柳界の指針大和の空に消え
酔々に別れを告げた枯れすすき
酔々の呼名が響く秋の空
お彼岸に仏の弟子となり給い
酔々のロマンが雨に濡れて逝く
酔々と呼名がびびく浄土かな
萩こぼれ主なき部屋のベレー帽
あの世ではどうするベレー ハンチング
君逝つて秋の旬会の淋しさよ

花梢 美代 幸 喜風 笛生 作二郎 十郎 大輪 千万里 庄市 三十四 与呂志 春江 みつ子 史好 藻介

「夜市川柳」募集

第六回 「神」 八木千代選

締切 11月30日

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一

河内天笑方 堺川柳会

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

大矢 十郎

そばに居るだけで弾んでいる心

赤木 和子

少女のような純真な恋。紅潮した頬から、熱いものが伝わって来そう高鳴る動悸を、自覚しているのであろう。惜しくも巻頭を逸した。

ささやかな幸せ目と目が合っただけ

その笑顔いつか私のものにする

以上の三句からして、幸せいっぱいのノンフィクション句として大いに評価したい。

等身大の鏡に憶病が映る

紀市 郁栄

等身大の鏡の前に立てば、スターでもない限り誰しもびっくりにさせられる。スタイルに自信を失った人生の後半期ともなれば尚更である。映ったのは姿ではなく心であらう。句の良否別として共感を呼ぶものがある。

ロボットに命令される日も近い

舟渡 杏花

動きさえすればロボットと言った時代があったが、今では人間様の欲と頭脳が此の動きを働かせるに代えて、金儲けに大きな活躍をさせている。人間の頭脳が如何に発展し、如何に有能なロボットが出来ても、労働者には冷たくノルマを追いかけるだけである。命令される日も本当に近からう。

ふとある日退職すると驚かされ

平松かすみ

会社で面白くない事があったのであろう。家に帰って妻に退職すると言ったのは、本音であつて本気ではなかつた「ある日ふと」ではなく「ふとある日」としたのが強調して成功している。

物真似が上手でいつも人気者

森脇 和子

物真似のうまい人が居る限り、いつも座を楽しくさせてくれるもの。声にせよ、振りにせよ本当に貴重な存在で、みんなの人気者である。読んでいるうちに口元がほころびてくる。これが川柳だ。

何故か宵亡夫の愛がほしくなる

山本 玉恵

愛執の亡夫を恋うるひと時である。「何故か今宵」の中に、長く久しい寡婦暮しの苦勞がにじみでている。川柳に託してじつとがまんの子が同情を誘う哀詩である。

何時からかちよと飲みたい小コップ

稲本 凡子

ビールの味を覚えた女性のユニークな表現が、面白く共感を呼んでいる。ちよとと飲み

たいなんて憎い句だ。

看護婦の一人声帯荒れている

武田 帆雀

どこの病院でも良くある事だ。此の事自体は見逃しがちな句材であるが、風邪か疲労か下五の荒れているが非凡な生命である。

母の死を天寿でしたと人は言う

松下 蕉露

人の死に天寿などはない。まして親を思う子にとって、天寿などあろう筈がない。天寿とは、他人が決めるものであり、身内は諦めて応ずるものである。母の死は天寿でしたと言われても

まだ生きていてはしかったお母さん

主導権わした後の秋の風

小林 勇人

主導権といつても、老夫婦の収入源である年金らしき物であらうが、渡した後の、秋の風にただ何となく淋しさと後悔がうかがわれる感傷句。

危険率低い子供を蚊が狙い

前田 広幸

人間さまを襲う蚊の一食。その美味さは命に代えてもと求めに来る。然し生あるものの身の危険を悟り、子供を狙うとは、非凡な着眼である作者が、独特の解釈ではあるが適当かも知れぬ。珍しい句を発見した喜びを味わっている。

武者人形武装解除もなく威張る

吉末勤太郎

此の句から罫鏢としたこ老体が目に浮ぶ。

本田恵二郎川柳句文集

「川柳談話室」

橘 高 薫 風

著書の扉に作者の句が自筆で書かれている。
一本の道よろこびもかなしみも

今年喜寿のお祝を持たれた川柳曆四十年の翁にふさわしい一句である。翁などと世間並みなことを言えば叱られることだろう。

倉敷市の児島医師会報に連載された随筆を中心に、自句の自解も試みておられるのが、この川柳談話室なのである。著者を知る者には、こゝは恵一朗節で読まなければならぬ。そして忽ちにして、序文で村上正則氏が書かれている「本田ビールス」に感染してしまふのだ。本田ビールスとは、これにかかれは即ち、いつしか顔の表情がゆるんで微笑に変わり、まもなく全身の筋肉や神経にやすらぎが拡がって破顔大笑をきたす特有のユーモア菌なのである。

心

文字がある、その前に言葉がある、その前に心がある。句が生れる順序も同様である。

即ち句の心がある、それが言葉になる、そして文字になる。これが句の生れる順序であるはずなのだが、時に逆の道程をたどつたらしい句に出会うことがある。句を作るための文字を先ずは探し出すことに専念する、その文字を言葉にする、そして句を形成したのである。従つて心はどこにあるのか見つからぬということになつてしまつたのである。

× × ×

ライバルに背丈で勝つて幅で負け

この場合のライバルは、にくらしくも愛すべき柳友のことである。私は背丈で勝つて幅が横幅は彼の半分ないばかりか、彼が笑うと目が無くなつて素晴らしい童顔となることに負けである。背伸びした句と横伸びした句との合戦をはてしなく続け合つてであらう。

尼緑之助句文集

「生かされて」を称える

黒 川 紫 香

尼緑之助さんの句集が出来た。喜寿、句碑建立十周年記念と重なつて凡てがめでたため

たすくめである。

祝賀川柳大会には大阪から大挙バスを仕立てて参加した。やや足許が危くなつた緑之助さんではあるが至極お元気で、静かな物腰と温容は多数の出席者に安堵と畏敬さえ与えられた。句集の跋で紫吻氏が「みどりさん」とか「ろくさん」とか呼んで居られるが、私等は「あまろくさん」とお呼びしているからである。同輩の明治四十年生れの私だが、故麻生路郎先生の門を叩いた昭和十年にはもう次の佳句を発表されていて雲の上の人だった。

稲架が鳴る椋鳥が来る暮昏れて
それ迄には左の作品もあつた。

降っている駅を見ている一人旅
それ天をついている草の青

釣っているそばへ薬屋荷をおろし
淡緑の美しい表紙と生き生きとした題字、

「あまろくさん」はまだ若い。全編三百三十余頁、句あり文あり飽かせない。題名「生かされて」が象徴する様に長い年月に亘つて培われた生活の記録である。

緑之助さんの句と人柄については序文と跋に記された西尾某主幹と津川紫吻氏の言葉に尽きるところが、私は私なりに拾つてみた。おしほりを出して二人を見比べる

五月の陽座敷に入れて皆んな留守

簪の目砂のいのちを呼びもどし

一ときれの数の子午らさあ乾盃

いい月がドブンと割れて浮く蛙

出す 来らず 一日雪ぐらし

冬終るきつい吹雪の捨てぜりふ

五十年にご長男を、そして金婚の五十五年

には愛妻を失われた。人一倍家庭愛の強い緑

之助さんの心境は次の句でも知る事が出来る。

長男を失う

生きたい生きたい遺物が訴える

妻 逝く

金婚と知るや何んにも言わぬ旅

ともあれ五十五年路郎賞を受けた。

灯台の夕陽神話を抱き寄せる

の句はあまねく人の知る所であり、句碑と

なつて神の国出雲で永劫に称えられる事であ

ろう。緑之助さんの句は嘘がなく真実そのも

のである。句文集「生かされて」を一見必読

される事を奨めたい。

伊藤茶仏句集

「道祖神」

阿 萬 萬 的

先日薫風さんから「あんた石仏とおつき合
いしてはるから、この本の書評を頼むわ」と

一冊の句集を渡されました。それが伊藤茶仏
さんの「道祖神」なのです。

そして真を繰ってゆくと、これは大変なこ

とを引き受けたものだとかつくづく困ってしま

いました。それと言うのは茶仏さんのお人柄

があまりにも高く、何の飾り気もない一句一

句が淡々としていて、私を引きつけてくれる

人間情愛の句だったのです。大ざっぱに言え

ば下駄履きのお人好しの句集なんだからです。

辞書によると「道祖神」とは道路の悪魔を

払って旅人を守護する神、とありますが、茶

仏さんが歩んで来られた道がそのまま道祖神

のように感じられました。

冷淡になり切る顔へ湯がたぎり

素人がこわいと芸の虫が言う

うかつにもラジオに返事してしまい

みんないい人だ金持ちにもならず

決断を下す社長にある孤独

お人好し顔の広さを頼まれる

双方に借りをつくったお人好し

息抜きのビールが顔に出て困り

奉仕の輪ひろげよろめく齢になり

そして道祖神にはもう一つの顔がある。そ

れは夫婦和合の姿です。茶仏さんの句はそれ

が滲み出ている温かい句ばかりなのです。婦

唱夫随、誠に結構々々であります。

夢のない暮らしを妻に指摘され

実印の置き場を妻に叱られる

へまやれば貴方らしいと笑う妻

半日の日曜大工肩が凝り

お隣りの役得ばかり妻の眼に

義理果す追い立て役に妻がいる

妻の眼に貴方どこまでお人好し

老妻のこまめに動く艶ぶきん

へそくりを手品のよくにさばく母

言い訳を母にまかせる男親

それに対し茶仏さんの思いやりは、こんな

句になって表われているのです。

不断着をそこまで誘う日本晴れ

あれ買えば喜ぶ顔が眼にうつり

看病の老いは立ったり座ったり

五十年手探りで来た老夫婦

お茶漬で機嫌を直す老夫婦

そしてなお

仲のいい夫婦を夫婦見て帰り

と、どこまでもお人の好い御夫婦の姿が全

く羨ましい限りです。

自分にもさていつからか誤字当て字

二階まで上る手摺りに老いを知る

そして

みんなして俺を君子にしてしまい

と、てれていられる茶仏さんのお顔が彷彿

としてきます。最後に句碑に刻まれた句

平凡にこの世に生きるむずかしさ

成程、これが私達川柳をつづける者への道

祖神なのですねえ

有難うございました。

理想

里 小路選

吟 題 課

理想郷まだ放牧の二三頭 三五島
若き日の理想世間に流されて 重彦
現実と理想渦巻く熱帯夜 カズエ
青雲の理想は都会の灯に埋もれ 正敏
美しい理想に老後を置いてみる ゆう也
コンピュータ理想の人をはじき出し 静歩
理想から外れぬるま湯に浸りきり 柳五郎
思春期の血の気あふれる理想論 景子
理想とはちがうタイプと結ばれる 静子
あきらめた筈の理想が泣いている あやめ
新婚に戻る理想をもっている 泰子
点線をたどる虚しい理想像 明水
晩酌のうまさ理想はもう言わず 宵明
理想的夫婦と言われ耐えている 道子
理想には遠く屋台の灯が恋し 素身郎
晩成が俺の理想と言う奥手 頼一
理想どおりここで一発原が打ち 優
母と子の理想に父は忘れられ 与呂志
疲れてる理想ローションに誘われる 雄々
足踏みをばかりしている理想主義 勝美
一本の緑理想の旗印 久仁於
街の灯がしばし理想を忘れさせ 重人
窓際へ理想でないが来てしま 木魚

理想の家建ててドラマが始まった 満津子
羽搏いた理想の空は広すぎる 義美
理想郷やたら欠伸のどこか 武水
はんやりとした理想なら一つある 里美
定年後棚へ理想を上げておく 明水
理想論きれいに埋まる原稿紙 不二
理想から遠い女が背を叩く 洛醉
住
ハイミスの理想利殖に移行する 正敏
一年毎にランクを下げてゆく理想 宵明
末っ子が理想の中へ逃げたがる 文平
色褪せた理想の旗を染め変える 平松かすみ
理想像わたしの中で齢をとる 道子
人
バラ色に描く二十歳の理想像 右近
地
理想の女をブラウン管の中に見る 素身郎
天
理想には遠い運命線握る 洛醉
軸
理想もつづくに捨てた下駄を履く
プロ

西村早苗選

プロと言う名の重圧を守りぬく 妻
セールのプロ猛犬の字が読めぬ 正敏
セミプロの甘え翔べない鴉で 枯梢
夜を焦すプロの手並という花火 浪速子
プロの味浪花の味を旨くする 美恵子
プロと言う意識の壁が邪魔をする 木魚
ライバルの怖さが判りかけたプロ 重人
理論ではプロに負けない草野球 泰子
さすがプロ見せ場ファンを離さない 悠泉
その筋のプロでベレー帽よく似合い 里風
泥水がはね返ってくるプロの道 芳枝
札束を積まれてプロへ向きを変え 雄々
ジクソーパズルが森くプロの風の中 寿美
プロと名が付いて罵倒に耐えている みつる
プロの背に光るファンの目がこわい 森脇和子
人様がプロと認めるから光り 弘朗
プロの芸マスコミのペン容赦せず 代仕男
プロ級の腕を持つるパチンコ屋 登美也
百姓のプロで上手に荷を担ぎ 耕花
プロ歌手と一字違いの旅まわり 久仁於
鐘連打プロ顔負けと審査員 兼治郎
名人位プロの世界に齢はない 軒太楼
プロになる噂甲子園の花と咲き 晴彦
プロになる噂甲子園の花と咲き すみ子
その上を稼ぐ気骨のプロ意識 裕
プロ級のパチンコ釘師と勝負する 優
日曜大工プロもはだしと妻が褒め 多賀子
封じ手にはるか先読む確かな目 景子
プロの持つ誇りを他人の故にする 与呂志

素人がプロの気付かぬ物を焼き
プロの背に杭が一本ある強み
三五島 恵美子

佳

プロ級の咽喉が老妓の三昧に合い
笑わせて泣かせてプロの味をだす
あやめ 豊
コンニャクの裏がプロだから解る
文 平
プロ棋士石の重みを知っている
勝 美

人

転落のプロの背を打つからっ風
本 蔭 棒

地

プロの目にアマの新鮮さが怖い
佳 風

天

プロとして生きる一箇の石ひろう
文 子

軸

プロの背きびしい賭をもちつづけ

久しぶり

高橋 千万子 選

久しぶり逢った友達も杖をつき
彼女まだ独身でした久しぶり
久しぶりの故郷都会の顔を持つ
久びさの出会い幼顔が髭をつけ
久しぶりしやべりたりないクラス会
しんみりと対話のつづく久しぶり
久しぶり帰省ギターに対面す
綾 珠
道 子
美 穂
軒 太 楼
久 子
弘 朗
た かし

久しぶりひよっこり来たは金のこと
久しぶり逢う親友も出世せず
久しぶり互の無事を祝い合い
挨拶はしたがあの方誰かしら
久しぶり積る話が前後する
久しぶり犬が覚えていてくれた
久かたを孫の背丈が言うている
久しぶり雑草のなかに墓がある
久しぶり故郷の母が低く見え
双方がまだ気付かない久しぶり
久しぶり腕白坊主の顔がない
久しぶり帰ると町も他人めき
面影がわずかに残る友と逢い
羽目はすす事も許せる久しぶり
横向けせ後向かせて久しぶり
久しぶりウドの大本とは言わず
久しぶり菌の浮くような美辞麗句
戦争展モンペ軍服千人針
久しぶりそんな話もありました
久しぶりついオーバーに声をかけ
久しぶり嬉しいうれしい目と出逢う
クラス会思い出す顔出せぬ顔
好きだった人と思えぬ久しぶり
童心を返してくる赤トンボ
お花はん以来の人氣おしん見る
久しぶり忘れかけてた血がさわぐ
クラス会どなたでしたか久しぶり
久しぶり女は女の意地がある
久しぶりこれはどうかと出す小指
三 吉
悠 泉
炬 齊
あやめ
代 仕 男
婦 美 子
ど ん たく
赤 木 和 子
只 士
は じ め
伊 津 志
三 千 代
公 一
佳 雲
山 久
正 坊
三 五 島
三 和
山 久
山 久
洛 醉
久 仁 於
泰 子
テ ル ミ
キ ミ
右 近
か す み
与 呂 志
木 魚

久しぶり女の見栄が勝負する
久しぶりホクロは昔のままにある
久しぶり鳴らしてならぬ土鈴ふる
久しぶり残り火燃やす髪を染め
優 たず子
ゆう也
雄 々

佳

久しぶり合った火種がまた燃える
おや「まあ」と都合の悪い久しぶり
イーさんと酌がれて久しぶりの酔い
人 天 彦

人

久しぶりワイングラスが燃えてくる
文 子

地

何となく近よりにくい久しぶり
達 一 郎

天

久しぶりうっかり縊が戻りかけ
本 蔭 棒

作品の類似性についての

許容範囲は

動機の純粋度

のみにあるのでは？

寿 馬

初歩教室

題 — 摺む —

本田恵二郎

鈴元を摺んだままで孫眠る 吉子
 歩き初め見境なしに摺んでる 同
 (歩き初め手当り次第に摺んでる)
 中庭の雑草祖母に摺まれる たかし
 (祖母の手に摺まれ雑草意地を張る)
 摺んだらはなさないよと紅葉の手 美恵子
 (摺んだらもうはなさないもみじの手)
 哺乳瓶乳房摺んだことはない 武庫坊
 (哺乳瓶乳房を摺むすべ知らず)
 幸せを摺む力がまだ足りぬ 同
 (幸せを摺む力がひ弱すぎ)
 少年は己を摺んで鞭を打つ 照子
 (わが心摺んで鞭打つ少年A)
 恋う人の心摺めず夜が ажける 同
 (恋人の心摺めず夜もすがら)
 器用な手で不幸ばかりを摺んでる よし津
 ようやくに摺んだ運に乗り切ろう
 (やつとこさ摺んだ運に逃すまい)
 摺んでもするりと逃げる青い鳥 寿美

(青い鳥摺んだところで夢が覚め)
 それなりの倅せつかむ設計図 同
 ならわしと言えど手摺み食思つ 愛子
 (手摺みで食べて裸で暮す国)
 久方に逢うて摺んだ手の温み 同
 久方の手を摺みとるよう握り
 悪友に摺ったのが運のつき
 摺んでも指より溢れる白き砂 よし子
 摺んでも摺んでも砂こぼれ逃げ
 (ロボットのアームが摺む炉の元素 琴柱
 土用丑うなぎ摺んで火の地獄)
 (摺まれて裂かれ焼かれた土用丑)
 わが命ふんわり摺んで蜻蛉とぶ 實
 倅せを摺んでて泡吹く蟹でした
 (恋を摺みとった蟹が泡を吹く)
 金運を摺む手相とおだてられ 久子
 摺んでは口に運ぶすべ幼子よ
 (摺んでは運ぶ可愛い口元よ)
 どん底でやつと摺んだ温い愛 同
 物欲で摺んだ王座棒に振り
 (金で摺んだ王座もつくすれぞう)
 貧乏くじ摺んでどこへも捨てられず キミ
 (貧乏くじ摺み捨て場を探さねば)
 摺み合う夫婦のそばをそとと抜け 同
 (摺み合う夫婦見て見ぬ振りで過ぎ)
 孫の言う摺み所のない話 まさ
 (孫の片言摺みどこ見つからず)
 雲摺む話くじ当る夢を見る 同
 (雲摺む思いでそつとくじを引く)
 摺まえて見れば可愛い豆狸 同
 札束を銀行ギャンク驚摺み
 (驚摺み防犯カメラは見逃さず)
 摺んだらはなさない玩具親が負け 同
 糠に釘わらをも摺む気で拝み
 (薬つかむ思いで糠に釘を打ち)
 倅せを摺むまではと流す汗 貞子
 (倅せを摺む汗なら惜しむまい)
 摺み取りもがけばもくくはれ
 (欲取り指が八本欲しくなり)
 欲狼の手にも足にも餌を摺み 一止
 千金を摺んだ夢のくじを買う 同
 (千金を摺みたい夢のくじを買い)
 報告書何かを摺む心にある不安 保夫
 手すり思わず摺む心にある不安
 (或る不安思わず手すり摺ませる)
 回り椅子摺んでゆとり見え始め 同
 (回り椅子遂に摺んだ貫禄)
 セールスの口に乘せられニセ摺み 芳水
 ボクの手を摺まりそうな虫いない
 後から摺まれそうな夜道行く 同
 (襟首を摺まれそうな暗夜道)
 代役を果して運が向いてくる 山久
 (代役をみごと果して運摺み)
 幸せを摺んでいるよな細い指 同
 (細指で倅せしかと摺んでる)
 遮断機へしつかりと子の手を摺み 春枝
 (遮断機が子の手を摺み直させる)

実力で掴んだ椅子に励まされ

(実力で掴んだ椅子の安定感)

心の端を掴んで欲しい人を撰る

世渡りの術を掴んで楽に生き

(処世術掴んでからの青い空)

勝利球掴んだその手に優勝旗

もう一つ乳房を掴む赤子の手

(も一つの乳房可愛い手で掴み)

バラ銭は小さな腕がよく掴み

(バラ銭掴み小さな手ほどよく掴み)

掴み取りはしたくない手が絡み合い

(掴み取り欲の手と手がからみ合い)

逆転のチャンス掴んで湧くファイト

(逆転のチャンス掴んでナイン燃え)

耐え抜いた汗で倅せわし掴み

折角のチャンス掴めず脛を噛み

控え目の慾で掴んだキューピット

藁掴む思いが易の灯を信じ

執念が師匠の芸を掴み取り

(師の芸を掴み取りたい心燃え)

冷蔵庫ビール掴まれ引出され

(冷蔵庫のビールは掴んで引き抜かれ)

結局は掴みどころのない話

まあまあと肩を叩いて掴ませる

掴むまいイミテーションの倅せは

欲張って結局落す掴み取り

タイムサービス掴んだ物を買われる

掴み取り赤裸に見せる欲の皮

汚れ銭掴んで一生棒に振り

同

玉恵

同

やすお

同

柳石子

同

胡頹子

同

同

同

同

志津

同

兼次郎

同

同

同

幸泉

同

同

同

同

勝美

同

仕合せを心で掴む気のゆとり

大金を掴み骨肉いがみ合い

幸運の女神うしろ髪掴ませず

掴まれた尻尾権力で払いのけ

五入の五で倅せを掴みたい

真実は掴めぬまに秋深む

一と掴み店主のさりげないおまけ

哺乳瓶掴んでママと目で対話

掴めないところが魅力という若さ

驚掴みされてるような様きかた

幸福を掴んでる手がしびれそう

掴んでる拳が抜ける壺の意志

虫二匹掴まんとして二匹逃げ

倅せを掴んだような顔作り

掴まれた尻尾を切って生きのびる

吊皮を掴むと今日の顔になる

分限へ掴み切れない夢がある

倅せを掴んで光るくすり指

幸掴む手前で風になる女

同

柳五郎

同

同

幸子

同

同

忠広

同

同

武水

同

同

三男

同

同

寿子

同

同

同

(恵二朗短信)

明朗な句、ほのはのと温い情の句、そんな

句を生み続けたい。暗い句、悲しそうな句な

どはなるべく生まない方がよい。

題「燃える」11月20日締切(1月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一九二四

宛先 岡山県倉敷市下津井一九二四

◎七一

本田恵二朗

川柳塔社常任理事会(10月1日)

出席者 栗・薫風・形水・水客・紫香・潮

花・柳宏子・与呂志・鬼遊・岳人・天笑・重

人・寿馬・笛生・史好

〈議事並に報告事項〉

★先般急逝の香川酔々氏を悼み黙禱。本社11

月句会を追悼句会とすることに決る。栗主幹

以下大拳山陰旅行中、留守部隊長として葬儀

万端大奮闘された柳宏子氏より委細報告あり

柳宏子さん、清水健司さん本当にご苦勞様で

した。

★台風10号で美濃加茂市の東野大八先生のお

宅も鴨居まで水に漬る大被害に会われた。塔

社より深甚なるお見舞い申し上げます。

■11月の常任理事会は1日(火)

橘高薫風著

橘高薫風著

橘高薫風著

橘高薫風著

なにわ川柳 この一句

領価 千円(送料共)

朝日新聞大阪版に連載の秀句鑑賞。

これは「川柳の折々のうた」であり、

川柳作句の指針となる好著。

★本社でもお取次ぎ致します。

柳界展望

集録・板尾岳人

★尼緑之助喜寿・句集「生かされて」発刊・句碑一〇周年祝賀川柳大会が9月25日出雲市商工会館にて二百五十数名の参加を得て開催本社より栗主幹以下21名デラックスサロンバスにて参加。途中、津和野・大山・蒜山を散策、柳友と再会、有意義な三泊四日の旅だった。

▽同人消息△

■香川酔々氏(奈良県)は9月23日午後11時20分脳梗塞のため死去。26日自宅において告別式が行われ、川柳塔はじめ他社からも多数参列、お見送りした。行年64歳。戒名 釋証道。

■東野大八氏は13号台風に

よる信濃川氾濫により床上一米の浸水、原稿書籍等流され、御夫婦共消防隊によって救助された。早い立直りを祈ります。頑張れ大八つあん。

▽お便り△

■先般の浜田久米雄先生の追悼句会には出席者一〇〇名、投句者三〇〇名の盛会でした。

(井上柳五郎)

■何時も御指導を賜りますてありがとうございました。

(大道美乙女)

■弓削川柳社創立三十五年を記念した第三十五回西日本川柳大会おかげさまで三〇〇名にあまる柳友にて盛会、所期の目的を達することができました。有がとうございました。

(浜野奇童)

■入院以来検査せめてうんざりしております。

(竹中綾珠)

■諸先生方のお教えのおかげで茗人忌大会で総合第一位を頂き感謝しております。

(奥田美智子)

■つたない句乍ら楽しみに毎日作句いたしております。

(梅 みどり)

■今までは他人の事ぞと思いにしが、字が書ける様になりました。

(河村日満)

■河村日満さん全快されるまで県川協の会長代理を勤めることになりました。来年の日川協の全国大会を米子市で開催、重責を果すようがんばっております。

(小林由多香)

■貴社同人河村日満氏とは五三年九月博多、昨年九月箱根と大陸川柳同窓にて再度お目にかかり御世話になっております。

(東京・渡辺大峨)

■やっと新居に馴れてきました。相変らず容体がすっきりしませんが、頑張っています。

(傍島静馬)

一大阪築城400年まつり協賛一

番傘75年記念 続・1万句集出版 全国川柳大会

日時 昭和58年11月23日(祝)

午前10時開場

会場 大阪商工会議所ビル7階

国際会議大ホール

大阪市東区内本町橋詰58-7

(地下鉄谷町線・中央線谷町4丁)

目撃下車2番出口、地下鉄堺筋線

中央線堺筋本町駅下車12番出口)

電話06-944-6268(代)

★記念式典(第一部)

★句会(第二部)

宿題 築く 平松 圭林選

石垣 曾根 幸広選

川 田向 秀史選

銀杏 柴田 午朗選

中心 北島 醇醇選

世紀 去来川 巨城選

歴史 西尾 栞選

まつり 奥田 白虎選

各題2句・締切正午

会費 一、五〇〇円(昼食・記念品進呈)

★記念パーティ(第三部)

午後4時30分より6階ニューコクサイ

会費五、〇〇〇円

主催 番傘川柳本社

■9月25日第25回全国郵政川柳大会が開催され参加者一〇〇名の盛会でした。わたしは全回出席者として表彰の榮に浴しました。

(越智一水)
■大矢十郎氏四女裕子さんは10月23日結婚式を挙げられました。新郎はスボーツマンです。

(川上溪水)
■ワイロー社ハワイ柳人に川柳塔本社活躍振りを書面にて紹介(命ある句を作

れ)と創作に力を入れるようにと激励

(市岡晩舟)
■井手川の土手下の家を買いました。六日から大工さんが入ります。正朗もはり切ってます。

(堀江芳子)
■山男の歩幅にあわす滝の道

▽句会案内△
(森中恵美子)
■南海電鉄川柳部

時・11月17日(木)夕6時

時・11月10日(木)夕6時

新同人紹介

小池 しげお

紫香・いさむ・水客・潮花推薦

増田 とし

水客・岳詩・永楽・客遊子推薦

丁坪 サワ子

水客・岳詩・永楽・客遊子推薦

場所・南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂

兼題 並ぶ・テスト・光る

■南大阪川柳会

時・11月19日(土)夕6時

場所・高松会館(寺田町)

兼題 間違い・短い・息子目移り

■菜の花句会

時・11月10日(木)夕6時

場所・西郷会館(八尾神社境内)

兼題 風・宝石・花札・とけ・違う

■川柳東大阪

時・11月26日(土)夕6時

場所・東大阪市立教育センター研修室(近鉄布施駅北へ五分)

兼題 後味・庭・秋晴れ・体験

■勝山双葉川柳会

時・10月25日(火)夕6時

場所・勝山いこいの家

兼題 珈琲・傾く・一途・紹介

■堺川柳会

時・11月15日(火)夕6時

場所・堺青少年センター

兼題 霧・攪む・雑音・あかたれ

■富柳会吟行

時・11月14日(月)

場所・壺坂寺吟行

兼題 毛糸・ゆとり・遠い

■ことぶき川柳会

創立五周年記念大会

時・11月6日(日)

場所・兵庫県水上郡山南町

兼題 公園・到着・不器用

記録・五・周囲・年功・席題一題

■阪急電鉄川柳会・京都塔の会・合同吟行句会

時・11月6日(日)午前9時

半京福電車四条大宮駅集合
兼題 芸・渡る・霜・吟行
雅感・各3句

お知らせ

同人名簿の氏名・雅号住所・電話番号などに訂正箇所ありますれば本社事務所宛ご面倒ながらお知らせ願います

同人各位

川柳塔社

☆新年号特集☆

川柳塔社同人総参加(一人二句)

「私の一句」

(今年中に発表されたもの)

●締切 十一月二十五日着便まで

58年度同人総会と二賞発表句会

10月2日（日）なにわ会館

《事業》

57年10月・役員改選

11月・二賞選考委員決る

雲一つない文字通り日本晴れ。会館内では十二組の結婚式があり、着飾った紳士淑女で華やかな雰囲気。定刻2時、西田柳宏子氏の司会で開会。この一年間に亡くなられた6名の御霊に黙禱を捧げる。

河内天笑氏が、同人一人一人が仲間をふやす努力をし川柳塔の一層の発展を図りたいと開会の辞を述べ、西尾栗理事長がこの日、仲人の大役を引き受け、やむなく欠席のため、黒川紫香氏が代ってあいさつの後、議長席に坐り議事に移る。

○会計報告（高杉鬼遊氏）○同人・誌友の増加で経理状況は順調。しかし商法改正による広告の激減、諸費高騰で手放しの樂觀はできない。

○事業経過報告（櫻谷寿馬氏・香川酔々氏急逝のため急遽代理）○57年10月以降の主な推移は次のとおり。

58年1月・15日新春おめでとう会―新名譽

会長・理事長就任披露（70名）

4月・7日川柳全集「西尾栗」出版を

祝う会

5月・1日いちご狩吟行（奈良・三松

禅寺、58名）

6月・日川協下田大会に主幹以下参加

9月・23日より山陰の旅（三泊四日、

尼緑之助喜寿祝賀大会に参加）

《句集発刊》

清水健司「清水白柳句集」（57・9月）

羽原静歩「足跡」（58・1月）

両川洋々合同句集「ふうもん」（58・5月）

小西無鬼遺句集「わらじ酒」（58・5月）

田中淑子遺句集「はねぶとん」（58・6月）

尼緑之助「生かされて」（58・9月）

伊藤茶仏「道祖神」（58・9月）

本田恵三朗「川柳談話室」（58・9月）

《物故者》

神田秀峰氏（57・10・22）西川善紫氏（57

12・1）浜田久米雄氏（58・2・15）田中

淑子氏（58・4・13）伏見茂美氏（58・8

・3）香川酔々氏（58・9・23）

質疑応答では同人間の連絡体制（悦郎氏）、本社事務所の勤務状況（三十四氏）、会計報告に対する質問（吸江・寿馬氏）があり、担当者より説明があったが、終始、和やかな内に議事進行、玉置重人氏の閉会の辞で午後三時五分幕を閉じた。（史好記）

《同人総会出席者》

与呂志・天笑・鬼遊・柳宏子・春蘭・滋雀

萬的・寿馬・雀踊子・比呂志・亜弥・田鶴・

なみ・とも子・悦郎・重人・智子・文秋・春

江・メ女・宏子・冬子・はつ絵・春子・いわ

ゑ・年代・かすみ・紫香・美智子・太茂津・

弘朗・史好・形水・薫風・凡九郎・水客・潮

花・吸江・狸村・静歩

58年度二賞発表

本社 十月句会

会場 なにわ会館

二日 午後五時半



栗主幹から表彰状を受ける西山幸さん

二賞発表句会は米子、竹原、倉吉から遠来の柳友を迎え華やかに定刻開会。仲人の大役を終え急遽駆けつけたモーニング姿の栗主幹が古い「川柳雑誌」からライバル物語を披露

された後、メイスイベントの二賞表彰式に移る。路郎賞の西山幸さんに小島蘭幸氏の愛娘史子ちゃん（4歳）が花束を贈呈、可愛い声で「オメデトウ」に一同大拍手。受賞者に花束贈呈、祝電披露があり、会場愈々盛上る。今月の月間賞は和歌山の富士光代さん。

（史好記）

（受付）与呂志・文秋・重人

（記録）射月芳・幸生

（司会）柳宏子・岳人

出席者 与呂志・天笑・春蘭・柳宏子・萬的・滋雀・鬼遊・寿馬・公一・雀踊子・比呂志・田鶴・垂弥・なみ・とも子・悦郎・重人文秋・メ女・春江・宏子・はつ絵・太茂津・美智子・弘朗・史好・冬子・いわゑ・年代・かすみ・春子・紫香・薫風・形水・三十四・凡九郎・水客・潮花・吸江・狸村・静歩・栗蘭幸・史子・兼治郎・登志代・きみ・光代・克子・勝美・弘生・喜風・只土・寿子・右近美恵・隆二・狂虎・柳伸・英子・幸・冬葉・千春・千代・みつる・泰子・花村・頂留子・規不風・洋敏・白兔・楓楽・蕉露・寿美・赤木和子・風童・律子・三男・豊太・公子・浦野和子・浩一郎・正子・トメ子・岳人・郁榮幸生・可住・藻介・景子・山久・満津子・道子・正坊・射月芳・度

席題「マナー」

川口弘生選

フルコースマナーの奴隷となっている。静歩

ワテンボすらせてマナー真似る無事浦野和子
さりげない手付きがマナーに合う佳人
先生を主人に持っているマナー
マナーからすれば怒りは無視される
他人の心覗く無礼はやめたまえ
マナーマナーどこで息抜きしまひようか
ハンドルのマナーへ妻子背負わされ
太郎と花子のデートの中にあるマナー
マナーなど言うなヨ楽しくはべようヨ
最高のマナー笑顔も忘れない
美しいマナーまっすぐ瞳を見つめ
結局はどちらだってもよいマナー
馬鹿になるマナーもちゃんと知っている
宇宙食星にマナーを問うてみる
舞い習ろた娘自然にマナー出来
ドライブマナー欠け人生の途中下車
手づかみのマナーに合わせて旅の美味
付け焼き刃のマナーで結納取り交わし
飼育マナーゼロでシヤム猫虎になる
外人に正座をさせてお茶の席
女系のお誂客へマナーも行き届き
蟹食べる時にマナーは言わないで
かあちゃんにレディーファーストなどしない
玄関の靴が揃えてあるマナー
父の座に明治のマナー生きている
亀の子にうさぎのマナー押しつける
紫を着こなす女にあるマナー
マナーの人が連れてゆく白い街
マナーの悪い女へB面に変えておく

水客 悦郎 弘朗 春江 雀踊子 紫香 楓楽 春江 かすみ 年代 いわゑ 宏子 公一 みる 寿馬 狂虎 年代 正子 凡九郎 寿子 三十四 凡九郎 郁榮 与呂志 柳伸 史好 馬

受付のマナーが会社の顔になる
大根がきれいに並んでいるマナー
マナーとは阿吽の呼吸だとおもっ
少しマナー外すと人間らしくなる
マナーから子供の親が見えかくれ
人間のマナー見つめる奇型猿
マナーから生れと育ちこぼれ出す
真心がマナーの穴を埋めさせる
幕閉めるときのマナーを大切に
左利きついいうっかりと睨まれる

席題「狭い」

奥谷弘明選

つき合いのまずいお方で狭く住み
極楽への道極端に狭くなる
狭くても四季の花咲く庭がある
広い家を狭い駐在所が守り
無精卵ばかりを産んでいる狭さ
追われているネズミは狭い方へ行く
狭い門へこつこつ靴も熱を持つ
国訛り話せば狭い世間です
すぐ怒る男で心の狭さ知る
愚痴言うてこころの狭さ覗かれる
通路がせまいと肥えた妻が言う
親馬鹿をキリキリ舞さず狭き門
人の世の情けが生きる狭い路地
共産党に狭い視野を指摘され
了簡が狭いと相手にみくびられ
娘持ち狭い世間と知る縁
視野狭い男に敵が多すぎる

いゝゝ 岳人 幸 雀踊子 春子 英子 楓 規不風 千代 弘生 右近 狂虎 正子 兼治郎 雀踊子 律子 なみ 柳宏子 悦郎 文秋 度 寿美 三男 果 冬子 弘生 雀踊子

過去の影引き摺り乍ら狭く住む
気の弱いのが傘上げる狭い路地
ミサイルにすれば地球も狭いもの
狭くともメルヘンへ続く道がある
階段の幅を自分で狭くする
狭いとこ好きなおんなで隅に居る
狭いのに集まってくる母の部屋
どの道を行っても狭い挫折感
内縁と言う名に狭い世間様
三帖に住ってカーで通勤し
大欠伸するライオンの檻狭い
かたくなに生きる父の狭い道
その狭い心捨てよと昼の月
狭い心で豊かな表情にはなれぬ
世間体などと狭い御子簡
大空へ狭い心は通じない
場内の狭さ嬉し入りに泣く
丹精が四季を彩どる狭い庭
太陽に心の狭さ笑われる
勤勉な蟻が住んでる狭い国
箸箱を狭いと言わぬ夫婦バシ
狭い方よいぞと新婚冷やかされ
狭い土地天地に伸びる外はなし
狭くても心豊かに生きる策

兼題「髪」

小出智子選

ひと想う髪は静かに濡れてくる
晩秋へ他人の髪は濃くなる
アルバムに髪房々の僕が居る

光代 右近 天笑 寿子 千代 天笑 郁栄 雀踊子 なみ 蘭幸 悦郎 幸生 規不風 春蘭 誦野和子 光代 かすみ 美智子 射月芳 寿馬 兼治郎 三男 弘朗 滋雀 岳人 蕉露

ああしんどすっぱりぬいだ高島田
髪洗う姿は武装を解いている
定年の日から白髪はつとかれ
向い風私髪を斬りにくる
いさかいのしこりをせめて髪洗う
断髪式男の涙見てしまひ
長い髪亭主好みを守りきる
平凡な顔が引き立つ日本髪
髪切ってスタイロラインの前に立つ
床あげを労わるように髪を梳く
一度だけ丸髷ゆうた日の記憶
染めあげ髪悲鳴がきこえそう
この髪を切ると亡夫が嘆きたらう
印象はあんな白髪で無かったが
髪染めてから亡母の心が解けはじめ
いさかいは息子バーマあててから
婚近き娘の黒髪が愛しい
長髪を言う生徒が騒ぎだす
髪型へ自分を隠しおおせるか
剃髪へまだ煩悩がゆれうごき
スランプの髪かきむしる夜の冷え
退院を許された日の髪を梳く
残り少ない髪に思い出溜めている
リクルートカットをなぶる不況風
若やいだ髪へピンクが着たくなり
一本の髪が真相喋り出す
その昔女の命と言った髪
初産の娘に労りの髪を撫で
流い髪過去にくずれる音を聞く

勝美 重人 三十四 千代 滋雀 垂弥 年代 狸村 泰子 潮花 春子 春香 紫蘭 柳伸 度 春江 凡九郎 登志代 かすみ 紫香 太茂津 楓 垂弥 天笑 雀踊子 春江 水客

栗色に髪染めて着る秋の服

丸刈りにしてから善人らしくなり

髪型を変えて大人の仲間入り

反骨のだんだん折れてきた白髪

女ごころ秋には秋の髪を結う

白いもの混ざり意見に耳を貸す

すり鉢の深さを知らぬ日本髪

髪をすくいつしか亡母の年を越え

素直にならなくて丁寧な髪を梳く

兼題「礼」

西田 柳宏子 選

失礼を重ねておして明日を生く

さりげない好意にお礼もさりげなく

妻へ言う礼はいつでも忘れかけ

礼状へまた礼状を書いている

お隣は礼儀よすぎて堅苦しい

せかせかと生きて出会えば礼ばかり

敬礼の文字に悪夢がよみがえる

判コ下さい宅急便で来たお礼

伝統の老舗で礼儀重んじる

黙礼にしようかあらも二人連れ

礼服をまとい他人の顔でいる

礼儀正しく葱坊主が並ぶ

礼状に添えた一首が目にとまり

遠い位置にいて一礼を忘れない

礼装をすると私でなくなるよ

礼をつくして男と男仲がよい

失礼を詫げる言葉妻が持つ

礼装は似合わぬ父で土に生き

満津子

与呂志

みづる

滋雀

宏子

律子

岳人

美智子

智子

唯駄

泰子

重人

律子

トメ子

太茂津

只士

滋雀

春江

頂留子

美智子

萬的

洋敏

寿子

智子

蘭幸

浩一郎

右近

掃命頂礼日課の朝のすずやかさ

ど忘れと言う失礼を詫びにくる

知らぬ子にお辞儀をされた村の道

俸せでお礼代りのボランティア

気掛り一つお礼も言えぬまま

礼すると厚意が無駄になりそう

礼を知る男に高い空がある

ロボットでないから素直に礼を言う

失礼にならない服を選っている

父の樹へひざまずく日が多くなる

礼状の中でライバル手を握る

いちまいの葉書で礼がつくされる

ふとある日妻に礼など言うてみる

ワレ俺の言葉の中にある礼儀

礼服を着ると夫婦が近くなる

父と子の芸談一線ひく礼儀

使い走りのお礼の藁が温かい

礼状の一字一字にある情け

他愛のない非礼に少し朝れくる

いつからか目礼をする朝の駅

礼などは言うなと友の手が温い

憎さも憎し礼儀正しいライバルで

用済んで仕舞えば礼が惜しくなり

兼題「舞」

若柳潮花 選

白寿まで舞うとはん女の立姿

いつもいつも怖いと思う舞台の灯

どんちようが降りても舞を崩さない

シテ舞の鬼気張って新能

なみ

天笑

紫香

泰子

克子

泰子

楓子

郁榮

柳伸

千代

岳人

幸遊

凡九郎

宏子

かすみ

弘生

浩一郎

水客

いわゑ

メ女

栗

柳宏子

会費

五百円（懇親会はありません）

主催

豊中川柳会

豊中市文化祭協賛

豊中市民川柳大会

日時 昭和58年11月27日(日)正午開場

場所 豊中市立螢池公民館

阪急螢池下車西50m四つ辻北20m

お話し

西尾 栗氏

宿題

眉 伊藤 入仙選

乱 尾谷 清風選

裏 金泉 萬葉選

像 高杉 鬼遊選

装 久保田 寿界選

炎 永田 帆船選

他に席題2題

各題2句 切午後1時30分

各題2句 切午後1時30分

華やかに舞うが淋しき父の独楽
能面が舞うと表情千々に見え
男舞女の性が透けて見え
男舞い帯のかたさをたしかめる
舞扇ヒタリときめた松ぞくし
舞い納め妻子の顔がかすみだし
浮世絵を抜け出たはん女の舞扇
檜舞台の男涙をためている
伝統を守る少年神楽舞う
薪能炎無眩の顔つくる
ご指名に一つ覚えの奴さん
連れ舞の子獅子へ拍手湧き起る
喜寿を舞うひとの確かな裾さばき
手古舞のお江戸が匂う男まけ
派手に舞う独楽の絵柄が見えすぎる
手拭いが生きている舞に酔わされる
情念の女を武原はんが舞う
肩揚げの瞳が澄んでいる舞扇
花道も無かった父の納め舞い
八十路をばなおひたすらにはんは舞う
舞姿師匠譲りの肩の線
舞扇女になつてくる月謝
眉引いて舞の心を整える
舞扇心配そつな舞台裏
春雨の要返しへ師匠の目
武原はん舞は命と雪を舞う
連れ舞のいずれ一人になる踊り
茶利舞いの他は知らないお父ちゃん
獅子舞は公民館で保存する

浩一郎
みつる
智子
雀踊子
幸生
登志代
浦野和子
蘭幸
かすみ
萬秋
文秋
柳宏子
智子
頂留子
公子
狸村
狂虎
冬子
春江
隆二
柳宏子
与呂志
なみ
重人
きみ
水客
泰子
太茂津
風童

血の滲む厳しさを知る舞扇
師の舞をぬすむ修業に耐えている
女舞終った男の汗になる
後見をはらはらせる初舞台
舞扇持つと家元鬼になる
能ばやし橋懸りから舞になる
試験舞半間はすしたことを悔い
兼題「富」
橘高薫風選
富める者買うと限らぬ赤い羽根
富と言う淋しいものを追いかける
経済大国お国の富は病んでます
大切な富を枕に安楽死
貧富の差寸志の額の違う事
富む人も貧しい人もどうせ死ぬ
これだけが自分の富と抱きあげる
村中の宝長老の知恵袋
どうしても富者に見える下ぶくれ
アルバムをめくる裕福な日の名残り
二坪の書庫あり僕はリッチマン
貧富など知らぬきれいな虫の声
富を得たとても厚い名刺入れ
富国強兵の夢は見てならぬ
麦めしと大根好きな富豪です
富豪の目金は貸さぬと言つことし
民富んで非行の舞台とといえるかも
ためている想い出富といえるかも
大富豪のつもりで現る宝石展
富み過ぎて心の底に鬼が住む

形水
雀踊子
雀踊子
形水
楓水
水客
潮花
射月芳
狂虎
萬秋
幸泉
みつる
幸一
風童
宏子
公子
美恵
正坊
登志代
浩二郎
隆二
道子
幸生
可住
田鶴
宏子
亜弥

人様のいやがる職で富を積む
富くじの頃にかわらず民貧し
一切を神にゆだねて出来た富
巨万の富抱いて影武者病んでいる
飽食の富ありはるか飢餓の国
金持になつて禁酒禁煙しはじめる
富国強兵明治の貌が見え隠れ
国債をばちばち買ったいる男
富裕税に縁ない顔と笑いかける
心富む日の雑巾を縫い溜める
成金の家は子供にでもわかる
金持は手の鳴る方へ顔向けぬ
国富めば次に兵器が欲しくなり
富持つ女糠袋離さない
心まで貧しくはない貝割菜
さわやかな富をいただく赤い羽根
刊務所の扉を歩いて築く富
トルコ嬢これが富豪とは知らず
巨富抱いて凡婦凡夫の顔を持つ
代々の富が小さくなつてくる
お囃話の末に長者が多すぎる
この町の長者番付手鼻かむ
一代の富ボンと吐く遺書を持つ
僕富レモン一個を棺に入れよ

千春
水客
弘朗
春江
きみ
吸江
三男
澤介
吸江
幸
なみ
郁榮
鬼遊
冬葉
英子
きみ
公一
幸生
水客
与呂志
はつ絵
年代
光代
薫風

■10月号掲載の58年本社句会全出席者名に、
妹尾春江さんが抜けていました。
訂正 10月号69P下段13行目
仏彫るノミで愛の字彫れますか

隆二

各地神壇

締切毎月末。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

整理・板尾岳人

尾浜川柳会

黒川 紫香報

山登り元氣な孫が先に行き

山のような空缶こんなに飲んだのか

山門に仁王夜でもこわい顔

山男 山の心を疑わず

里帰り富士の山だけ見て帰る

木を伐ると山がかなしい顔をする

まだ故郷に一本杉の山がある

カラ梅雨で泣かせ酷暑でまた泣かす

京の町祭りつづきで季が巡り

お祭りにダンジリが出る町に住み

幼な妻子供預けてギヤルみ興

夏祭りサンバ踊りで燃えつくし

火祭りが好きで鞍馬へ二度三度

昼寝の夢二階の三味に腹を立て

昼下り昼寝をそそる蟬時雨

むかしむかしこの山の湯で妻となる

娘を叱る母が炎暑に膝崩し

熱帯夜もう牛乳瓶の音

挨拶もなく早魃を嘆く母

野良犬も片脚上げる札を知り

よしつぐ

江美

光重

寧一

歌子

佳秋

紫香

寅之助

いわを

貞男

貞吉

保

清太

土岐

よしお

かつみ

弘治

すみ

昌子

新吉

風鈴よお前夏バテしないのか
たたんだり折ったり恋のハンカチフ

夢の助
牧郎

西宮北口川柳会

妹尾

春江報

神様が少女にチャンスくれました

チャンスには弱い男でやせている

明日会えるチャンスもあると枕抱く

意欲ない男チャンスが逃げて行く

もう一度チャンスを呉れた老課長

チャンスには弱い女が草むしる

ラストチャンス老人ホームで結婚す

冬眠から醒めるチャンスを逃すまじ

いいチャンス早速母に会わす彼

ちぎり絵のなかに沈んでいるチャンス

長電話逃げるチャンスの電話ベル

弁当は峠の上とファイト出し

決心がにぶる峠が近くなり

人形峠に怖いウラン棲む

峠茶屋の娘は広いファン持つ

女ばかり行商のゆく峠みち

出征兵士を送った峠にバス走る

桃源郷を信じ峠を越える蟻

馬子唄がほしい峠に霧かかる

峠から見るふる里は美しい

地球儀の何処に立ってもキナ臭い

お隣の金木犀が風に乗り

枯葉焚く匂いに古都のたすまい

ウー・マンリブ女の匂い封じ込む

硝煙が何処かに匂う世界地図

亡き人がほのかに匂う形見分け

汗匂う仕事着脱げば待つ暮らし

いたずらの風が匂いを持ち帰り

静子

きよ子

一郎

てる

幽香

冬子

みつ子

きよ子

伸子

婦美子

トシエ

飛鳥

紀雄

弘生

宏子

笑女

恵美子

春江

かすみ

杜的

日の出

清太

あき子

右近

すみれ

三笑子

キミ

ケチンボでとりいい米食べている
強情な父はやさしい医者に負け

かたつむり自分の速度でものを見る

亡妻を恋う男ひとりに風のみち

繁華街スリが匂うて来る刑事

線香の匂いにぎんげさせられる

中年の乳房が匂う軽い枷

シヤネル五番はいつも踵の高い靴

ボケツトに男はいつもな嘘を持ち

童心へふらりと誘う赤トンボ

異色とは大屋政子のことだろか

長持唄で届けたのが早や戻り

置き場所困る手紙をよう焼かず

素うとんで語ると至近距離となる

掌を返せば そこにいた女

わがあゆ川柳会

小砂

白汀報

老いし身も女ならこそ水かがみ

口ごたえ悪いことは知りながら

水飢饉龍王さまをいぶりだし

旅行から帰りわが家の水の味

七色にヨットは風を走らせる

水漏れて地割れの音する地球

水割つてハードな味もまろやかに

若水を汲む慣わしを守り継ぐ

一日が始まるコップの水を呑み

水の位置手洗水と神の水

水杯するとき涙など出さぬ

耐えてきた今日へ破水はせきを切り

靴べらが怖い話を聞いていた

植木にも生命わけ合う水を遣り

郁栄 しげお 叩駄 紫香 半歩 歌子 文平 水声 ベ女 美智子 眉水 伊三郎 春子 園歩 伊升 朝子 敏明 世似 ふみ 志保 輝水 秀穂 英子 民子 鈴江 歳栄 清泉 はるみ 美栄 恵美子

死に水がこくり鳴らしたのどほとけ

富柳会

藤田 泰子報

頼まれて困る神様普通の子

子を産みに行く人形にある後悔

後悔の眼に突き刺さるバラの赤

諸々の後悔帽子にとじ込めて

償いが出来ぬ男の手が白い

手の先に悔いためて行く虫の夜

手をかけて作りし花の美しさ

子育ての終わった母の手のかたさ

透折の友なら熱い手を伸ばす

てのひらに収まるだけの夢でいい

黄昏れて道ゆくの人とする別れ

アルバムの二人はいつか黄昏れる

黄昏の校舎にラッパの音響く

黄昏に待ち合す人帰る人

手の内は恋女房にも明かされず

たそがれの道へ容赦なく歩かされ

黄昏が少女を無口にしてしまふ

黄昏の背信妻も信じまい

砂浜に夏の後悔埋めてある

たそがれて心の落ちつきとりもどす

逃げ出したつもりがやっぱり手の中で

一緒なら流れてみたい雲の果て

川柳ささやま

河原みのる報

今日よりは他人となります綿帽子

亡き人の軍帽ツンと胸を刺す

美智子妃の帽子今だに日本一

ふる里へ帰る帽子が見つからず

三十年流れ作業の鉾を打ち

先急ぐ車の流れすきもなし

白汀

美緒

岳人

冬二

きぬ

美代

章子

千代

ケイ子

十歩

森子

為之助

美津子

恭子

幸一

慶子

富美子

与呂志

花佐子

花梢

泰子

トシエ

みる

素水

可住

はるゑ

流す過去多くてパイプつまりそう

この流れ持ち帰りたいや乾き畑

取り持つて一つ返事が悔まれる

知らぬ間に取り持つ緑で共白髪

新婚の唄がこぼれる流し台

遠火花寝窩の減った母と居る

つかの間の豊かさに酔う上げ花火

ひとり観るときの花火は私語を持つ

マアと言う二人花火で見付けられ

線香花火もつ芽生えてる恋心

岸和田川柳会

植山

あびる程のなんて消えぬ過去の疵

名人の背へ機械化の音せまる

出店の灯消えて目刺の香が残る

二枚舌ある日突然もつれ出し

責任を持たぬ女の軽い口

本殿の拍手別の音で打ち

水道の水音さえも涼を呼ぶ

水仙の私語カキツバタに打っちゃられ

配達途中でいいつも逢う美人

池高が敗れ神話の崩れる日

お月見のプランなりこれ広げられ

伸びたひげ気になり出した回復期

愛されて幸せという粗忽者

修身科再登場というチャンス

年金で暮すようこびと淋しさと

八月の暑さに耐えた痩せ蛙

適齢期選ぶ権利も主張する

無器用な孫でいとさ倍になる

祇園ばやしの鐘中世の音で鳴り

愚痴こぼす私に意見する私

久乃

靖子

百合子

米朝

テル

文平

和子

ゆう也

ひか平

宗珠

武助報

真柳

照生

春榮

狸村

ゆづる

礼子

希久志

富志子

浪速子

さよ子

こう

加代子

白光子

武助

射月芳

世界人

ひで

甘平

操子

川柳わかやま

堀端

三男報

駆け引きはあいそ笑いの中にある

退院日 両手に余る千羽鶴

下積み みの長さに光るいぶし銀

栄転の後を狙つて酌きにくる

はかどらぬ駆け引きに哭く北の海

真実は一つ駆け引きき幕穴はる

虚か実か駆け引きき嘘うっている鏡

駆け引ききへソロバン玉がじれてくる

酒癖を意見するにも酒を酌み

酌む程に哀調帯びて来る軍歌

満悦の上司と酒を酌み馴れる

憎い程客の意を酌み苦勞性

酌み交す酒に替ぬがされる

イーさんと酌がれて久しぶりの酔い

酌み交すピッチ上つて来た和解

悔いのない今日の手酌に味がある

探り合いながら酌み交う酒の味

母代り姉の哀しい地味好み

地味な色好んで秘密一つ抱く

地味作りひと際存在感を持つ

地味目でも妖しい鈴のぬき加減

地味だった人の艶種通夜の席

脇役で地味な演技で生きのびる

なにもかも地味で美人の妻が居る

妻の座を地味につとめている自信

地味な奢りに女匂わせる

生き方が地味で足音澄んでいる

地味に生き豊かな趣味に囲まれる

家康の誇り息づく地味な町

裕美

英子

柳宏子

信秋

寿子

和子

榮美子

武雄

登志代

太茂津

三男

豊太

信平

天彦

正博

三千代

克子

白光子

紀久子

凡九郎

公子

紀美女

幸

善太

正子

雀踊子

狂虎

光代

きみ

姑へ地味をすすめた勇み足
一日の心労酌んで話題選る
全快を祈る花束虹を盛る
そもそも暑中見舞いをもろてから

川柳塔まつえ

恒松

町紅報

一つ捨て一つ新たな片思い
連弾の脚の向うの片思い

目ん玉が下を向いての片思い
夏バテの食欲のない日を重ね

夏バテは妻の歳時記彼岸恋う
夏バテのうえに持病が顔を出し

重石になつてもよいと思つ日々
置き石が殺し文句を考える

投げ返す石は他人に見せられず
つまずいた石に心を重くする

石の角とれて母なる海に着き
奔流が刻んだ石に魅せられる

警官の靴もときどき弱音吐く
ボリさんと仲よく園児手をつなぎ

警官はマネキンだった交差点
警官が卒業式に待機する

警官も赤旗振りたいかも知れぬ
らしくない駐在さんで親しまれ

出雲和紙巧みな筆を添ませる
お人柄女らしさの筆のあと

目鼻立ち筆に委せている人形
筆まめに書いているのに誤字ばかり

書道塾みんな高価な筆を持ち
功成りて筆もきれいに潤ってくる

筆の先心の乱れ見抜かれる
町紅

尼崎いくしま川柳会

角野かず子報

十郎

茂子

柱子

照子

紫吻

孤呂二

舞枝

芳枝

運児

壯樹

多賀子

雄々

満江

ちかし

愚童

仲直りすれば本音で拗ねる妻
左巻きのくせに忘れず来る台風

台風目の静けさにある恐怖
宝くじ誰かが虹を渡つてる

台風がそれて見合いも無事にすみ
噴水の虹も入れたいかメライイ

母の胸水子の声をかみしめる
お中元届いたころをなつかしみ

いっぺんべ咲かぬ火花が騒がせる
赤線をやたらに引いた古い辞書

生活の水準の差が孫に出る
煙突の先に半分だけの虹

農やめて馬の帽子が掛けてある
台風に散るかのよう父帰る

借りた本某代りの反古も読む
ローン残る家を台風持つて行き

雨の午後風がベージを繰っている
あの山の向うの虹を信じよう

やせる本やつぱり無理とよく分かり
イヨマンテのメノコが踊る熊祭

父の忌に台風うまくそれてくれ
宝くじも当たつたら別れよう

虹の真ん中オレンジ色の白昼夢
虹を見てもみな出てゆく雨宿り

なにもかもあすけて虹の橋渡る
地藏祭り夜店へ先に浴衣の子

台風目の夕日にわが背高くなり
理想郷やたら欠伸のところで

京都塔の会

松川

杜的報

紫香

弘生

敏人

マスエ

晴子

紫香

清太

牧郎

郁栄

伊升

かず子

かね子

美智子

田中好啓古希祝賀

記念川柳大会

日時 昭和58年12月11日(日)12時開場

会場 倉敷市労働会館

倉敷市桶荷町5-38

TEL 0864-2510873

兼題と選者

好き(謝選) 田中 好啓

(未定)

紙 室田 千尋

耳 森中恵美子

月日 寺尾 俊平

紫 橘高 薫風

各題2句・締切午後1時

賞 優秀作品(三才)

記念品 好啓染筆色紙

会費 千五百円

懇親宴 終了後(5時頃より)

昼食は各自おすませ下さい。

主催 好啓古希祝賀実行委員会

かすみ川柳会

沖の石川柳社

杜

柳

会

社

柳

社

柳

社

柳

どこをどう来たかテラスの雨蛙
デッサンのままで女が残される
どの辺から来る香水が指定席
電話口他人行儀に嫁姑
星が皆引越さった大都市圏
親しさにハメを外した言葉尻
うたたねの母に新たな老いを見る
長男に生まれ長男という癖み
らんちゅうと泳ぎ出目金癖まない
すぐ癖む男で恋が実らない
口下手のひがみを庇う妻がいる
はじめから寝返るというヨミがあり
寝返りの隣りおんなの高いびき
寝返りの子へ手の届くところに母
寝返ればそこにいつもの顔がある
点滴へ寝返りしたい午後三時
寝返りの知恵でおもちゃへ手が届き
刻々の変化や雄々しい入道雲
入道雲むくむく羅漢今昼寝
僻んでもどうにもならぬ学歴さ
僻んでもどうにもならぬ学歴さ

翠洋会

中西兼治郎報

また聞きもここで立消え一軒家
大阪の色に染まって娘は帰り
恋歌が次から次と恋をする
読みもせず捨てもしないで溜る本
吊橋を渡れば聞えてくる恋歌
世につれてテンポの早い恋の歌
デッサンのモデルの若肌眩しすぎ
源氏の君溢れる恋を托す歌
染りたい思いして来る秋の空
サンングラスかけても海は光ってる

花代子 潮花 芳子 武庫坊 明代 孝江 弘生 麗水 水客 紅陽 三求 和友 飛鳥 年代 杜的 白漢子 巨詩 笛珠 美穂

書きとれば会得したよな安堵感
部屋中を私の色に染め上げる
菜の花句会 高杉 鬼造報

吊皮のひとつひとつにドラマゆれ
子のためになら火になれる母である
落ちて来た星をむかえる花の芯
首筋にドラマの跡を残してる
現金で退職金を一夜抱く
よろめきのドラマに遠くいる鏡
星占い少女の恋は吉と出る
落ち鮎に梁が待っているドラマ
腹巻の現金人を信じない
星の数ほどの中から妻一人
メロドラマセールスマンの声がする
現金に弱い女と酔っている
星の降る夜は異性がほしくなる
ヤジロベエが踊ると少し風が吹く
十四で火の粉を払う赤電話
星だけがじつと見ていた狙撃兵
近松でないがドラマにして見たい
現金を溜めて淋しい人嫌い
火の車せて夢など秋茄子
一つポツンと離れた星が父らしい
大根の値を考えてさんま買う
一番星みつけたそれから何もおこらない
傷つけた日から火花をもっている
踊りの輪抜けると深い闇に逢う
夏大根今に喜劇が始まるぞ
火を抱いて男を最く花時計
明日はもう東京へ発つ盆踊り
逢うドラマ別れるドラマ橋がある

綾子 みつ子 美乙女 右近 年代 与呂志 昭子 三男 勝彦 鎮彦 春露 蕉度 萬里 雀踊子 柳伸 武庫坊 頂留子 射月芳 冬葉 柳宏子 鬼遊 凡九郎 弥生 幸生 糸葉 美幸 シマ子 果

倉吉川柳会

渡辺 善句報

興奮は昨日で外野蜻蛉とぶ
標本のトンボ無念の私語溜まる
これが蜻蛉になるヤゴかグロテスク
トンボ追う子に父がない母が亡い
トンボの瞳を一寸借りて先を見る
宿題のトンボは兄等の賛となり
故郷の夢はとんぼを追った夢
大ヤンマ飛ぶな撃墜されちゃうぞ
列島へ秋を報せる赤とんぼ
人知れず蜻蛉帰りの朝もあり
のみこんだ言葉が胸で石になる
ヒマワリは言葉すくなく枯れてゆく
緊張のたび言葉が四角張り
美しい言葉で朝の皿を盛る
話せない仲間には生きた手話があり
物思ふ秋に言葉はいらぬもの
不用意な言葉総理の椅子揺らぎ
眼球を洗う虚しい日が続き
傷口を洗えば疼く泥の足
洗ったら落ちてしまった旅のシミ
くるくると昨日を廻す洗濯機
吉報を土産に提げた星帰りの日々
定年に吉報もない老いの日々
吉報を待つ妻床に菊を掛け
仲人の吉報らしいベルが鳴り
吉報の受話機離さぬ手の長さ
ワテンポおくられて新語一つ知る
川柳後楽 井上柳五郎報

油断して女の罠に又はまり
油断からからだ糸に足もつれ
車楽 雄々 布堂 秋女 ゆり江 しづ江 とめ子 善句 光枝 寿朗 文子 石花菜 貞山 菊枝 独歩 寿満湖 千秋 千秋 みなと 康子 荒介 民子 かつみ 弘朗 柳風 御前 松女 定平 和夫

あくびした猫がねずみを取り逃がし
油断した男地獄の絵図を見る

奥さんが家事より趣味を大事がり

奥さんは話が分かれるとおでたられ

奥さんに噂が堪えない過去の疵

奥さんと歩く月夜が明るすぎ

初対面コーヒー飲む手もふるえがち

コーヒーと誘った二人が深くなり

コーヒーは冷えて正論に熱が入り

朗読のテープを流すボランティア

読めぬせぬ英字新聞派手に持ち

読心術長けたお人でこわい方

目の毒を喜んで読む週刊誌

枝で鳴くカラスに読まれていた邪心

ハワイ川柳ウィロー社 市岡 曉舟報

弱点を突かれた後の慌てよう

弱点を見て見ぬふりで通りすぎ

弱点を突かれて上司苦笑い

指摘されやうと弱点目にとまり

弱点をもつて名利に金を貯め

弱点を此れ見よがしに馬鹿力

捨て切れぬ身の弱点はがゆくて

弱点は妻が背負って美しく

弱点を避けた一言身にしみる

弱点を笑って咎める夫婦仲

老夫婦弱点だけはかばい合い

弱点が噂となつて村八分

弱点をつかまれ妻に牛耳られ

弱点が邪魔して世間を狭くいる

弱点は弱点上手に生かして

目に見えぬ弱点あれこれ考える

弱点をさされ古傷痛みだし
川柳塔からつ

霊祭り一句出そうな友の顔

甲子園金の卵が二つ三つ

率直に笑いつく日の敵味方

太陽に近い山ほど残る雪

制服がくすくす信号色になる

お隣で申し訳しつて猫怒鳴る

年輪で申すのひと言名医やブとなり

マソフット太いヒップが泣き込む

今年の暑さ本当に参ります

五分間枕を借りる昼下がりに

クラーのつけを残して夏は去り

のら猫のわたしを甘く見縁側に

一握の土に朝顔しがみつ

川柳高知 川竹 松風報

井戸水に冷えた西瓜の味を食べ

香水の好みも変えた恋心

理髪屋の香水風ですぐ消える

古日記効い恋のあるページ

古きすも時効になつた茶吞友

香水の一滴お茶の席に出る

香水にくすぐられて夜のムード

香水もつけて上手に化粧終り

洗い髪涼しくなつて秋を知る

妖精のように香水匂う女

幼稚園書初めの絵は母の顔

家計簿を証とさせる物価高

肩車親の力を信じ初め

南大阪川柳会 中川 滋雀報

成り行きにまかせぬ男の導火線

雪女 義美報 虹汀

素石 久仁於

正敏 広幸

忠温 多々子

一彦 フユ子

紫泉 義美

ちよ 幸泉

菊野 青果

千鳥 千鶴

竹萌 草風

吉風 広風

松風 登舟

春枝 弘生

雀踊子

成り行きに描かねばならぬ男の絵

成り行きに任せておけばつぶされる

成り行きに任せば帰つてこなくなり

成り行きにまかせはかなしコップ酒

成り行きをじつと見守る気の配り

定年後日課の通り暮れてゆく

洗濯機妻の日課に動かされ

無聊感日課がバカに見えて来る

勉強というから反抗する日課

日課には主婦の昼寝もいれてある

前課長廊下拭くのが今日課

百までも生きる日課の竹を踏む

老眼鏡は読む日課果されず

温もりを一枚葉書からもらう

佳久地10選 (前月号から)

塩満 敏選

御祝と書く墨丸く丸くする

地球儀の尻に南極しかれてる

まっすぐでないから曲線面白い

天高し禁断の実熟れはじめ

毛虫にも空を翔ぶ日の夢がある

指切りの指は一番弱い指

お母さんどうして私のお母さん

パーセント降るか降らんかだけの事

錦着て帰る駅まで消えていた

歩には歩のブライド王手かけている

夢の助

智子

文秋

久美

勝子

蘭

凡子

雅風

頂留子

凡九郎

節子

章久

一三

郁雨

楓楽

温もりを母の背で聞く子守唄
出稼ぎへ温もり送るかたかなで
ゆつくりと温もりやすと京の宿
その温もりはアメリカンと言ふところ

絆には温もりがあるきつとある
裾分けという温もりが路地にある
どぶ板を鳴らして温い風が吹く
国なまり故郷の温もり感じられ

ヒゲのない猫に油断をせぬように
皮になつても猫は女の膝にのる
昼下り猫の欠伸をもらいうけ
祖母の愚痴猫に聞かして日向ぼこ

昼の間はアジトあるらし夏の猫
乗つてこぬ話お金のいるはなし
車買ふ親を乗せない車買ふ
平凡な愛で良いから貨車に乗る

一度ぐらい乗つてはみたい騙し舟
相鉋は打つが金には乗つて来ず
聴障川柳
稲田

子の髪をつんだ昔の錆鉄
紅白に鉄が入り拍手わく
お隣へついでに一と枝花はさみ
秋空へ剪定鉄の冴えた音

あなたにその愛をあげたい花鉄
古鉄やより上手の老婆という
緊張のあまり鉄の裁ち違い
火鉄が一日奉仕の屑拾い

庭の木を見よう見まねで枝を切り
切紙は鉄一つの使いよう
繕いに錆びた鉄を選ぶ祖母
流線型髪をみじかく切つてゐる

滋雀
千梢
覚然坊
恒明
醉々
千代三
寿美
喜美子
柳伸
眉水
善信
喜風
弘生
慶三
白兔
公一
悦郎
豊作報
豊野
一眺
たかお
文吉
民栄
早苗
三代子
紫葉
常雄
高塚
みつる
八恵子

花鉄未練の絆切れますか
切る枝を花から学ぶ花鉄
髪切つて心のほすむ出勤簿
晴着裁つ鉄に鼓動盗まれる

新茶摘む機械鉄に唄がな
娘に着せる夢がふくらむ裁鉄
蟹ある夜鉄を父に向けて寝る
胎動へしばし休める裁鉄

思慕の糸切れず鉄が泣いている
南海電鉄川柳部
広井すえお報
セールスは社名はこりて腕みがく
原稿料貰いに往けば変更した社名

八代の続く社名に紺のれん
社名入りタオルを持つて挨拶に
社名より商品名がよく知られ
税金をうまうごまかすという社名

税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名

税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名

税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名

税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名

税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名

税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名

税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名
税金をうまうごまかすという社名

とみ江
鼓草
たみ
千代女
和江
実香
承平
豊作
いづ枝
覚然坊
勝美
磁波
圭水
花仔
しづ子
すえお
山久
信江
春蘭
東雲
悦郎
岳詩
秋月
紅月
白李
大鷹
実男
葉香

とみ江
鼓草
たみ
千代女
和江
実香
承平
豊作
いづ枝
覚然坊
勝美
磁波
圭水
花仔
しづ子
すえお
山久
信江
春蘭
東雲
悦郎
岳詩
秋月
紅月
白李
大鷹
実男
葉香

とみ江
鼓草
たみ
千代女
和江
実香
承平
豊作
いづ枝
覚然坊
勝美
磁波
圭水
花仔
しづ子
すえお
山久
信江
春蘭
東雲
悦郎
岳詩
秋月
紅月
白李
大鷹
実男
葉香

とみ江
鼓草
たみ
千代女
和江
実香
承平
豊作
いづ枝
覚然坊
勝美
磁波
圭水
花仔
しづ子
すえお
山久
信江
春蘭
東雲
悦郎
岳詩
秋月
紅月
白李
大鷹
実男
葉香

とみ江
鼓草
たみ
千代女
和江
実香
承平
豊作
いづ枝
覚然坊
勝美
磁波
圭水
花仔
しづ子
すえお
山久
信江
春蘭
東雲
悦郎
岳詩
秋月
紅月
白李
大鷹
実男
葉香

とみ江
鼓草
たみ
千代女
和江
実香
承平
豊作
いづ枝
覚然坊
勝美
磁波
圭水
花仔
しづ子
すえお
山久
信江
春蘭
東雲
悦郎
岳詩
秋月
紅月
白李
大鷹
実男
葉香

とみ江
鼓草
たみ
千代女
和江
実香
承平
豊作
いづ枝
覚然坊
勝美
磁波
圭水
花仔
しづ子
すえお
山久
信江
春蘭
東雲
悦郎
岳詩
秋月
紅月
白李
大鷹
実男
葉香

とみ江
鼓草
たみ
千代女
和江
実香
承平
豊作
いづ枝
覚然坊
勝美
磁波
圭水
花仔
しづ子
すえお
山久
信江
春蘭
東雲
悦郎
岳詩
秋月
紅月
白李
大鷹
実男
葉香

とみ江
鼓草
たみ
千代女
和江
実香
承平
豊作
いづ枝
覚然坊
勝美
磁波
圭水
花仔
しづ子
すえお
山久
信江
春蘭
東雲
悦郎
岳詩
秋月
紅月
白李
大鷹
実男
葉香

とみ江
鼓草
たみ
千代女
和江
実香
承平
豊作
いづ枝
覚然坊
勝美
磁波
圭水
花仔
しづ子
すえお
山久
信江
春蘭
東雲
悦郎
岳詩
秋月
紅月
白李
大鷹
実男
葉香

とみ江
鼓草
たみ
千代女
和江
実香
承平
豊作
いづ枝
覚然坊
勝美
磁波
圭水
花仔
しづ子
すえお
山久
信江
春蘭
東雲
悦郎
岳詩
秋月
紅月
白李
大鷹
実男
葉香

喝采はなくとも妻の酌が待つ
明日嫁ぐ娘の背を流す妻無口
雑草を分けて小さい句碑を見る
大臣の発言すべて秘書まかせ

人の良いところはやっぱり親ゆずり
始めから泳ぐ気のない水着買つ
河鹿鳴く友と聞き入る有馬の温泉
これぐらゐまだまだ縫える老眼鏡

伝統の家風を嫁が変えて行く
なれそめのロマンス語る酒の酔い
母の日に嫁の真心うれしくて
姉さんと呼ばせ成る程若く見え

駒つなぎ川柳会
里
僕だけの心の中にある祭り
背のまるい案山子はきつと父だらう

宣誓をする若者が嘘はない
祭りの娘赤い鼻緒がきつすぎる
孔子の背みつめて弟子があるいてる
休日の小さな背中はババが追う

年輪の言葉若者気に入らず
やり直さなく特権がある若さ
若者との距離がだんだん遠くなる
山小屋で明日のブランをねるヤング

荒れた海若者たちはたじろがず
若者がこ脇に抱いているマンガ
若者に目的を絞つた模様姿え
献血車出た若者に見た笑顔

若者とはながし合わぬ父の独楽
合宿は若さで食べる皿の数
日陰でもよいと一途な恋心

越山
悲子
笛珠
永楽
信夫
遊児
みつ子
とし
サワ子
輝月
みね子
客遊子
小路報
凡九郎
信治
千代三
雀踊子
冬葉
醉々
柳石子
萬秋
文子
凡子
春蘭
不二夫
重人
天笑
桐下
浩一郎
邦晴
頂留子

絵日傘が作る日陰は恋の風

折角の日陰ハチまで涼みに来

生涯を日陰の愛でつらぬきし

緋毛氈日陰に茶店の娘の愛嬌

タボシヤツのオッサンがごろ居る日陰

日陰の子母より強い意地を持ち

視野広く日陰の女強く生き

白い花日陰に万両つつましく

日陰にはようどつ上がらぬ顔並ぶ

日陰でもない河内平野を行く電車

都市砂漠ビルの日陰の地蔵尊

紫陽花が心変りをした日陰

とびすぎたタンポポ悔いている日陰

生涯を日陰で耐えた座りダコ

路地裏であらくも堪えるドブの板

お隣と日陰になってからの溝

すすくすく育ち日陰に負けていず

戦争の傷跡残す写真展

人のふりながめて自分のふりかえり

大風呂敷広げる程は沓えぬ腕

シクナルの黄色にエゴが裁かれる

旧姓を守るつもりはないものを

このバナナもう二、三日寝かせとこ

旧姓になってぐつと若返り

くちばしの黄色いうちは許される

明快な答えを返す沓え人

山吹の黄色に里の母が住む

したたかに生きるとキリン草が言う

人知れず学んだことを糧として

柳 伸

弘 生

美津枝

規不風

恒 明

悦 郎

信義

勝 公

翠 美

花 仔

眉 水

善 信

一 歩

美 代

美 幸

白 兎

小 路

柳 宏子

節子報

喜美子

頂留子

勝 子

寿 美

柳 伸

ハル子

久 子

千里

智恵子

藤 子

洋 子

好 子

写真から旅の余韻が匂いたつ

好きな娘にはかりヒントを合わせてる

見つめれば写真がしゃべり出してくる

旧姓のもう一人が花生ける

旧姓で呼びとめられた村はずれ

事のはじまり写真に騙される

打吹川柳会

奥谷

初盆のちようちんよりも金を呉れ

お盆来て友の遺作が語りかけ

迎え火をせめて大きく仏待ち

古里に帰るお盆へ指を折り

迎え火をたいて黄泉路の母を恋う

初孫を亡母にみせたい盆の客

爆音をたて棚経の若和尚

労働者権利になった盆休み

兼業農益だ正月言うとれず

親踏みし同じわだちを我も行く

親子でも歩幅の礼儀あの世まで

一つの世も親子の意見少しずれ

結局は親子の絆でつなぎとめ

良心を捨てた札東地位狙う

大物に成って良心置き忘れ

決別の最後の握手血が温い

熱戦の後の握手のさわやかさ

おの握手忘れた市政氣に入らず

貰いの握手に成り切る六ヶ敷さ

川柳しんぐう

川上

片寄らぬ判断第三者に任す

片寄れば落ちる私はヤジロペー

片寄りの不満がたまるコップ酒

球運が西に片寄る甲子園

妙 子

楓 子

秋 子

芙佐女

智 子

節 子

弘朗報

亮 二

梅 朗

高 代

雄 々

節 子

秋 草

柳 風

弘 生

笑 王

寿満湖

みをき

康 子

孝 美

文 子

佳 成

春 帆

志 子

宗 則

弘 朗

川上

まさ子

潮 花

雀踊子

三 男

第7回

寝屋川市民川柳大会

とき 昭和58年11月3日(祝)

午後1時開場

ところ 寝屋川市立総合センター

4階図書館自習室

京阪電車寝屋川駅下車、バスターミナ

ル③乗場より総合センター前下車

おはなし

西尾 栞氏

題と選者

虎の子

丹波三千子選

海外

辻 一弘選

隣

榎本 信治選

悪人

高杉 鬼遊選

もつれる

西田柳宏子選

雑用

伊藤千代磨選

横顔

橘高 薫風選

出句 各題共2句、メ切2時

(開会と同時にメ切ります)

投句は受け付けません

賞 費

千円

秀句には実用的豪華賞品と参加

賞

主催

寝屋川市文化会川柳部

後援 寝屋川市教育委員会

身勝手な噂が本音かも知れず
子を看とる母は不死身となつて耐え

活造り不死身の鯛がまだ動き

不死身にも弱点はあるアテランス

不死身かも知れぬ舞台の斬られ役

不死身かと思ふ手相で役立たず

達筆へ期待ふくらむのし袋

のし袋もつ他所行きの顔をする

分相応ころも添えるのし袋

のし袋厚みで夢を抱かされる

のし袋くらしに合つた金を入れ

亡母のものを整理して居り遠花火

花火師の命夜空に燃えつくす

人生がしかけ花火で終るなら

花火にも似た人生を悔いていず

不発弾花火の中の落ちこぼれ

川柳大阪

田中

約束の夜店へ孫がせきたてる

向い側ベンチが気になる若さあり

青梅をつけて女房の味がある

野において官の務めの甘さ知る

此花で酸素はしがるかぶと虫

旗振つてわめく衆愚の中に居る

旅の恥何回行けど繰返し

西瓜割りバットの先が毒味する

占いはただ吉だけを貰いうけ

孫あやす妻の笑顔は別人で

国宝と聞いて落書きしたくなり

落書で心のうさを晴らしてる

落書で胸のうつぶん少し晴れ

公衆のトイレ落書花咲かり

与呂志

十郎

金太

大輪

千寿子

すみれ

英子

正子

公治

澄孝

よしほ

平和

富子

富子

富子

富子

富子

富子

富子

富子

富子

富子

富子

富子

富子

富子

富子

富子

富子

富子

ふる里に少年の日の落し書き
半分は口で勝つてる草野球
出塁はデッドボールが一度だけ
燃えてきた女心を消す男
信仰が芝を誂経の声をしむ
狭い日本ピアノも犬も住みにくい
ボタン押す怖さを知らぬ孫の指
書きなぐる落書帖にある真実
冷蔵庫いっぱいにして孫を待ち
落書も古墳時代でまく話題
倅せがこぼれていいます電話口
まだ生きています凡々たる暮し

にた川柳会

西村

早苗報

暑い日も熱いうどんの好きな母
糸切れた三味線久しく気ののらす
ナイターがすめば安堵のお茶を入れ
五十年添うてこんなとこ黒子
名乗らないままで馴染んだ旅情
詰腹も切るさわやかな責任感
加賀様は松が好きなり兼六園
何事も無かつたような飛行雲
逆転又逆転熱狂させて幕
大モノが約れる予定の糸を垂れ
弥陀の胸信じてのぼる寺の坂
人工呼吸へかなぐり捨てた無神論
期待して出たに旅連れめぐまれず
月の暈あしたは逢えるかも知れぬ
家守の名木よりも米の蔵
うらみ節いまも女はひとりとか
工夫一つせずに使える物を捨て
肩抱けはすべてを許す目が恐い

洛 醉

比呂志

みつる

敏

三十四

君枝

喜醉

醉花

重人

天平

笑風

与呂志

早苗報

登美也

きみえ

孝華

独仙

多賀子

栄

宗則

裕

幸一

花子

夢子

寿美子

留守番が酒とつまみで昼を終え

米子きやら木川柳会

石垣

花子報

とも子

千春

美世

あい子

花子

品子

日枝子

みど里

なみ

瑞枝

千代

田鶴

敏報

塩満

偶谷義一

伴子

隆

美代子

隆二

吐来

喜代子

みつる

寿美

只士

末一

阿衣

秋風が夜明けにふとんかけに来る
すすきの穂秋が来た来た風にゆれ
人影も消えて砂丘も秋を知る
めぐる李へ手なれた老母の栗御飯
しつける李に現れた老母の栗御飯
がむしやらに生きてるべければ秋に入る
秋の陽の短かき化粧が間に合わぬ
あえぎ疲れた父へひっそり秋が寄る
秋の陽が傾きそうて旅に出る
桐灰の匂い確かに老母の秋
傷はきずのままに澄みきる秋のガラス
曼珠沙華秋よりとさわざたて

川柳はびきの

塩満

くらうは苦手団扇で育てられ

渡りたくない信号を待っている

四面楚歌先ずネクタイを締め直す

乳母車自転車車霊檻車

風の旅恋する人はいませんか

中流の目がゼロ一つ読み落し

一雨が今宵涼しき運んで来

特急のフアンに成つたかたつむり

不甲斐ない指からもれた愛の砂

子の居らぬ部屋に人形大きすぎ

カメラマンチャンス逃して無言なり

病根を胸のおくからふつと吐く

茶柱が立つて縁談急かされる

熱帯夜会社が避暑地と思う日々

そと孫が浴衣と帯を見せに来る

枝豆で済ます友ならどつと来い

喜代子

三千代

司

美恵子

阿衣

喜醉

喜醉

喜醉

喜醉

喜醉

喜醉

八月の暑さに無沙汰を思い出し
定年と知らず会社へ行けと孫

甲子園逆転の砂握りしめ
姫になるガラスの靴が見あたら
釣竿の長さ隣の咳払い
人文字が描く隣志の十五歳
終業ベル同じ服から解放され
濁流も葉末の露も同じ水
思い出に彼と同じベンダント
サービスの良さに引かれる旅の
被爆者の傷を暴きに風見鶏

城北川柳会

久し振りに友と子自慢孫自慢
久し振りに君の笑顔に嘘はない
久し振りに隣の人と顔合わせ
他人から理想家庭と羨まれ
久し振りに夫婦手を取る水溜り
紅なでしこ一輪咲いて和まされ
思っまい言っまい嫁は嫁である
空廻り高い理想は夢の夢
戦友と銃を持たない伊豆の旅
久し振りに和服の袖へ手を通す
久し振りに石庭で聞く通り雨
ジャンパーが天国だった檻の猿
歓楽街老いてだんだん遠くなり
欲し振りに快音原のホームラン
真青な空へベタルも軽くなる
動哭の遺族へ遠慮ないマイク
母逝きて明治の女一人減る
育児法根負けをして抱き上げる
理想なら誰でも言える披露宴

野

働いた汗が理想を膨らます
久し振リ電話の主にとまどいし
久し振リビールが旨い病み上り
今の世は裏を返せば蟻地獄
ひと駅を乗り過ぎて居た久し振リ
あちこちに枕ころげて居る残暑
理想には遠いお方と五十年
戒名で呼ぶ母の顔遠くなり
八紘一宇理想に散った友の墓
理想郷暮して見れば出る不満
ショーマンへんこつも居る芸の虫
空蟬よ我は戦艦大和なり
久し振リ暗記する程読む便り
結論の出ぬままタリヤ散りはじめ

花柳ねやがわ 高田博泉報

白い川つねて日蔭に草の意地
妻の留守あくびをしてる台所
セールの饒舌犬も欠伸する
空梅雨に梅漬けラッキョ新しょうが
ハンマーが意欲と自信打っている
肩書がふえて名刺が重くなる
山男に惚れて結婚した娘
よく笑う娘に銀の靴あげよう
肩書をとるとすんなり丸い背な
白髪染めの業も染めている
すっぱいと嫁にゆずった台所
うるこ雲きれいな大金主ごいなあ
花だけでテーブルキラリ光ってる
糸切れた風船児てる一人っ娘
空間を支える男に肩がない
なぜかしらひとり言いう台所

笑風 八重義秀 利月茂樹 右近歩 静子 道子 公一 悟郎 弘生 新津 満津郎 婦美子 晴風 柳安子 キミ 柳歩 弘生 眉平 鉦歩 静歩 てまり 亜也子 正よし 小六 摂子 度 亜鈍 あやめ

募 集

一月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
 水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
 愛染帖 (3句) 橘 高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「流行」 中村 ゆきを 選
 「指定」 小林 孤呂二 選
 「決心」 錦 織 文子 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
 ★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

二月号発表 (12月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
 水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
 愛染帖 (3句) 橘 高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「コンビ」 宮 園 射月芳 選
 「歩く」 政 岡 日枝子 選
 「素人」 森 井 菁 居 選

★愛染帖・課題吟へは同人誌友を限らず。
 ★用紙は川柳塔社柳箋をご利用ください。

11月の常任理事会は1日(火)

定価 五百円 (送料50円)

半年分 三千二百円 (送料共)
 一年分 六千三百円 (送料共)

昭和五十八年十月二十五日印刷
 昭和五十八年十一月一日発行

編集兼 発行人 中 島 蓬 太 郎
 印刷所 藤 原 童 心 社

〒545 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川 柳 塔 社
 電話 (六六九) 一六九一 四番
 振替口座大阪 8133368番

香川酔々追悼本社11月句会

日時 十一月七日(月) 午後六時
 会場 なにわ会館

兼題
 「おはなし」
 「昇る」
 「酔う」
 「川」
 「香」

席題 二題 当日発表
 各題三句以内厳守

西尾 栞 選
 高杉 敏 選
 塩 満 選
 飯田 悦郎 選
 西田 柳宏子 選

天王寺区石ヶ辻町19-12
 地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
 電話 06・772・1441番

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

12月の兼題 「変幕」「動物」「禁」

12月の本社句会は7日(水)

年賀広告受付!

★一口五百円 (タテ3・3cm×横5cm)
 本誌五段組の一段分が二千五百円です。

★原稿締切 11月25日

★送り先 八尾市中田二一三〇二 高杉鬼遊方

川柳塔社会計室

～送金は郵便振替(大阪 8133368 川柳塔社宛)をご利用下さるのが安くて便利です。

川 柳 塔 社

編集後記

☆酔々が死んだ。何かにやさしい心遣いをする男だったが、物事に筋を通し、ちやらんばらんを嫌った所は大正人間の典型だった。

☆九月二十二日容態急変の連絡があったが、私は長女の出産間近とあって産院で腰をさすっていた。夜遅く帰宅して知り、鬼遊さんに電話で詳しいことを聞く。

翌二十三日は出雲への川柳の旅へ出発の日、早目に家を出て酔々を見舞う。七時前までいたが、すでに吐く息ばかりの気配がした。彼は四時間ほどの後に息を引きたる。酔々の額に当てた手が脂で津和野に至るまでネチネチしていた。

☆初孫が前夜の十時に生れ親友が翌日夜十一時過ぎに死ぬ。私の初心時代の句の「病院に降る雪生ると死ぬと」を思い出していた。

☆酔々は句集を出そうとしていた。題は「光背」、近頃とみに淋しい句を作っていたし、後になって気付い

た彼の最後の編集後記も、般若心経に触れていた。

☆酔々に私は二百円の借金がある。川柳塔の事務所で借りたそれは柳塔の地下鉄代だった。そしておかしい出来事があったのだが、長くなるので書かぬ。二百円ので借り倒すことにして、缶ビールを買って墓に掛けに行くことにする。

☆編集の四人は机の四本の脚のようだった。三脚でも安定はするが四人の方がいいことが多い。編集部は当分、交通事故に会った犬の歩きぶりの様になりそう

だ。

☆川柳塔社の幹部がつきつきと病に倒れた時期があったが、編集部に崩雪現象が起きぬよう戒め合っている。

☆酔々よ、どうか安らかに。☆特集にアンケートを組んだ。自信句に路郎賞受賞作品を挙げられたのはたった一人なのは意外だった。

☆十一月本社句会は香川酔々追悼会です。お誘い合せ

の上ご来会の程を。

(薫)

▼九月のある日、皆生温泉の宿で米子の柳と夕食を共にした。たまたま「おしっこの薫風」「うんこの鬼遊」の語が飛び出し、その奇抜な発想に食事中であるのも忘れ嬉しくなった。前者は、薫風さんの第三句集

「肉眼」の掲載句「草の芽が出たぞ おしっこさせながら」が源であり、後者は「薬屋でうんこのかさな

ど申し」が因であることがわかった。句のよしあしはともかく、口の端にのぼる口面性が川柳の魅力かも知れない。

▼夕食のおかずが事前に判っているし、興味で半減するもので、膳についてわが目で的確の方が楽しみがあってよい。これは男の勝

手さで、主婦は日夜おかずで苦労している。これとはすこし違うが、句はわが耳で聞き、わが目で読む方が感激も新鮮である。勿論読むだけでなく日夜作句の労

を重ねるべきではあるが。

▼九月号のこの欄で、牛肉のことを書き鶏肉の悪口にも及んだ。ところが過日、

和歌山の柳からホンモノの鶏肉を届けて下さった。食物にはそれぞれ調理法があ

って、生食の次に焼く方法がその持味を生かせるように思う。私は素焼きにして辛子醬油で賞味した。正

にホンモノのかしわの味である。袋には〇〇〇の鶏肉、正肉五〇〇gとあり、生産者は戦後間もなく新生活運動の実践を展開したヤ

マギンズムだった。

☆酔々さんが亡くなり、編集後記を3人で埋めねばならなくなった。ひとにしん

ど目をさせておいて、本人は今ごろ六道の辻とかで振舞酒に酔い痴れているのであろう。も少し酒を慎んでおれば―誰しもの思いだが、それも空しい繰り言。たとえ酒をのまずとも64歳の寿命だったのかもしれない。☆健康管理というのはむづかしい。僕が世話になつて

うな「長生十訓」が貼つてある。

(1)少肉多菜 野菜を多くすると肥満を防ぎコレステロールの増加を抑える。

(2)少塩多酢 塩辛いものを控えるは高血圧予防の常識

(3)少糖多果 糖分のとりすぎは万病のもと。

(4)少食多咀 腹八分目。美食大食は金がかかるだけ。

(5)少煩多眠 睡眠不足は美容と健康の大敵。

(6)少怒多笑 笑う門には福来るといではないか。

(7)少言多行 口先だけでなく実行。健康法も講釈をいくら並べても実にならない。

(8)少欲多施 欲深はケガのとも多欲少施がこの頃多

き。

(9)少衣多陽 薄着で太陽の恵みを十分に受けること。

(10)少車多歩 なるべく車はやめ、歩け歩け。

☆以上極めて常識組、至極ごもつともな訓えだが、どういうわけか酒のことは触れてない。大いに飲んで彼の冥福を祈ろう。

(史)

昭和四十二年一月九日 第一種郵便物認可
昭和五十八年十月二十五日 印刷
昭和五十八年十一月一日発行 (毎月一日発行)

菊正宗



料理がいきる
辛口の本格派

生酃辛口



菊正宗

きもとからくち

神戸・灘
菊正宗酒造株式会社

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ





ほうらい



TEL641-0551